

エミル心霊探偵事務所

第二話 月の子どもたち

登場人物一覧

能流登エミル
主。

鷗星中学3年ののっぽの女子。スイス人の血を引く霊的能力の持ち

高村見太郎

エミルの小学校からの同級生。涙もろく、あわてんぼう。

高村勇貴

見太郎の弟。代々木西原小学校6年。読書好きの賢い少年。

《シェアハウス「ケプラーハウス」の住人たち》

安藤梨伊菜

鷗星中学の保健の先生。28歳。ニックネームはアンジー。

小山ルミ

絵本作家。透視とテレパシー能力を持つ。

天道さん

プロの占い師。ケプラーハウスの最年長のオジサン。

大澤さん

プログラマー。幽体離脱の研究者にして空手初段。

亀田さん

通称カメさん。精神科医を目指す医大生。

セーヌ川

本名アンリ・バタイユ。写真家。遠隔透視能力を持つ。

村松さん

神秘哲学研究者。みんなの思想的支柱となるオジサン。

佐藤さん

ケプラーハウスの家政婦さん。

能流登佳子

エミルの母。画家。

能流登リリー

エミルの祖母。

グスタフ・ノルト

エミルのひい祖父

安田翔一

エミルと見太郎の同級生。エミルの親戚に当たる。

安田翔二

翔一の弟。超有名中学に進学したが現在は少年院に。

鈴木一輝
年院で更生中。

エミルたちの小学校の同級生。不良仲間の一員だったが、現在は少

鈴木麻里

一輝の姉。高校2年生。両親とうまくいっていない。

鈴木絵美子

一輝と麻里の母。かつてムーンチャイルド教団の熱心な信徒だった。

ジル

麻里のボーイフレンド。画家を目指している。

緒形大三郎

ムーチャイルド教団の教祖。

西条伊織

勇貴の同学年の男子。2階の教室から落下して死ぬ。

西条詩織

伊織の姉。エミルたちと小学校が一緒に同学年だった。

西条哲織

伊織と詩織の父。会社を退職した日に失踪。

神園田

西条哲織の上司。

神園田直也

神園田のひとりっ子。西条伊織と同じ小学校。

隼田美紗
隼田守杜

中学1年生。守杜の妹。
高校3年生。隼田美紗の兄。

その悲しい事故が起きた日以来、彼の幽霊を見たとか、誰かに背中を押されて階段から落ちそうになったのに周りには人影がなかったとか、誰もいないはずのトイレから不気味な声が聞こえたとか、そもそもその子の死は呪いの動画を見たせいだとか、学校中がそんな怖い噂で持ちきりとなった。

高村兄弟の弟は、自分の通う小学校でのそんな噂を兄に話すのは、亡くなった隣のクラスの子のことをお化けみたいに侮辱することだと、そう思っていた。だから、自分が実際に恐怖を味わうまでは、事故があったという話はしたけれど、それ以外のことは一切口

にしなかったのだ。

それは夏休みが始まる2週間ほど前の7月6日土曜日のことだった。

土曜日授業が終わって教室の掃除当番をこなし、それから高村勇貴は図書室に行って本を返し、新しくまた本を借り、そしてひとりであわばきをロッカーに入れ、スニーカーを置いて校庭に出た。お昼の太陽が真上から降り注ぎ、勇貴は一瞬、まぶしさにくらくらして立ち止まった。目が慣れてから、ポートボールクラブが練習している人工芝の校庭を回り込んで、南門がある体育館の方向に向かって歩いていると、向こうからだれかが一生懸命に走ってくるのが見えた。茶色のカーゴパンツに青いボーダーのポロシャツを着て、ランドセルを背中で上下に揺らしながら、その男子は忘れものでもしたのか、ものすごい勢いで走ってくると、勇貴の横を通り過ぎて東玄関のほうにそのまま向かっていった。

勇貴の顔を見ることもなく一目散に走り去ったその男子の清潔なハンカチみたいに整った顔に見覚えがあった。あれは誰だっけと振り向くと、玄関の中に消えていく男子の後ろ姿が見えた。起きたことはそれだけだった。そして足の裏から突然始まったふるえが頭のてっぺんまで一気に駆け上がったのと同時に、勇貴はその走り去った男子の名前を思い出した。西条君だった。隣のクラスである6年2組の、先週の土曜日に2階の窓から落ちて

亡くなった西条君だった。

見間違えるはずがない。でも、確かめるためにもう一度校舎に戻るのには恐ろしかった。反射的に勇貴の視線は西条君のクラスの教室の窓に向かった。東玄関の真上の教室から左に二つ目の教室。窓ガラスが正面にある体育館をゆがめて映し出していた。ちょうど教室の後ろのほうの窓に男子の顔が小さくのぞいた。

今度はハッキリと勇貴を見つめていた。

じっと、笑顔を浮かべて。

ちょうどその窓から落ちて亡くなった西条君が。

勇貴は何か見えない腕にからめとられたように、西条君の小さな顔から目をそらすことができなかった。西条君はやがて後ずさるようにして窓辺から消えた。

ポートボールクラブの生徒たちの歓声が聞こえて、勇貴は我に返った。まわりを見まわした。誰も西条君に気づかなかつたのだろうか。ポートボールクラブの練習は楽しげに続いていたし、数人の女子の生徒が西玄関の階段に座り込んでオシャベリをしていた。

勇貴は早足で校庭を抜け、1年生が植えた朝顔の鉢が並ぶ南門を出ると、家に向かって走り出した。

エミルのひい祖父であるグスタフ・ノルト博士が戦前に創設した病院だったという、大山町にあるケプラーハウス。その、砂岩でできたアーチ型の門を高村兄弟がぐぐったのは午後8時15分ごろ。父さんのこしらえたカレーライスを兄弟そろっておかわりをしたせいで約束に15分遅れてしまった。

いつものように勝手に玄関にあがってスリッパにはきかえ、パタパタンパタパタンと2人分のスリッパの音を黒と白の格子模様のリノリウムの長い廊下に響かせて、『ESTJ』の文字が描かれた、同じ私立校の同級生であるエミルの部屋のドアの前を通り過ぎ、奥の食堂の大きな木の扉をギーッと開けると、予想通り、ほぼ全員が集合して夕食後のコーヒーを飲んでいた。

エミルが振り向いて、遅刻をとがめるようにプーッとふくらませたその頬に向かって、「遅くなってゴメン」と拝むように両手を合わせた中三の高村見太郎のうしろで、小六の

弟が扉を後ろ手でそっと閉めた。

弟はみんなの顔を見まわし、誰がいて誰がいないのかを素早く確かめた。

弟の左側には大きな暖炉があり、その暖炉を背にして、まん中で分けた長い髪を白の半袖シャツの両胸に垂らしたアンジェリーナこと安藤梨伊菜先生が座っている。自分のすぐ前にはショートカットのルミさんの後ろ姿が見えて、その右隣にはクルクルウエーブの栗色の髪をしてブルーのノースリーブを着たエミルがいて、さらにその隣には天道さんのスキンヘッドが光っていた。テーブルを挟んで向こう側には、左側から順にフランス人がお相撲さんになったような赤いTシャツにくるまれたセーヌ川の巨体があり、そしてブルー・リーの顔Tシャツの袖から太い腕を自慢げに見せつける大澤さんがコーヒーをすすっている。右端では緑のポロシャツを着てちょっぴり猫背の眼鏡のカメさんがまだ食事中で、せっせと箸を動かしていた。

姿が見えないのはこれまた兄と同級生の安田だった。

「安田さんは？」と弟が遠慮がちに問うと、「おかあさんの実家」と言いながら立ち上がったエミルはクルリと一回転すると、兄弟に向かってこう続けた。「みんなにも一緒に話を聞いてもらおうと思って」

「あ、うん」と兄は言ってカメさんの90度斜め前に座ると、弟も続いて兄の左横のいすにちょこんと腰かけた。エミルはのっぼのマリオネットが踊るみたいな歩き方で調理室に入っていた。

「幽霊をみたそうですね？」とセー又川が赤みがかった前髪をかきあげながら嬉しそうに言った。

コクリとうなずいた弟は、この人たちにとっては幽霊を見るなんて日常茶飯事だったんだと今さらながらに思った。

「リリーさんに会ったくらいだから、勇貴は素質があるのかもな」と皮脂でテカテカの頭を輝かせて天道さんがニヤリとした。

トレイに冷えた紅茶を入れたグラスを二つおせて調理室から出てきたエミルが、高村兄弟の前にグラスをトントンと置きながら言った。「最初から順番に話してくれる？」

見太郎が弟の勇貴をひじでこづいた。

「は、はい」と勇貴は返事をする、話の順番を考えようと天井を見上げた。

「あおう、まず、西条君が亡くなったことから話します。あおう、6月29日の土曜日でした……」

教科書を読むよう国語の先生に当てられたときみたいに、ボソボソと高村兄弟のチビの弟は話し始めた。

——それは下校時間もだいぶ過ぎたところで、東玄関の横で血を流して倒れている西条君を警備員さんが見つけて救急車を呼んだという。

伝言ゲームみたいに学校中を駆け巡っている噂を総合すると、うつぶせに横たわる西条君の頭はちょうど玄関のコンクリートと校庭との段差のところにあったという。2階の教室には西条君のランドセルや持ち物が全部あったことから、不注意で2階の窓から転落し、運悪く頭をコンクリートの角に打ちつけてしまったのではないかと言われた。

勇貴が西条君の死を知ったのは、その日の夕方のテレビのニュースでだった。ローカルニュースの枠で、渋谷区の小学校で6年生の生徒が頭から血を流して死んでいるのが見つかったとアナウンサーが言ったとき、画面に映された校舎が自分の通う小学校の校舎だったのだ。アナウンサーは、警察は自殺ではなく事故の可能性が強いと言っていると続けた。勇貴はその夜のうちに数少ないクラスの仲良しの一人に電話をして、亡くなったのが隣の組の西条君だということを知った。

それが1週間前のことだった。

「質問」と天道さんが手を上げた。「まずは痛ましいことで、その西条君という少年のご家族のためにお祈りしよう」と天道さんは目をつむってしばらく下を向いた。食堂に居あわせた全員が、天道さんにしたがって黙とうをした。

天道さんは、顔を上げるとこうきいた。「自殺とかいじめの可能性はなかったのかい？」

「あろう、目撃者がいたんです」

「窓から落ちた瞬間の？」

「えーと、落ちる少し前です。校庭でクラブの練習をしていた生徒が、西条君が窓枠に登って度胸試ししてたのを見てるんです」

「度胸試し？」と大澤さんが眉を寄せた。

コクリとうなずくと勇貴は説明を始めた。

それは6月ごろ、2組の中でも乱暴組の吉家君や守谷君など幾人かの男子が面白半分に始めたことだった。

ちょうど週末ごとの花壇の修繕工事が始まり、そのための資材をおいておく仮設の物置が東玄関の左隣、ちょうど6年2組の教室の下の方に建てられた。プレハブの建物で屋根はウネのついた鉄製だった。

度胸試しというのはこうだ。2組の教室の校庭側の窓枠に上り、そこから真下のプレハブ小屋の屋根の上に飛び降り、次に方向を変えて東玄関のコンクリートのひさしの上に飛び移る。そしてあらかじめ開けておいた1組の窓から教室に入って戻ってくる。これができれば勇気があるというわけだ。

教室の窓からプレハブ小屋の屋根までの距離は1メートルほどだし、高さも同じように窓枠から1メートル少し下にあるだけで、東玄関のひさしまでの距離も1メートルを切るぐらいだったろう。だから、飛ぶ方向さえ間違わなければ、たぶん、誰にだってできただろう。ただし、当然だが度胸がいる。失敗したら校庭に落ちてしまう。

「そんなことして、よく先生たちに見つからなかったね？」と大澤さんがきいた。

「すぐ見つかったんです。それでもすごく注意されて。全校朝会でも何度もみんなに注意があったので誰も度胸試しはしなくなりました」

「その度胸試しを西条くんがしようとして失敗した。そして運悪く、落ちたところが花壇の上ではなく、コンクリートの段差のところだった。そういうことかい？」

勇貴は天道さんに向かってコクリとうなずいた。

「もう一つ質問だ。さっき、目撃者がいたといってたよな。その子は飛ぶ瞬間は見えない

んだね？」

「はい。クラブ活動中だったんで」

「でも妙ねえ」と左手で頬づえをつけて聞いていたルミさんが、自分の右側にいる勇貴に大きな瞳をきらりと向けた。「度胸試しということは、その場にほかのだれかも一緒にいたわけでしょ？ 自分ひとりではしないんじゃない？ 『ぼくは勇気があるんだぞ』とだれかに示すためにするわけだから」

「ぼくもそう思うんですが、一緒に人がいたのかはわかっていないんです」

「でも、絶対にだれかがその場にいたはずよ」とルミさんは考え込むように目を閉じた。

「度胸試しじゃない可能性もありますよね」と大澤さんが言った。「つまり、2階から飛び降りて自殺するつもりだったとか……。それだったら、そのとき教室に誰もいなくてもおかしくない」

「でも、自殺しようと思ったら、すぐ真下に屋根があるようなところに飛び降りる？」とルミさんが言うと、大澤さんは「そりゃそうですね」と大きくうなずいた。

「意外と妙なところが多い事故ね」とアンジェリーナは腕組みをしながら、勇貴にこうたずねた。「全校アンケートはしたんでしょ？ イジメについてはどうだったの？」

「イジメはなかったです。ぼくも西条君がいじめられているのは見たことないです。とっても目立たなくて、まるで透明人間みたいで、こう言っちゃ西条君に悪いですけど、いるかないのかわからないようなタイプだったんです」

「それなのに、幽霊が西条君だとすぐにわかりましたね？」とセー又川が聞いた。

「えーと、3年と4年の時に同じクラスだったんです。それと、なんか、ぼくに似ているところがあるなって、ちょっと気になっていたこともあって」

「似ていますか？」

「はい。友だちが少ないこととか、一人でいることが好きなこととか、あと、図書館によく来ていたし……」

クリクリの栗色の頭のうしろで手を組みながら聞いていたエミルが口を開いた。

「それで弟くん、オレたちに何を頼みたいの？」

エミルの青みがかかった瞳を真正面に感じた勇貴は少しモジモジした。

「あのおう、西条君がまだ幽霊のままであるその理由を見つけてほしいです。それから、西条君をちゃんと天国に送り届けてほしいです」

エミルは勇貴をじっと見つめた。

「……もちろん、そうしてあげたいけれど、死者には死者の事情がある。もっと西条君のことを知らないと……」

エミルは、顔がのっぺらぼうの西条君が校庭のまん中で両足を踏ん張って立っている、知らずとそんな想像をした。

見太郎が青いシャツの胸元からのぞく白のTシャツのエリを右手でいじりながら、「あのことは？」と左の肘でまた勇貴を軽くこづいた。

「あのことって？」と勇貴が小声で聞き返すと、「呪いの動画」と見太郎が勇貴の耳元に口を近づけてささやいた。

「ああ……」とうなずくと勇貴はボソボソとこう付け加えた。

「西条君が亡くなったのは呪いの動画を見たからだという噂が学校中に広まっていて、実際、あのう、ぼくのところにも誰だかわからないけど、呪いの動画をメールしてきた人がいるんです」

カメさんが「それって、『この動画を見たものは24時間以内にだれかに転送しないと不幸が訪れる』とかってやつ？」ときくと、勇貴は「はい」とうなずいた。

「見たの？」とアンジェリーナがきいた。

「ぼくは見てないです。……でも、さっき、家で、兄ちゃんが見ました」

「えっ!? 見ちゃったのかい? ヤバイよ!!! 超ヤバイよ!!!」と天道さんが不吉な叫び声を上げた。

見太郎は両手で頭をかかえて目をギューツとつぶった。

「兄ちゃんならなんとかしてくれるだろうと思って、兄ちゃんのパソコンに呪いの動画を転送してしまっただけです。そしたら……」

「『呪い』の字が、『祝い』に見えて、祝いの動画ってなんだろうって、見てしまっただけ……」と兄は頭を両手で抱えたまま肘を力なくテーブルにつけ、うつむいた。

だれもが言葉を発しなかった。

その沈黙の重みに頭蓋骨がさらに押し下げられ、見太郎の鼻先はあと数センチでテーブルにつきそうだった。

勇貴がそんな隣の兄の姿から視線をあげると、一生懸命に笑いをこらえているみんなの顔があった。セー又川は勇貴に向かって嬉しそうにウィンクした。

そのときジー、ジーとだれかの携帯電話が振動した。

「もしもし」と言ったのはルミさんだった。

「はい、そうです。……はい。……はい」とルミさんは話を聞くいっぽうで、やがて「では、明日、お待ちしております。住所は渋谷区大山町……」とケプラーハウスの場所を伝え、そして丁寧なあいさつを繰り返して電話を切った。

ルミさんは「鈴木君のお母さんから」とみんなの顔を見まわした。

「相談があるらしいの。少年院で面会したときに鈴木君からわたしに相談してほしいと言われたって。明日午前11時にここに来ます」

「相談の出身は？」と天道さんがきいた。

「明日話しますとだけ。かなり暗い声だった……」

「そうか。わたしも同席するかな？」と天道さんが言うと、「よければ」とルミさんは天道さんに向かってうなずいた。

「オレも同席していいですか？」とエミルが左隣のルミさんの顔をのぞきこむようにすると、「もちろん」とルミさんがほほ笑んだ。

「鈴木君はわたしたちが守らなくちゃいけないから」とエミルが言うと、頭を抱えている高村見太郎以外の全員が大きくうなずいた。

ルミさんは新宿警察署に向かって堂々と歩いて行った鈴木の後ろ姿をふいに思い出し

た。

3

その宇宙船はどこか新幹線に似ているといつも思ってしまう。異様に長い、10kmくらいはあるだろう、真っ白のチューブのような船体なのだが、船内には新幹線のように座席が通路をはさんで両脇に整然と並んでいるのだ。いったい何人分の座席があるんだろう。智也はいつもその壮大さに恐れのようなものを感じてしまう。

ただ不思議なのは、その宇宙船は訪れるごとに、微妙にその色や形を変えるのだ。宇宙船の目的は地球で助けを求めている仲間を探し出し、助け上げることだ。

智也は隊長にこう聞かされていた。救助された仲間が座る座席は決められていて、その座席がすべて埋まるまではこの宇宙船は出発できないのだ。つまり、座席はすべて予約済みで、乗客が全員揃うまでは旅立たないというわけだ。

乗客、言いかえれば仲間とはこの宇宙船のグループに所属した地球人で、時代も場所も

いろいろなところに散らばっているという。智也は宇宙船の大きさから、その人数はだいたい1万人はくだらないのではないかと思っている。

救助隊が地球に降下するための場所が船内に何カ所もあり、智也がいつも待機しているのは◎のような印が壁に大きく描かれた一角で、そこには隊長と数人の救助隊員の仲間がいる。

今夜も気がつくとき智也はその降下口のそばに立っていた。隊長も仲間も銀色に輝く宇宙服のようなものを着ているが、智也だけはいつも普段着だった。いまも智也はジーンズにTシャツだ。その理由を隊長に聞いたことはないが、次第にわかってきたのは、救助される仲間には普段着姿の智也しか見えず、隊長たちの姿は見えていないということだった。誰をどこに救助に行くのかは、前もって知らされることはない。

今夜もそうだ。

白髪でわし鼻の隊長は右手で智也の左手を握り、左手でもう一人の救助隊員の右手を握り、その隊員は左手でまたもう一人の隊員の右手を握り、その隊員が左手で智也の右手を握った。そうして輪を作り、4人は青くまぶしく輝く降下口に立った。光の上に浮かんでいるように、足の裏には固いものの上に立っているという感触は何も無かった。

やがてその青い光は4人を包み込むと、一瞬、智也はそのまぶしさで何も見えなくなつた。

気づくと智也だけが炎の中に立っていた。熱さはまったく感じなかった。

まわりを見まわすと、ここが燃えさかる家の中だとわかった。濁流のようにあちらこちらにもものすごい勢いで流れていく黒や灰の煙の下や上に、黄色やオレンジ色や赤色の炎がまぶしく揺れ動く。地獄とはこんなところなんだろうかと思ひもよはずに震えた。

ここはどこだろう。日本ではない。

智也はこの炎が自分を焼くことはないと思つてた。自分は無敵なのだ。海の中でも息はできるし、今夜のような炎の中の救出活動も何度も経験済みだった。

智也は煙をかき分け、炎をまたいで、助けるべき仲間を探した。

炎よ消えろ、煙よ消えろ。智也がそう念じると、あつという間に鎮火したかのように黒々とした燃えかすだらけの部屋に変わった。

窓枠ごと吹き飛ばされ、ただの大きな穴となつていた窓からは、半壊した建物が雑然とならぶ町が見えた。そのいくつかからは黒煙が立ち上がり、またある建物は通りに面した側が崩れ落ちていたり、壁にあいた大きな穴から破れたシートが風になびいていたり、つ

まり見る限り無傷な建物は一つだってないのだ。人影もまったくなかった。風の音すら聞こえない奇妙な静けさだけがそこにあった。

隊長の声がした。

「ここは1993年の戦争の町だ」

智也が振り向くと、真っ黒にこげたマネキン人形のようなものが壁際に転がっているのが見えた。近づくとそれは焼けた人間のからだだとわかった。もはや炭のかたまりでしかないそれは、背中を丸くして横になっていた。大きさから自分と年の変わらない子どもにちがいない。

人間の死体にはだいぶ慣れては来たが、それでもむごたらしさに足がすくんだ。

そのときだ。その焼死体のそばに突然、一人の少年が現れた。黒い髪、黒い目、彫りの深い顔に白い肌。裸足でポロポロのズボンをはき、汚れた青いトレーナーを着ていた。少年は呆然として足もとの焼死体を見つめていた。

また隊長の声がした。

「この仲間は20年ものあいだ、ここにこうして立っている」

言葉はいらなかった。智也は少年の前に立ち、あいさつの気持ちを送った。

少年は驚いて目を見開いた。

「誰？」

その言葉はまったく聞いたことのない言葉だったけれど、意味はわかった。

すると時間が「いま」にすりかわった。戦争など無かったかのように、ただの大きな穴だった窓も立派なフランス窓になり、きれいに修繕された白壁の部屋が突如目の前に現れた。

そのとき、赤い髪の中年女性が、乾いた洗濯ものを入れた籠をかかえ、智也のことも、少年のこともまったく見えないうちに、目の前を横切った。洗濯籠の端が少年の右腕を突き抜けた。実際、二人の姿は女性には見えていないのだ。

智也は少年に向かって心でこう言う。

「助けに来たよ。一緒に宇宙船に戻ろう」

「ここにいる」と少年は口を開くことなく智也に答えた。

少年の家族のイメージが静かなさざ波のようにして智也に伝わってきた。

大柄な母、同じく大柄な父、そして幼い妹。3人とも黒髪で黒い瞳をしている。少年は家族が戻ってくるのをここでずっと待ち続けているのだと智也は思った。

隊長が智也の心に「彼の家族はすでに宇宙船にいる」と告げ、智也はそれを少年に伝える。

「母さんと父さんと妹は先に宇宙船に行つて君が来るのを待っているよ」

だが、少年は警戒心を目に浮かべて身がまえた。

「キミはなに人？」

少年が撃たれ、家に火がつけられる情景がまたさざ波のようにして智也の頭の中に伝わってきた。

少年の家に数人の男たちが銃をかざして踏み込んできた。少年は信じられない思いでそのうちの一人を見ている。その細身の青年は無表情のまま、タン、タン、タン、タンと銃を撃った。最初の一発目が少年のノドにあたり、弾丸は少年を激しい力でうしろに押し倒した。首が燃えるように熱く、息ができなかった。それから本物の炎がやって来た。真っ赤な炎がやって来て、まるで太陽の中にけ落とされたかのように、あっという間に服は燃え尽き、自分の体も焼けた。叫ぶこともできなかった。肉が焼けるにおいがした。自分のからだの肉が。

「床屋のヨシップさんに撃たれた。いつもぼくの髪を切ってくれてたのに」

そう少年は、こんどは口を開いて智也に伝えた。知らない言語でも、意味は通じる。

少年は再び混乱し始めた。

その姿を見て、智也はいつものようにこう伝えるときだと感じた。

「君はもう死んでいるんだ」

少年の顔が引きつる。

「ここにいてももう何も意味は無い。だから宇宙船に帰ろう。家族が待ってるよ」

「死んじやいない！！ からだもあるし、考えてる自分がある」

「でも、君の時間は堂々めぐりをしているし、ここに住んでいる人は君の知らない人たちで、君に話しかけもしない。おかしいと思わない？ 君の真上を見てみて」と智也は人さし指で頭上を示した。

少年は顔を上げた。

そこには3つの光り輝く繭のようなものが浮かんでいた。隊長と仲間の隊員たちだ。地上に近づくと、彼らは光の形としてしか存在することができないのだ。

天使を思わせるその突然の光に少年は驚き、その場がぐりとひざをついた。

すると突然、智也は自分が老人に変わったことに気づいた。もっと正確に言えば、自分

の肉体をだれかが一瞬にして改造して乗っ取ったような、そんな感じだ。自分が材料となつて、何かの役に立っているような、そういう気分だ。一人の老人が自分を乗っ取り、姿形もすっかり変えてしまい、すべてを自分のものにしていて、智也はそれを許可している。

「ダリオ」と智也をのっつた誰かが少年に呼びかけた。

「じいちゃん!？」と少年は驚き、目を見開いた。

「これから天国へ行くんだ。じいちゃんがいっしょに行く。父さんたちも待っている。おまえはきちんと仕事をやり遂げた。天国でそれを振り返ろう。ダリオ、怖いことは何もない」

そのとき、夢の外から声がした。

「智くん、智くん」

母親の声だった。

「ちゃんとお布団で寝なさいよ」とその声は続けた。

智也は勉強机の上につ伏しながら、「うん、わかったから」と声にならない返事をした。頭の半分では、しかし、夢は続いていた。

智也と少年のあいだに天空から銀色に輝くエスカレーターが下りてきた。

「ダリオ」と老人は少年に向かって手を差し出した。

「智くん、ほら、聞いているの？」と母の声がした。薄目を開けると、目の前のLEDスタンドがまぶしかった。「うん、わかってる」という返事は今度はかろうじて声になった。

智也の存在をのっとった老人は少年の手を取り、二人はエスカレーターのステップにそろって足を乗せた。智也である老人と少年と、そして三つの光の繭はものすごいスピードで天に向かって上昇していった。

「ベッドの上、片付けておいたわよ、智くん」と母親の声がまたした。「うん」と智也は机に突っ伏したまま答えた。

やがて暗黒の空間内に巨大なチューブの宇宙船が見えてきた。エスカレーターはその内部へと続き、気がつくともみなは船内にいた。

真っ白な制服に身を包んだ看護師たちが待っていた。

隊長がわし鼻をもぞもぞさせながら智也に言った。

「ありがとう。きょうの任務はこれでおわりだ。地上に戻ってよろしい」

隊長は敬礼をした。智也も同じように敬礼で答えた。

額のあたりが重苦しくしびれたようになり、夢の世界は闇に溶け込むようにしてぴたり

と閉じた。

重い頭をおっくうそうに起こしてうしろを振り返ると、ベッドの上に置いてあった本やゲーム機が片付けられていた。

智也は倒れ込むように、掛け布団の上にボタンと大の字になった。

今見た夢ははっきりと覚えている。まるで現実のようにリアルだ。

いつからだろう、この宇宙船の夢を見るようになったのは。ちょうど1年前の5年生の夏頃からだろうか。1週間に少なくとも一度は、同じ夢を見る。隊長たちと一緒に死人を宇宙船に引き上げる救助作戦の夢をだ。いままで何人を救助したことだろう。

時代もまちまち、場所もまちまちだが、助ける相手はみな自分と同じ年頃の子どもだった。

この夢の中でだけは、智也は勇敢で正義感にあふれる少年でいられた。心がまるで焼きたてのバゲットのように、まわりは堅固で中身はしっかりと充実していて迷いがなかった。怖いものは何も無く、そして確かに人の役に立っていた。まるでヒーローのようだった。

だから、この宇宙船の夢は大好きだった。

意識がありながら、頭の半分では夢が続くというのも、同じように5年生の夏ぐらいか

ら始まった。夢が途中で終わったときは、まるでDVDの一時停止を解除するようにして数日後に続きが始まることもある。

思えば夢の内容も、夢の見方も、ものすごく不思議なのだが、すでにそれは智也の心の生活のなくてはならない一部になっていた。大事な時間だったのだ。

それなのに、と智也はため息をついた。同時に心臓が不穏なペースで鼓動を速めた。

それなのに、こちらの現実では、自分は臆病者で卑怯者で、いつも目立たないように生きようとしている。

心臓はバラバラなテンポでさらに鼓動を速めた。

罪の意識——。智也はさらに速まる鼓動に息苦しさを感じながら、それこそが原因だということをまた今夜もはっきりと意識した。

罪の意識が智也を今夜もまたさいなむのだ。

7月7日、七夕の日曜日。

鈴木之母は髪をひつつめにし、グレーのスーツに白いシャツ、黒のハンドバッグという、まるで子どもの面接試験の付き添いのようないでたちでやって来た。どう見ても季節はずれで不自然だし、しかもとびきり暑い日だというのに、汗の一粒も顔に浮き上がっていない。一輝の逮捕がこたえたからか、それとも生まれつきなのか、こけた頬とやせた胸元に青白い静脈が幾筋も浮かんでいた。

玄関に続く広間のクリーム色のソファに4人はひとまず腰かけると、短い自己紹介があり、そしてエミルはお茶を入れに廊下の奥に消えた。

ルミさんが口を開いた。

「鈴木君は元気で頑張っていますか？」

「おかげさまで。少年院にはイジメがあると聞いたので心配でしたが、初等少年院で一輝は年長ですから、いじめられることもないようでした」

「それはよかったです。もう1カ月になりますか、入院してから？」

「はい。……あの、一つ、うかがってもよろしいですか？」

鈴木之母は息子が受け継いだ少し腫れぼったいまぶたをこきざみにふるわせながら、ル

「ミさんと天道さんを交互に見た。」

「一輝は皆さんにたいへんお世話になったと言っていました。どこでお世話になったのでしょうか。ご迷惑をおかけしてないといいのですが」

ルミさんと天道さんはどう答えたものか、一瞬間を見合わせた。

「その前に、わたしのほうからもうかがっておきたいことが……。わたしの電話番号は鈴木君からお聞きになったのですか？」

「はい。鑑別所に入る前に、私物が少し戻されました。そのときにどなたかの電話番号を書いたメモ用紙が1枚ありました。これは捨てていいのと聞きましたら、お世話になった大事な人の電話番号だから大切に取っておけと」

「そうだったんですか」

アイステイーをのせたトレイを捧げ持ってエミルが戻ってきた。鈴木之母の前から順にグラスを並べるとエミルは静かにソファに腰を下ろした。

ルミさんが話を続ける。

「こちらのエミルちゃんと鈴木君は小学校でクラスが一緒でした」

鈴木之母はすぐに思い出した。

「ああ、そういうえば、学校行事で行くたびにお見かけしたような。まあ、ずいぶん大きくなられて」

エミルは微笑みながら改めて一礼した。ルミさんが言う。

「安田君のことはご存知だと思いますが——お兄さんのほうです。彼はエミルちゃんの親戚なんです。安田君は鈴木君から薬物を買っていました。そういった関係から、わたしたちは鈴木君から直接お話を聞く機会があり、自首のことなど、いろいろと相談を受けたというわけなんです」

「そうでしたか。ありがとうございます」

サイキックな力を結集して彼を助けたという事実をうまく隠して説明したルミさんに、天道さんがニヤリとした。

「で、ご相談とは……？」

鈴木之母は少しの間うつむき、深いため息をつくとき、顔を上げた。

「娘が家出をしたんです。一輝の姉です」

エミルとルミさん、そして天道さんが思わず顔を見合わせた。

「確か、高校2年生」とルミさんが思い出すようにつぶやいた。

「はい……。もう半月ほどになります。一輝には黙っておこうと思ったのですが、きのう、面会に行ったときつい……。少年院の面会はそばに先生がついていきますので、あまり詳しい話は一輝にできませんし、一輝も先生を意識しながら話しますので、突っこんだ会話もできないんです。でも一輝はまるで自分のせいみたいに思い込んで、とても落ち込んで。そしてルミさんに相談しろと。ルミさんなら絶対に探しだしてくれるからと。それでお電話をした次第なんです」

「鈴木君はなんと？」

「隣に先生がいるので、小声で『仕返しかも』とだけ。少し泣いていました」

「組織が鈴木君への仕返しとしてお嬢さんをさらったという意味ですか？」

「一輝は、そう考えているみたいです。家出の理由が見あたらないんですよ。家族みんなでやり直そうと話し合ったばかりでした。遊び歩いてばかりだったマリも、家にいるようになりましたし」

「マリさんがお嬢さんのお名前ですね。どんな字を？」

鈴木之母はハンドバッグから白いハンカチを取り出して、そっと左右の目尻に交互に当てた。

「アサのマにサトです。以前から何度か無断外泊したことがありましたので、はじめは『またか』と思っていましたが、次の日の夜になっても戻りませんでしたし、携帯にかけても電源が切れていてつながりません。もちろん、学校は無断欠席で……」

「警察へは？」

「いなくなつて3日目に代々木警察に行つて相談しましたが、いままで、なんの進展もないんです。ただ一度だけ連絡がありました」

「警察から？」とルミさんはからだを乗りだした。

「いえ、麻里からです。電話で、元氣だから探すなどだけ」

「いつごろですか？」

「いなくなつてから4日目ぐらいです」

「ご本人の声でしたか？」

「はい。あの子は自分のことを『うち』と呼ぶんです。そのときも『うち』と言っていましたし、子どもの声を間違えることはありません」

天道さんが口を開いた。

「家から持ちだした物はなんかありますか、携帯の他に。お金は？」

「財布はありませんでした。でも、着替えは持ち出してはいないようです」

「財布と携帯だけ持って着の身着のままということですね」と天道さんが確かめるようにいうと、鈴木之母は小さくうなずき、またハンカチで目尻を押さえた。

「警察の方が調べてくれたんですが、銀行の麻里の口座から何度かお金が引き出されていました」

「金額は？」と天道さんが聞くと、鈴木之母は「1度に20万円ずつ2回。それもあって警察は家出でしょう」とハンカチを鼻に当てた。

「高校生なのにしっかり貯金はしていたんですね。アルバイトかなんか？」

「渋谷のカフェでアルバイトをしていました」

「警察はお金が引き出されたATMの場所は教えてくれましたか？」とルミさんが聞いた。

「はい。いなくなった翌日に宇都宮で。その次の日に郡山で」

「北上してるな」と天道さんが言い、「東北自動車道か」と腕を組んだ。

すると鈴木之母が「警察の方が、宇都宮のは東北自動車道のサーブエリアでだったと言っていました。だからクルマで移動したようだ」と天道さんを見た。

「でも、お嬢さんはクルマは運転しないでしょう。誰のクルマだ……？」

天道さんはそう言って腕組みをした。

エミルが「あのう」と言い出しにくそうに言葉をはさんだ。

「鈴木君から聞いたんですけど、お母さんは、そのう、ある宗教の熱心な信者だと」

「もう脱会しました」と鈴木之母はうつむきながら答えた。「一輝がひどく嫌がりましたので。弁護士さんのアドバイスもありましたし。いまはもう一切関わりをもっていないんです」

「もしよければ、その宗教団体の名前を教えてくださいませんか？」とこんどはルミさんがきいた。

「ムーンチャイルド教団……」

天道さんが「月の子どもたち……ですか？」と問うと、鈴木之母は小さくうなずいた。

「ムーンチャイルド……ね」とルミさんがひとりごちのようにつぶやいた。

「まさか……」と鈴木之母はハンカチをギュッと握りしめた。

「一輝が『仕返し』といったのは、組織の仕返しではなく、教団の仕返しということですか？」

「可能性はあります」

そう言ってエミルはルミさんと天道さんの表情をうかがった。

鈴木之母は混乱したような表情を浮かべた。

「わたくしが脱会したぐらいで、教団がそんなことをするなんて。ちょっと信じられないです……。みんないい人たちなのに……」

「いずれにしても、わたしたちも調べてみます」

鈴木之母はハンカチでこんどは両目を押さえた。手が小刻みに震えていた。

それからしばらくのあいだ、さらにこまかな質問に鈴木之母は答えたのち、玄関で3人に何度も頭を下げ、そして帰っていった。

鈴木之母が持ってきた麻里の写真を見つめていたルミさんは、その写真をテーブルの上に戻してエミルにこうたずねた。

「どうして鈴木のお母さんが入っていた新興宗教のしわざかもしれないと思ったの？」

「うーん……鈴木君は中三よ。組織の中では下っ端のまた下っ端。そんな子どものお姉さんに仕返ししても組織にはなんの得もない」

「うむ」と天道さんがうなずいた。

エミルが続ける。

「それでちょっと思ったのが、ムーンなんとかの狂言の線」

「狂言？」

ルミさんが眉を寄せた。

「鈴木のお母さんを取り戻すために教団が失踪事件をでっち上げる。つまり、麻里さんを誘拐して監禁し、そしてその居場所を教祖が透視したと言って、麻里さんを見つけて取り戻したふりをする。そうすれば、鈴木のお母さんは100%、ムーンなんとかを信じて戻ってくる」

天道さんが腕組みをしてこう聞いた。

「でも、失踪から半月もたってるぜ」

「いまごろ、誘拐した連中は、組織のしわざに思わせるような芝居を続けている。だから、お母さんからの連絡が無いことに教団がじれたら、きっと教団のほうからお母さんに連絡がいくわ、あなたのご家族の危機を教祖様が予言したとかなんとか言って」

「なるほどなあ。お姉さんは『ヤクザにつかまっていた』と思い込んでいるからそう言うに違いないし、教祖さんへの信仰がよみがえったお母さんには『警察には言わないように』

そうしないと組織にまた狙われる』なんてえ一言釘を刺せば一件落着だ。考えたもんだ」
天道さんは感心したようになんどもうなずいたが、はたと我に返ったかのように表情を変えた。

「でも、エミルよお。たった一人の信者を取り戻すために、そんなたいそうな芝居をうつかい？　しかも犯罪そのものだ。鈴木の家が財閥なんかで、億単位の寄付をしていたっつーなら話は別だが、鈴木のお父さんは確か普通のサラリーマンだ。大した額の寄付じゃないだろうよ。教団にとっちゃ、鈴木のお母さんにそれほどの危険をおかすだけの価値はこれっぽっちもないと思うぜ」と天道さんは、右手の人さし指と親指をくつつく寸前で止めた。

「だよね。確かに。ありえないか……。うん、ありえない」とエミルはニヤリと笑って天井を仰いだ。

「だよね」とルミさんもニコリとすると、「さて、エミル所長。作戦は？」と大きな瞳をキラキラさせた。

「まず、天道さんたちにはさっき聞いた鈴木のお姉さんの生年月日から彼女のプロフィールや現状を調べてもらいます。それから、セーヌ川にお願いして遠距離レーダーでサーチです」

「あまり言いたくないけれど、生死についても必要ね」

「うん」とエミルは小さくうなずいた。

「まず、家出に間違いねえと思うけどよ」と天道さんが言った。

エミルはテーブルの上の麻里の写真に手を伸ばした。

おそらく友人と一緒に出かけたデイズニーランドで撮られたものだろう。シンデレラ城をバックに、薄めの茶髪にしたロングヘアーの少女が両手でVサインをつくって笑っていた。鈴木やその母のような腫れぼったいまぶたではなく、重そうなつけまつげの向こう側にはすっきりと澄んだ大きな瞳があった。無断外泊を繰り返していたという不良少女のイメージは少しもなく、無心に笑う唇の楕円の中で輝く真っ白な歯はきれいに整列し、それはまるで彼女の誠実な魂を表しているようにエミルには思われた。

5

「無理だし」と兄は早くも音を上げて、勉強机の上のノートパソコンの画面から顔を上

げた。

「だいたい、自分が誰だか知られないようにわざわざG-mailとかYahooのアカウントを取って送ってるわけだろ。メアドをGoogleで検索したって、誰だかわかるわけないじゃん」

弟は扇風機の前に座りこんで風を独り占めしながら、文句を言い始めた兄の言葉を聞いてあることを思いついた。

午前11時。高村兄弟の家では、父の厳命でエアコンは気温30度が越えるまではつけてはならなかったが、机の上のデジタル温度計はまだ29度だった。

弟は扇風機の前に陣取ったまま、背後にいる兄に向かって言った。

「確かにね。呪いの動画をぼくにメールしてすぐにアカウントを削除した可能性も高いし」
弟はそういうと、座ったままクルリとからだを回転させて兄を見上げた。

「でさ、兄ちゃん、こんどはアットマークより前の文字だけで検索してみてくんない？」

「で、565656rivera42だけで検索すんのね？ 意味わかんねーけど……」
と兄はキーボードをいくつか叩くと、ディスプレイにじっと目をこらした。

「おっ……一番上に外国のサイトの記事みたいなのが出てきた。こいつはくせえー！」

弟は立ち上がると、兄の肩越しにディスプレイをのぞき込んだ」

クリックすると「EspnMLB」というサイトにジャンプして、画面にはメジャーリーグのピッチャーの写真が現れた。見出しに「Mario Rivera and No. 42」とあった。

「なる、マリアーノ・リベラのファンってことか、メールの主はよ」

「この人、有名？」

「有名なんてもんじゃないやねえよ。ヤンキーズの大スターだよ。たぶん、イチローや黒田も好きなんだろうな、メールを送ったおまえの友だちのダレかちゃんは」

「メジャーリーグが好きそうな友だちはすぐに思い出せるかも……。えーと、たぶん、青井君だ」

「やったね！」と兄は大喜びしたが、一瞬の後、またガクツとうなだれた。

「あのさ、今思ったんだけどさ、こんどは青井君に聞くわけだろ、誰から呪いの動画が送られてきましたかって。で、それがまた Gmail で誰のかわからなかったら、また、同じことを繰り返すの？ いまはたまたまビンゴだったけど、メチャクチャなメアドだったらそこでオシマイじゃん」

「まあね」

「それにさ、みんな、あせて24時間以内に他のだれかに送っていたとしたらさ、1日に最低でも一人から二人が関係しているって事にならねえ？ 西条君が亡くなってから1週間以上たつわけだろ。そうしたら、その日からですら、少なくとも10人くらいはいるってことだぞ、おまえのところは届くまでにさ。もしかしたらさ、おまえの学年の生徒のほとんどが関係してるかもしれないよ。それ全部、こうやって調べるわけ？ 意味なくね？」

「でも、それしか方法はないし。エミルさんが言ってたじゃないか。呪いの動画の噂が広がったところに西条君が亡くなった。もしかしたら、なんかの関係があるかもしれないって」

「でもさ、こうも言ってたぜ。確かに霊が映っている動画は存在するけど、動画見て呪い殺されたって言う話は聞いたことないって。オレ、大笑いされたんだぜ、みんなに」

「そうだけど……。でも、エミルさんに言われたんだからさ、呪いの動画の元を探すのが高村兄弟の担当だって。がんばろうよ、ね、兄ちゃん」

ハーツと兄は大きなため息をつくど、思い出したようにエアコンのリモコンを取り上げ、スイッチをオンにした。

「兄ちゃん、まだ29度だよ」

「いんだよ。オレの脳内温度は沸騰寸前でくす」

弟は肩をすくめると、携帯電話をかけ始めた。

「あつ、青井君？ 高村だけど」

弟は相手を怒らせないよう、気をつかいながら話を進める。

「へえ」とか「そうなんだ」とか、やりとりが数分続いてから、ジェスチャーで兄からペ
ンとノートを借りると、何かを書き留め、それから嬉しそうな声で「ありがとう、ありが
とう」と言って電話を切った。

「兄ちゃん、ラッキーー！！」と弟は万歳をした。

「なんだよ」

「青井君さ、呪いの動画メールね、PCから来るメールは迷惑メールにしてたから、5日
間も気づかずに読んでなかったんだって」

「おう、これで10人分くらい助かったね！！ やったー！！」と兄も万歳をした。

「これ、青井君が受け取ったメールの送り主」と弟はノートを差し出した。

「maynakbsukisukiだぞお？ AKB48のまゆゆが好きって見え見えじゃん。アホだねえ。

「こりゃあ簡単だ」

「うん、これは岸田君だね。間違いない」

まじめで勤勉な弟はまたも携帯電話をかけ始めた。

それからわずか1時間で兄弟はある重要な転回点までたどり着くことができた。

半分ほどが「助けて」と実名で送ったメールだったので、経路をたどるのはその分スピーディーに進んだ。それに、自分の正体を隠そうとGmailなどのフリーメールでアカウントをわざわざ新しく作った者たちも、やはりそのアドレスの単語から自分の足跡を完全に消し去るのは難しかった。どうしても自分の好きなものや気になるものの言葉をほんの少しでも入れてしまうのだ。

兄弟はその透かしのように隠れている足跡を、ちょっとした推理で浮かび上がらせていくのがしだいに楽しくなっていた。

結局、だれもが、まるで「見つけてください」と言わんばかりに、一見でたらめなメアドの文字の中に、自分を無意識にマーキングしているのだった。

その道のりを簡単に振り返ると――。

岸田君

↓

柄谷さん（「ごめん岸田君、助けて」と書いた実名のメールだった）

↓

吉増さん（これも「ゴメン、柄谷さん、助けて」と書かれた実名のメールだった）

↓

増井さん（同じく、「迷惑かけてゴメン、助けると思って」と実名で書かれてあった）

↓

遠藤君（メアドは新しく作ったYahooで、@の前が151006415032302だった。勇貴が最初に1510064は代々木上原のあたりの郵便番号だと気づいた。とすれば、そのあとは丁目や番地じゃないかと考えた。上原と西原で調べ、上原1丁目50番地32号のマンションの302号室と判明。というのも、そこをグーグルのストリートビューで見たら、遠藤君の住んでいるマンションだったからだ。勇貴は、一度だけ、遠藤君の誕生パーティに招かれたことがあったのだ。たった一度だけだけど）

↓

万城目君（同じくYahooメールで、@の前がmillioncastleeyeだった。ミリオン・キャッ

スル・アイ——これぞ、見つけてくださいと言わんばかりの文字列じゃないか)

↓

吉田君 (㊟) の前が e2371000 だった。これはグーグルで検索して「R」の新型車両の型番と判明したことから鉄道ファンの吉田君が浮上。最初は頑強に否定したが、西条君の事故に関係があるかもしれないと言ったら渋々認めた)

↓

沢渡君 (「吉田、おまえしか頼るヤツがない」と実名で送った。なお、沢渡君も PC からのメールは迷惑メールに設定されていたので、2日ほど呪いの動画メールに気づかなかった)

↓

梶本君 (㊟) の前が morinokonishihara だったが、これは西原の「杜の子保育園」のこ」と推測。たまたま弟もここの保育園出身だったので、保育園が同じだった梶本君か渡辺君のどちらかではないかと推測。電話をして梶本君と判明)

↓

吉家君 (「カジ、これ、他のだれかに送れ」と命令口調の実名で送ったメールだった)

この吉家君のところで探索はばたっと止まったのだ。

吉家君に呪いの動画を送りつけた送信元のメールアドレスは、日本語として意味あるものだったが、それが誰のものかはどう検索しても、どう推測しても、さっぱりわからなかったのだ。

そのメールアドレスは次のようなものだった。

jibakushisyatansakukyujoitai@gmail.com ——

弟はこれを日本語に置きかえて、「自縛（地縛？ 自爆？）死者探索救助隊」とノートに書いた。これ以外に考えられないと思った。

その文字を見た兄は鳥肌が立ち、そしてブルブルッと震えた。

「なに、これ？ 気味悪くね？」

弟も首筋に寒さを感じた。

「兄ちゃん、この人がおおもとかな……」

「うん。たぶん……」

「吉家君に呪いの動画メールが届いたのは、西条君が亡くなる前の前の日だよ」

「…………うん」

兄は寒気に頭の地肌まで鳥肌が立ったように感じて、リモコンでエアコンのスイッチを切った。

6

昼食の後、セーヌ川をのぞいたみんなは食堂に残り、カメさん、大澤さん、天道さんの三人組の調査結果を聞いた。

それはとっても論理的でシンプルな話だった。

鈴木のお母さん、お父さん、そして姉の麻里、3人のホロスコープをそれぞれA4用紙に印刷したものを大澤さんがみんなに配った。

カメさんが「エヘン」とせき払いをした。

「みなさん、まず、お母さんからです。ご覧の通り、社会的地位などを表す第10ハウスに太陽、火星、水星が位置しています。太陽と火星はコンジャンクション、すなわちほぼ重

なっており、サインは獅子座です。月は乙女座で第11ハウス。見るとすぐわかりますが、海王星以外の惑星が社会を意味する天の側にあります。つまり、鈴木のお母さんの意識は常に社会に向かっている。これが男性のサラリーマンのホロスコープなら、会社の中で目立ちまくりの猛烈社員というところですよ。だが、お母さんは結婚以来専業主婦だったそうです。ということとは、出世や成功を求めてやまないこの太陽と火星の強力な男性エネルギーは仕事で発散されることがありません」

カメさんはいったん言葉を切ると、ずり落ちた眼鏡を押し上げ、みんなを見まわしてからこう続けた。

「つまり、その発散されない強力なエネルギーは夫や子どもたちに投影されるんです。このホロスコープはいわゆる過激な教育ママや、出世しろと亭主の尻をたたく妻によく見られるものなんです」

ここで天道さんに説明役が交代した。

「鈴木のお父さんのほうのホロスコープを見ると、彼の太陽は第12ハウスにある。夫婦のホロスコープを見くらべてほしい。父親の太陽と母親の太陽がほぼ90度の位置関係になることがおわかりと思う。つまり二人の夢や目標や人生観はいつもすれ違っていてことだ。お

互いに足の引っ張り合いもするだろう。それに太陽が12ハウスにある人間は、配偶者を家の中に閉じ込めたがる。かごの鳥にしたいんだね。お父さんの月もまた第12ハウスにあるから、なおさらだし、お父さんにとっては会社の出世よりも、一人で自分が好きなことをしている時間のほうが大事だ。労働を象徴する第6ハウスには木星があるから、仕事はいつも忙しく、一生懸命で、部下の頼みもよく聞くだろう。だから会社内での評判はいいはずだ。だが、妻の上昇志向を自分に押しつけられることにはかなりの嫌悪を感じているに違いない。要するにだ、夫にもはね返された鈴木のお母さんの満たされない男性的なエネルギーは、行き場を失い、最終的に宗教活動へと向かい、そこで発散されたと考えてもいいというわけだ」

みんなは「ほうう」と感嘆の声をあげた。

「ぼくからは鈴木麻里のホロスコープを解説させていただきます」と大澤さんが話し始めた。

「1997年3月6日午前1時24分に東京で生まれた鈴木麻里の太陽は魚座で第3ハウスにあります。太陽のすぐ近くに快樂の象徴たる金星と旅の象徴たる水星があります。わたしがいいますに、鈴木麻里には、どこかあてどなく旅することへの欲求があり、さまざま

ことに楽しみを感じるので、一方で、家庭を表す第4ハウスには抑圧の土星があります。この土星は父親、あるいは父親と化した母親と考えてもいいでしょう。交友関係を示す第11室は執拗さや濃い情念を表すさそり座ですので、ベタベタとした濃い人間関係が好きです。また収入などを表す第2室には拡大の木星が入っておりますので、生活力はあります。ただ、12ハウスの冥王星と第3ハウスの金星、水星が90度というハードな角度を作っています。これは快楽や遊びなどに関係した面で屈折した行動をとる人物であることをうかがわせます。とはいえ、思想や憧れなどを示す第9ハウスに男性性を表す火星があり、これはたとえば外国人とか、思想哲学に関心がある男性に恋をしやすいということでもあります。その火星と心理を表す月が120度と温和な角度であるのと、魚座の太陽もあいまって、理想を追い求める夢想家という面が表に出てこそ彼女はよい人生を歩めるのではないのでしょうか」

またしても、みんなは「ほーう」と小さな歓声をあげた。大澤さんは解説を続けた。

「トランシット、すなわち現在の惑星の配置をこの鈴木麻里のホロスコープに重ねてみると、夢やあこがれを象徴する海王星が、鈴木麻里の第3室にあり、金星と水星にヒットし、こんどは太陽に接近しつつあります。つまり、海王星は金星の快楽願望と水星の放浪願望

を刺激し、スピリチュアルな旅を求める太陽をも誘惑せんとしていると考えられます」

言い終えた大澤さんが大きく息をひとつくと、腕組みをしてエミルを見た。

エミルは3人の顔を見まわしながら言った。

「皆さんの結論は？」

カメさん、大澤さん、天道さんは声をそろえてこう言った。

「家出です」

「組織の仕返し、教団の仕返し、そういう線はないってことですか？」とエミルが問うと、天道さんがテカテカしたスキンヘッドのてっぺんを指でかきながらこう答えた。

「大澤君が説明したように、トランシットの海王星が鈴木のお姉さんの放浪癖にスイッチを入れたんだな。他の惑星との関係でも、イージーなアスペクト、ストレスの無い位置関係が多い。誘拐などを思いおこさせるハードなアスペクト、不穏な位置関係はないのだよ。つまり、何かしら重く辛いものから解放された、いまはそんな心の状態ではないかと思うんだ。鈴木のお母さんの場合、乙女座に天体が5個も入っていて乙女座過剰だ。だから、こまかいことに異常にうるさくて、一種のコントロールマニア的な部分もある。お母さんから逃げ出したかったんじゃないかな」

「よかったわ、家出の線が強そうで」

ルミさんの頬がゆるんだ。

「次はセー又川の番ですね」とエミルが言った。「セー又川の透視次第では家出で決定かもしれない」

そのとき、食堂の両開きの櫺の扉が開き、タイミンクよくセー又川が戻ってきた。

セー又川はニコニコしながら大テーブルを回り込み、エミルの真正面のイスにその巨体を収めると、ひじをテーブルにつけて両手を組み、合わせた左右の親指に二つに割れたあごをのせ、エミルを見た。

「どうだった？」と、セー又川の笑みが伝染した笑顔でエミルは聞いた。

全員の視線がセー又川の口もとに集まった。

「麻里さんは生きておりますです。瞑想に入りまして、鈴木麻里さんの意識を呼ぶと、温かいイメージを感じました。それから生命の息吹といひましようか、躍動する麻里さんのエーテル体を感じることができましたです」

みんなの顔に笑みが浮かんだ。

「麻里さんが現在いらっしゃる場所ですが、これについては、特定することがひじょうに

難しいです。さまざまなイメージが見えてきますが、特徴的なものはありませんのですね。どこにでもあるコンビニですとか、住宅地ですとか、山ですとか、川ですとか、海ですとか。それもひじょうにぼんやりとした映像でございます」

セー又川はいったん言葉を切ると、額に垂れた赤毛の前髪をうしろになでつけた。茶色がかかった瞳がキラリとした。

「思いまするに、いろいろな町を移動し続けているのではないのでしょうか。わたくしの透視は時間軸が定まりません。現在と過去がミックスします。ですから、この移動するといふイメージは、現在のことではなく、麻里さんの楽しい思い出のことかもしれませんですが。お役に立てず、申し訳ございません」

とセー又川はゆっくり頭を下げた。

「いやいや十分以上だ」と天道さんが言った。

腕組みをしたままからだを前後に揺すっていたエミルが、腕組みをほどこいてこう宣言した。

「わかりました。家出という線で調査を続けましょう。鈴木君のお家を少しでも安心させたいので、ルミさんからお話ししてもらってもいいですか、途中報告ということですか？」

「わかったわ」

そのとき、ルミさんの携帯がジージーと音を立てた。

「はい、もしもし」とルミさんが携帯を耳に当てた。

ルミさんの表情がたちまちに曇っていった。

ルミさんは天井をあおいで震える息をゆっくりと吐き出して、それから「わかりました。お電話をお待ちしています」と電話を切った。

「鈴木君のお母さん？」とエミルが聞いた。

ルミさんはうなずくと、わけがわからないというように首をふった。

「ムーンチャイルド教団でしたっけ……いしましたがそこから連絡があって、お嬢さんの行方不明について教祖がビジョンを見たと言ってきたそうよ」

「教団の線は無いはず……」とエミルがつぶやくように言った。

「お母さんは、とにかく話を聞きにだけでも行ってくるって」

「いつ？」

「これからすぐ」

天道さんが言った。「昼前にエミルが推理したとおりの展開だな。でも、いったい、ど

ういうわけだ？ ビジョンてのはなんだ？ 家出じゃねえってのか？」

ずっと聞き役に回っていたアンジェリーナが初めて口を開いた。

「お昼にエミルから教団陰謀説を聞いたときは、それはないでしょうと、わたしも思ったし、これまで天道さんたちが間違えたことはないし、セーヌ川の透視もはずれたことはないわ。だから家出説が正解だとわたしは思う。きっと教団は麻里さんの失踪の話を聞きつけて、単にそれを利用してしようとしているだけじゃない？ 教祖様がセーヌ川と同じような能力を持っていて、なんらかの情報を実際に得たという可能性もある。だから言ってみれば、教団とわたしたちのレースというわけね、どっちが先に麻里さんを見つけるか」

「鈴木君のうちを思えば、レースにわたしたちが勝つほうがいい」とエミルが言った。

あと数ヶ月もすれば鈴木は少年院を出て家族の元に帰ってくる。そのときに鈴木が安心して暮らせる鈴木家にしてあげたいとエミルは思った。

「いずれにしても、鈴木のお母さんからの報告を待ちましょう」

そう言ってルミさんは携帯電話に視線を落とした。

呪いの動画メールの発信先探して壁にぶち当たった高村兄弟は、自分たちで焼きそばのお昼ご飯を作って食べたあと、リビングのソファやジュウタンの上でゴロゴロしながら今後の作戦を練った。

母が残してくれた保険金を頭金にしてフリーライターの父が買ったマンションの、南に向いているリビングルームの窓からは、紫外線を通さないという触れ込みの白いカーテン越しにミルク色の輝きがふんだんにこぼれ落ちてきた。そのカーテンを開ければ、5階にある高村家のリビングからは、代々木八幡神社の森からケプラーハウスがある大山まで一望できる。

「ところでさ、兄ちゃん」とジュウタンの上で大の字になったまま弟が聞いた。「呪いの動画って、どんなやつだったの？」

「えっ、それ、言わせる？」と兄がソファの上に寝転がったまま返事をした。

「だって、呪いの動画見たって別に害はないってエミルさんたち言ってたじゃない」

「じゃあ、自分で見ればいいじゃん。オレのパソコンに入ってるし」

「いや、兄ちゃんの部屋行くの、いま、めんどくさいし」

「おまえ、怖いんだろう？」

「怖くない」

「いや、怖いんだ」と兄はからだを起こしてソファに座り直すと、ニヤニヤ笑いながら弟を見おろした。

「オレの弟がこんなに臆病者だったとは……」と兄は大げさに頭を抱えた。

兄の言葉を見無視するように、ジュウタンの上で、弟は黙ったまま天井を見つめていたが、「わかった。見るよ」と上半身をむっくりと起こした。

「おっ、勇貴君、無理しなくていいんだよ」と兄がちゃかすと、弟はすっと立ち上がって兄の部屋へと向かい、それをあわてて兄が追った。

「これだよね？」と兄の勉強机に向かった弟はパソコンに表示されたメールのリストを指さした。『呪いの動画』という件名があり、送信元が自分の名前になっている。

兄はうなずくと言った。「な？ 『呪い』と『祝い』って、漢字似てるだろ？」

弟はカーソルを『呪いの動画』という件名に合わせ、クリックした。メールの本文が現れた。

自分が兄に宛てて書いた「兄ちゃん、お願い、兄ちゃんならなんとかしてくれると思って、ゴメン」という短い文章の下に引用文があった。

この呪いの動画を見たおまえは自分の行いを懺悔し、そして自ら死をもって償うのだ。24時間以内にこののろいの動画をだれかに送ればのろいはとけます。

弟はメールを読んで首を少しかしげると、こう言った。

「兄ちゃん、この文章、いまもう一回読んだら、なんかおかしいんだけど」

「って、おまえが書いたんだらう？」

「じゃなくて、『この呪いの動画を見たおまえは』ってほう。一行目と二行目の文章が違わくない？」

「ま、少しな。一行目は『のだ』で終わってるのに、二行目は『ます』でていねいだってことだろ？」

「うん」

「そのくらい、オレの場合、しょっちゅうあるし」

「なんか、印象がぜんぜん違うっていうか。別の人が書いたみたい」

「一行目と二行目は別人が書いたってこと？」

「うん」

「なんで、そんなこと、すんの？」

「わからない」

「ま、とにかく、動画を見ろよ。怖いよー」

そう言って兄は弟の肩を小刻みに揺すった。

「やめろよ、兄ちゃん」と言いながら、弟は勇気をふるって動画のアイコンをダブルクリックした。

QuickTimeプレイヤーが立ち上がり、そして再生が始まると、ふざけていた兄も急に黙り込んだ。

画面には夕方に撮影したらしい暗い森が映った。木々の間から紫色の空の光がチラチラと落ちてくる。画面は斜めになったり、ひっくり返ったり、揺れたり、なにかしらわざと怖がらせようとしているかに見える。風のようなサーッとという雑音がある。画質から携帯電話のカメラで撮影したようだった。

すると、突然、画面には暗がりの中にぼつんと立つお墓が映る。とても狭い墓地で、墓石は3つか4つぐらいしかない。弟はこの墓地をどこかで見たことがあるような気がした。このシーンが数秒で終わると、こんどはだれかの写真が映し出された。ピントが合っていないので、ハッキリとした顔はわからないが、男性だ。わざとピントを合わせずにゆらゆら揺らして撮っている。

ごくんと兄がツバを飲んだ。

写真が変わった。きつと同じ男性の写真だと思うが、またしてもピントがぼけている。

ところが、こんどはゆっくりとピントが合っていき、何かの証明写真のようなモノクロの男性の顔になった。銀縁の眼鏡をかけた実直そうな中年の男性だった。

するとそこに赤い血のようなものがポタポタと落ちて写真の上に広がった。

ひっと兄が息を吸った。

画面が真っ赤になると、また次の写真が映し出された。

カラーの家族写真だ。父と母と姉と弟と思われる4人が、どこかの海を背にして楽しげにカメラを見ている。だが、その父とおぼしき男性の顔の部分だけが真っ黒に塗りつぶされている。

その真っ黒の顔にカメラはゆっくり近づき、画面全体がぼんやりと黒くなったと同時に、「うーうー」という不気味な声が聞こえ、そして動画は終わった。

「あー、オレ、もうだめ、もうだめ」と兄はその場に座り込んだ。

「こわすぎだよ」と言いながらゆっくりと兄が立ち上がると、弟はなんと、また動画をはじめから見ている。

「おまえ、怖くないの？」

弟は何も答えない。黙ったままじっと動画に見入っている。

「ねえ、呪われたんじゃないかね？」と兄は心配そうに声をかけるが、弟は返事もせずに、画面を見つめたまままだ。

すると、「やっぱり」と弟がつぶやき、スペースキーを押して一時停止にした。画面は最後の家族写真のところまで止まっている。

「なにが『やっぱり』だよ。そんな気味悪い動画、もう、閉じちゃえよ」

「兄ちゃん、西条君だよ」

「ええ？ なに？」

「この写真の男の子、西条君なんだ」

「えええええ！！」と兄は後ずさると、ヘナヘナとその場にくずれるようにして正坐した。

8

教団の教会は渋谷区南平台の高級住宅地にあった。立派なお屋敷が並ぶ人通りもほとんどない静かな道をくねくねと進んでいくと行き止まりになる、その一角が教団の本拠だった。

以前はヨーロッパの小国の大使館だったというその建物は、二つの小さな塔が建物の両脇に立つ2階建ての洋館で、大きな玄関の車寄せの両側はこぢんまりとした森のようだった。短い梅雨のあとの季節外れの盛大なセミの鳴き声に、ここが都心であることを忘れそうだった。

数ヶ月ぶりに訪れた教会を前にして鈴木絵美子は、忘れていた熱狂を思い出したような、不思議と昂揚した気分にいる自分自身を見つけて不安になった。このまま教団に戻ってしまうのではないか。その気持ちを振り払わねばと、鈴木絵美子はしばらくの間、黒の日傘

をさしたまま教会の門の前で立ちつくした。

そのとき、教会の玄関から声がした。

「鈴木さん。どうしたの？ お入りなさいよ」

数年前に絵美子が勧誘して入団させた岡本佐智枝が車寄せに立ち、ノースリーブから突き出した白く太い腕で手招きしていた。

一輝と同じ中学に通う息子がいて、娘もまた麻里と同じ中学だった佐智枝は今や教団の幹部だ。絵美子はひととき、自分より後に入団した佐智枝が、自分をいつの間にか追い越して、教団内部での地位をどんどん駆け登っていくことに嫉妬をいだき、我慢ならなかったことがあった。飲食店を何軒も経営している佐智枝の家は幡ヶ谷の大地主でもあったから、教団への献金額は絵美子がとうてい及ぶものではなかった。

絵美子は作り笑いを浮かべ、門をくぐって車寄せに向かった。

佐智枝は歩み寄ると、絵美子の骨張った右手を肉づきのいい両手で握って何度もふりながら、「お久しぶり。お元気でした？ 退団されたと聞いて、さみしかったわあ」と、眉を八の字にして丸顔に悲しい表情を浮かべて見せた。

「いろいろとありまして……」と絵美子が口ごもると、佐智枝は「麻里ちゃんのこと、聞

きました。教祖様に相談したのは、実はわたしなのよ」と言う。絵美子の右手を握る両手にさらに強く力を入れた。

「どうしてご存知に……？」

「世の中狭いのよ。西原中の保護者の人にね、代々木警察の人がいてね」

「ああ……そうなんですか」

絵美子は警察に裏切られたような気持ちになった。犯罪を犯した一輝のことは隠しようがないが、その姉のことまで噂になっているとしたら、まるで透明なガラスの家に住み、他人に好き勝手にのぞかれているみたいなものだと恐ろしくなった。

「そうしたら教祖様がね、特別に大天使様におうかがいを立ててくださったの」

言いながら佐智枝は絵美子の手を握って教会の巨大な玄関の中に引き入れた。

満月を模した巨大な金色の円盤のオブジェが正面の壁につり下げられていた。その両脇には大きな扉があり、その扉の向こう側は礼拝堂になっている。

天井のシャンデリアがまぶしく輝く廊下を先に立って進む佐智枝は、教祖の執務室がある2階へと上がっていく。絵美子は佐智枝の小太りの後ろ姿を追いかけるようにして、赤いじゅうたんが敷かれた階段を登った。

右手の廊下の突き当たりが教祖の執務室だが、佐智枝は手前の秘書室のドアをノックすると、返事も待たずにドアを開けた。

「鈴木さんがお見えよ」と言いながら、佐智枝は絵美子の背後に回って肩を室内に向けてそっと押した。

「お久しぶりです」と紺のスーツに髪をびっちり七三に分けた男が絵美子を見てデスクから立ち上がり、そしてほほ笑んだ。

「お待ちかねですよ」と言うなり、男は教祖の執務室に通ずるドアを開けた。

佐智枝は絵美子の背中を押した。絵美子は男に軽くおじぎをして、そして執務室へと入った。手が汗ばんだ。

広々とした執務室の奥にはオーク材の大きなデスクが置かれ、その向こうで真っ白な長髪をうしろで束ねた初老の男がこちらを向いて座っていた。彼もまた紺色のスーツに赤いネクタイをしめ、教祖というよりはビジネスマンを思わせ、その日焼けした満面の笑顔はまるで俳優のそのように輝いていた。実際、若い頃はさぞやハンサムだったろうと女性信者が噂するほどの、彫りが深い整った顔立ちをしていた。

「よお、鈴木さん。久しぶりだね。元気かね。退団されたと聞いたが、こうしてまたお会

いできるっちゅーのは、嬉しいね」

教祖はそう言いながら立ち上がると、デスクを回り込んで手前のソファの横に立ち、もう一組のソファを手で指し示して絵美子に座るようにと促した。

「失礼いたします」と絵美子がソファの片側からだを寄せて座ると、隣に佐智枝が腰を下ろした。教祖は二人の正面のソファにゆっくりとからだを沈めた。

絵美子は数ヶ月ぶりに教祖の姿をまじかにして、家庭にいては決して経験できない、スリルと充足感がない交ぜになったあの独特の感情を思い出していた。教団の準幹部として様々な行事を仕切り、勧誘をし、そして宇宙の真理に一番近いところにいるのは世界中でも自分たちだけだという奇妙な優越感にひたされていた日々だった。

絵美子の顔を黙ったままニコニコ見つめていた教祖がようやく口を開いた。

「息子さんのことは試練ですからね。前世から続くあなたの試練だ。そして息子さん自身の試練でもある。大天使様は試練を経ずにして幸福を手に入れることはお許しにならない。幸福の手前には試練という不幸が必ずある。いわば試練は幸福の前奏曲です。大天使様の采配に感謝しつつ、日々をお過ごしください。ね？」

「ありがとうございます」と絵美子は深々と頭を下げた。

夫が、息子が、娘が、異様なほどの嫌悪感をむき出しにして繰り返しやめてくれと言ったこの教団の、どこがそんなにいけないんだろう。絵美子はいままたそんな甘美な自問を始めていた。もしも教祖様が麻里を救ってくれたなら、こんどこそこの教団のためにすべてを投げだそう。そんな決断まであと一步のところまで、絵美子は後退していた。

「あなたの娘さんがいなくなっちゃっちゅーのをね、きのう、岡本さんから聞いてね、さっそく大天使様にね、どういふことかとおうかがいを立てたんだよ。そうしたらね」と、教祖は言葉をいったん切り、絵美子の目をのぞきこむようにした。

「そうしたらね、大丈夫ですと。元気で生きておると」

感謝の言葉が喉の奥でつまって音にならず、絵美子はただ深く頭を垂れた。両方の目から流れ出した涙をふこうと、絵美子はハンドバッグからハンカチを取り出した。

「元気で生きておるが、ただ、親元にはまだ帰らんと。いや、帰れんと。試練が待つておる。その試練を乗りこえねば、帰ることはできんというんだな。大天使様が言うにはだ、その試練を乗りこえる手助けを、この緒形大三郎がいたせとね、そういうメッセージをちゅうだいしたっちゅーことなんだ」

「娘のためになんとかお願い申し上げます」と絵美子はまた深々と頭を垂れた。

「あなたはわたしのパワーを今も信じておるかね？」

「はい、信じております。疑ったことはございません」

涙で絵美子は鼻声になった。

「娘さんは東北地方におる。大天使様との対話のあと、わたしのパワーで探してみた。鈴木麻里さんと言ったね、娘さんの名前は。半紙にその名を書きしたため、月界に入った。

そこで見えたのが、山や川であり、そして福島という文字だった。娘さんはあちこち動きまわっているのかもしれない。正確な町の名はわからなかった。だが、わたしのパワーをもつてすれば判明は時間の問題です」

絵美子は教祖の口から東北地方という言葉が出たことに驚き、奇跡の予感に胸が熱くなるのを感じた。

教祖は立ち上がるとデスクのほうに向かい、そして大きな革のいすにどしと腰を下ろした。

「鈴木さん、お願いがあるんです。教団に戻れとは言わない。もし、この緒形があなたの娘さんを無事見つけ出し、連れ戻したなら、そのてんまつを週刊誌に掲載することを了承してほしいんだ。週刊誌の記者には話をつけてある。あなたは、これが狂言でもうそでも

何でも無く、超自然的な事実だということを保証してくれさえすればいいんです。いかがですか」

「異存はございません。それどころか、わたしが教団に戻ることを家族も晴れて認めてくれると思います」と、絵美子はハンカチで溢れる涙をぬぐった。

「この物質至上主義の墮落した人々に、真理の光というものが現にここにももされていることを、事実を持って知らせたいのです。承知していただけますか？ 承知していただけるなら、1週間以内に娘さんをお連れする」

「はい、喜んで！！」

涙が止まらない絵美子の肩に、横に座っていた佐智枝が手を回し、「よかったね、よかったね」と何度も揺すった。

9

午後4時。夕食にはまだ早いが、ケプラーハウスの面々は食堂に集合することにした。

みんなが食堂に入ると、なぜか高村兄弟が先に来て暖炉の前の一等席に並んで座っていた。

「あれ、どうしたの？」とカメラさんが大テーブルの端のいつもの席に座りながら兄弟に言った。

兄が「呪いの動画メールで新発見がありましたので」と、眉を上下にひくひく動かすと、弟は「かなりの進展です」と口を一文字に結んだ。

次いで入ってきたエミルたちに向かって、「呪いの動画で進展があったそうですよ」とカメラさんが伝えた。

「ふうん」とエミルは兄弟を向いて、「まずは鈴木のお母さんの話からね」と言った。

「鈴木のお母さん？ なにそれ？」と兄がげんなりした表情を浮かべた。

「あれ、知らなかったっけ？」とエミルがびっくりしたように言うと、思い出したようにこう付け加えた。「高村さ、呪いの動画でビビりまくって頭をかかえてたから、話、聞いてなかったんじゃない、あのとき？」

「兄ちゃん、ルミさんに鈴木のお母さんから電話が来たじゃない」と弟がクスッと笑った。

「え？ え？ え？」と兄の顔はみるみる間に真っ赤になった。

アンジェリーナが「鈴木君のお姉さんが行方不明なのよ」と兄に教えた。

ルミさんは少し疲れたような表情で現れるとテーブルの扉に近い方に座った。ルミさんの手に黄色や緑色の絵の具がついてた。いままで絵本の仕事をしていたんだなどエミルは思った。

やがて全員が席に着くと、ルミさんが報告を始めた。

鈴木のお母さんが今日の午後、教団の本部に行き、教祖に会ったこと。

教祖に麻里さんのことを伝えたのは、岡本という女性で、彼女の娘はかつて麻里さんと同じ中学に通っており、現在は息子が鈴木と同じ中学に通う、古くからの顔見知りだということ。

教祖いわく、麻里さんはいまは福島にいます。

この福島という地名に、みんなは「へえー」と声を上げた。

あちこちを点々としているので正確な居場所を特定するのがむずかしいが、時間の問題だと教祖が言ったこと。

そして救い出すにあたり、解決後に週刊誌の取材に応じることという条件を出されたこと。

鈴木のお母さんはその条件を喜んで飲んだこと。

教祖は1週間以内に麻里さんを連れ戻すと声明したこと。

「そうとう自信があるみたい」とルミさんは意見を求めるようにみんなを見まわした。

「どんな根拠があつてのことなんだろう？」とアンジェリーナがつぶやいた。「福島、1週間以内……。もしも遠隔透視でこのことを知ったのなら、教祖は相当のパワーの持ち主ということになるわ」

「東北地方というのは真理さんがお金をおろしたATMの位置からも不思議じゃないが……。セー又川君はどう思うかね？」と天道さんが聞いた。

「実は、先ほども瞑想をしまして、麻里さんのエーテル体への接近を試みました。わたしは漢字が読めませんので、そのムッシューのようにビジョンに漢字はでてこないのですが、またもや、山や川が見えてまいりました。きっと、麻里さんが家出してから一番印象に残りました記憶と思います」

「どんな山や川？」とエミルが聞いた。

「ジャングル」

「アフリカとかの？」

「日本です。動物も、植物も、すべてがナチュラル。町も見えましたが、人は住んでいません。その町が、動物や植物に食べられている。オキユペ」

「無人の町が動物や植物に占領されているということ？」とアンジェリーナが言った。

「まるでジャングルのように。人間がいなくて、生命が大きく大きく膨らんで元気です。麻里さんはそれを見て驚いています。そして元気になりました」

「そこは福島だわ」とアンジェリーナが腕組みをしたまま言った。「福島第一原発の事故で住民が避難していなくなった、いわゆる警戒地域のことだと思っわ。野生の動物が我が物顔で無人の町や村の中を闊歩しているというから」

「福島か」と天道さんもつぶやいた。

「教祖様と同じ結論ね」とルミさんが言った。

「教祖様はセーヌ川と似た力を持っているということなの？ ムーンチャイルド教団、恐るべし……ってわけか」とエミルがひとりごとのようにつぶやくと、高村兄弟の兄が「ムーンチャイルドなんちゃらって、きのう、父さんが電話で誰かと話してたぜ」とエミルに向かって言った。

「高村のお父さんって、雑誌とかに記事を書いているんだよね？」とエミルが聞いた。

「うん。だから、ムーンなんちゃらの記事を書いてるんじゃないかな」

「君のお父さんと話したいんだけど」とエミルは兄に向かって右腕をびゅんと突き出し、人さし指をカモンカモンというように上向きに曲げた。兄はまるで催眠術にかかったかのようにスックと立ち上がるとエミルの前に進み出て、携帯電話をジーンズのお尻ポケットから取り出してエミルに差し出した。

「いや、まず、君がかける」とエミルが言うと、「は、はい」と兄は携帯電話をタップして、そして耳に当てた。

「あ、父さん？ オレ。あのさ、エミルが父さんに聞きたいことがあるんだって」

兄はそう言うのと携帯電話をエミルに手渡した。

「こんばんは。エミルです。……はい……」

エミルは高村の父に鈴木家に起こっている事態のおおむねを伝え、最後にケプラーハウスマまでの道順を伝えて電話を切った。

「お父さん、これから来てくれるって」

「うへっ。父さん、エミルのファンだからな」と兄が口をへの字にした。

「じゃ、キミたちのお父さんがいらっしやるまでに、呪いの動画の話をしてもらおうか」

とエミルが携帯電話を兄に返しながら言った。

「あ、うん」と兄は隣の弟の横っ腹をひじでつついた。弟が話し始める。

「呪いの動画、見てみました」

「おう、ついに君も見たか」と天道さんがニヤニヤした。

「あれは西条君が作った動画だと思います」

そうきっぱりと言うと、全員が顔を上げて弟を見た。

「西条君って、亡くなった子でしょ？」とアンジェリーナが言った。

「西条君の家族写真が映っていたんです。だから、作ったのは西条君か、西条君の家族しかありえないと思って。それに、兄と二人で呪いの動画メールの送信元を追っかけたんですけど、誰だかわからない人から6年2組の吉家君に送られてきたのが、えーと、西条君の亡くなる二日前なので、西条君が自分で作って送ることは可能なんです」

「それにしても、ちょっと変じゃない？」とエミルは人さし指をあごにあてて頭をかじげた。「自分だってすぐわかる写真を使って呪いの動画なんて作る？ 普通だったら、作った本人が特定できる写真なんか使わないでしょ？ 高村、どう思う？ 君がもし呪いの動画を作るとしたら、自分が映っている写真を出す？」

「出さねえ」と兄は間髪を入れず答えた。「自分の写真を出すんだとしたら、呪いの動画じゃなく、脅かしのメッセージ動画だな。おらおら、なめんじゃねえぞ、忘れてねえぞって」「たまにはいいこと言うね」とエミルはパンと手を叩いた。「西条君が自分で脅かしの動画をつくって、脅しのメッセージを伝えたいだれかに送ったとすればつじつまは合う。ねえ、今現在わかっている最後の送信元って？」

弟は一枚の紙を手で広げて見せた。

「これがメアドで、その下に書いたのが、そのメアドに漢字を当ててみたものです」

「自縛死者探索救助隊？」とアンジェリーナがのぞき込んでつぶやいた。

「この誰だかわからない送り手が西条君だとすれば、西条君が脅したかったのが、その吉家くんとかいう人になるわけね。確か、吉家君って度胸試しを最初にやり始めた乱暴者じゃなかったっけ？」とエミルが言うと、弟はこう答えた。

「はい。でも、吉家君はいじめっこじゃなかったし」

「みんなが知らないだけで、かげで吉家君が西条君をいじめたり、脅したりしていたことは十分考えられるわ」

「でもさ、エミル」とアンジェリーナが口を開いた。「脅しのメッセージだとしたら、ど

うしてチェーンメールにするわけ？ 吉家君ひとりにだけ出せばすむことでしょ」

「そうだね」とエミルが腕組みをした。

すると弟がもう1枚の紙を開いてかかげ、みんなに見せた。

「これ、メールの本文です」

すると天道さんが読み上げた。

「……この呪いの動画を見たおまえは自分の行いを懺悔し、そして自ら死をもって償うのだ。24時間以内にこののろいの動画をだれかに送ればのろいはとけます……か」

「なんか、おかしくないですか？」

「なにが？」と天道さんが視線を勇貴に向けた。

「一人の人が書いた文章じゃないような……」

「確かに。文体が違うし、『呪い』の字が漢字とひらがなの2種類あるな」と天道さんは腕を組み、右手であごをさすった。

食堂の中に生まれた沈黙をエミルの「わかった」の声が破った。

「西条君がだれかに脅しのメッセージを送った。そのときのメールの本文が『死をもって償うのだ』で終わる一行目よ。それを伝えて役目を終えるはずだったそのメールを、こん

どはどんな意図かわからないけど、だれかが呪いの動画のチェーンメールに変えて転送した。そのときに付け加えた文章が『のろいはとけます』で終わる2行目よ」

「すごい、エミル!!」と天道さんがパチパチと拍手をした。「たいした中三だ」

「ということは」とアンジェリーナが言った。「少なくとも、自縛死者探索救助隊と名の送り手は西条君ではないことになる。自縛死者探索救助隊はチェーンメールに変えた張本人か、あるいはチェーンメールをもらった人物ということよね」

「だね」とエミルがうなずいた。「いずれにしても、本人に聞いてみるしかないね」

「本人って?」と兄が聞いた。

「自縛死者探索救助隊」とエミルが言うと、兄と弟は顔を見合わせた。「このアドレスにメールしてみない? 西条君のことで聞きたいことがあるって。もしかしたらまだアカウントが生きていて、返事が来るかもしれないし」

「ぼくのパソコン、使っているよ」と大澤さんが手元のノートパソコンを指さした。

「あ、はい」と高村兄弟の弟は大澤さんの隣に座り直した。

大澤さんに使い方を少し教えてもらい、弟はメールを打ち始めた。

——こんにちは。ぼくは代々木西原小学校6年の高村と言います。いま、亡くなった西

条君のことであることを調べています。呪いの動画メールのことで聞きたいことがあるのですが、返事をもらえますか？ できれば、このメールへの返信ではなく、こちらのアドレスをお願いします。――

そして自分のアドレスを書き、送信ボタンを押した。

そのときだ、「こんばんはー」という声が玄関のほうから聞こえてきた。

「父さんだ」と弟がいうと、「異様に早くね？」と兄が言った。

10

「父さん、異様に早くね？」と、顔や首筋の汗を青色のタオルハンカチで拭きながら食堂の大テーブルのまん中に座った父に兄が言った。

「自転車、すっ飛ばしてきたからな」と答える父の息はまだ弾み、白いTシャツに包まれたたくましい上半身が上下に揺れ続けた。

父は食堂に集まっていたみんなの顔をニコニコしながら見まわすと、「あれ、安田君

は？」と誰に問うともなく言った。

「きのうからお母さんの実家に泊まりに。たぶん、今夜戻ってくると思います」とエミルが答えた。

「そうかあ。たいへんだな、彼も」と父は遠くを見るように細めた目を、こんどは大きく見開いて、「お母さんはお元気ですか？」とエミルにきいた。

「はい。もうじき個展なんで、きょうは画廊のほうに打ち合わせで行っています」

「ぜひ観に行きたいですねえ」

「招待状は届いていないですか？」とエミルが言うと、「あ、そういえば、来てたような……」と父が答え、「父さん」と弟がとがめるように口をへの字にした。

エミル以外の面々は高村兄弟の父とは初対面だったから、それからなんとなく自己紹介が始まった。

父親似なのは弟のほうだとだれもが思った。

父親のゆるやかにウエーブがかかったポリウムたっぷりの髪の毛、キラキラした大きな目と、その上にかかる太い眉、ちょっと厚めの唇に、笑うとできるえくぼを、弟はそっくり受け継いでいた。どちらかという縄文系の顔をしているのが父と弟だとすれば、奥

二重で柔和な瞳の光、三日月のような眉、すっきりとしたアゴの兄の顔は弥生系で、きっと、亡くした母親から受け継いだのだろう。

高村兄弟の父がエミルの出した冷たい紅茶をがぶりと飲み、あがった息がようやく落ち着いていたのを見て、ルミさんが状況の説明をした。

父はタオルハンカチを手でもてあそびながら、何かをしきりに考えていたが、意を決したかのように顔を上げた。

「これから話すことは、絶対に他言してもらっては困ります。約束してください」

みんなはゆっくりとうなずいた。

「2週間後に発売される週刊未来に掲載される原稿をいま書いているんです」と父は話し始めた。

「ぼくはアンカーと言って、取材チームがあげてくるデータ原稿をまとめて一本の記事にするのが役目です。で、その記事ですが……」

父はタオルハンカチをもてあそぶ手を止めた。

「ムーンチャイルド教団には脱税の疑いがかけられています」

「ええっ!？」とカメラさんがのけぞった。全員の視線が父の顔に集中した。

「週刊未来のスクープです。絶対に口外しないでください。そういう微妙な話なので、こうして直接参りました」

「申し訳ありません」とエミルが頭を下げた。

「いや、そんな、エミルさん」と高村の父はあわてて片手を左右に振るところ続けた。

「電話でエミルさんから話を聞いて、そしていまこちらの方から話を聞いて」と父がルミさんに軽く頭をさげた。「わたしなりに推理をしたのですが、話しても？」

「どうぞ」とエミルが答え、みんなもうなずいた。

高村の父はタオルハンカチで首筋の汗をまたぬぐうと、話し始めた。

「一ヶ月とちょっと前に編集部にたれ込みがあったんです」

「たれこみ？」とエミルが首をかしげた。

「内部告発です。その内部告発者が判明したからなのか、ムーンチャイルド教団が自分たちに脱税の容疑がかけられていると認識したのはおそらく一ヶ月前ぐらいのようです。わたしたちの取材にもどうも感づいたようです。記事がいまから2週間後の週刊未来に出るということもです。脱税自体はお金の問題なので、教団は問題が社会的に大きくなることを避けて追徴金の支払いなどに応じることになるでしょう。が、彼らが何よりも心配して

いるのは教祖の緒形大三郎の権威がぐらついてしまうことなんです。緒形をはじめとした上層部にさまざまな名目で多額の報酬が支払われ、贅沢三昧の暮らしをしているということが知られれば、アイコンとしての教祖のイメージが大きくそこなわれる」

「アイコンってなに？」と兄が父に聞いた。

「象徴ってなことかな。わかる？」

「なんとなく」と兄が答えた。

「教団では緒形大三郎の権威失墜を防ごうと、いま必死にネタを探しているんです」

「ネタ、ですか？」と天道さんが聞いた。

「ネタ、です。緒形の超能力を証明するような、超自然的な事例のことです。病気を治したとか、死者と話したとか、予言が当たったとか、なんでも」

「なるほど」と天道さんがひざをたたいた。「行方不明者を超能力で見つけ出したということもネタになるわけですか」

「その通り」

高村の父は天道さんを指さし、ニヤリとした。「週刊ブレードがそういった教団側に立った記事を出すという動きをしています」

「教団の味方をしたらその週刊誌のイメージが悪くならないですか？」と天道さんが聞いた。

「裏でお金が動いています。商売ですから」
するとルミさんがこう聞いた。

「で、高村さん、ご意見をお聞きしたいのですが、緒形という教祖は実際に超能力を用いて麻里さんを発見したとお考えですか？」

高村の父は首を振った。

「わたしの知る限り、緒形にはそういう不思議な力はありません。教祖として彼は二代目なのですが、教団を立ち上げた先代の彼の母親にはそういう能力はあったらしい。母親は緒形ノノという人ですが、こう言っちゃ失礼かも知れないけど、彼女はエミルさんたちが持っているものに似た力の持ち主だった。ところが息子のほうは母親の作りあげた教団を引き継ぎ、それをビジネスとして成功させたという側面のほうがだんぜん強い。だから、さっきの話ですが、ネタ探しにはどうも苦労しているようなんです。緒形には超自然的な能力などそもそももないのだから、そんな事例なんてほとんどない。週刊ブレードの記事にはヤラセやウソも多くなるのではないかと思います。だから、鈴木君のお姉さんの件も、

はったりか、そうでなきゃ、だれかが偶然に鈴木君のお姉さんを見つけたのを利用して芝居をうとうしているんじゃないか。わたしはそう思います」

そのとき「はいっ」と大澤さんがノートパソコンのディスプレイに視線を向けたまま手を上げた。

「いま、お話を聞きながら教団のWEBを見ていたんですが、信者さんたちのグループが月に1回のペースで東北の被災地に日帰りボランティアに出かけていて、その報告がのってるんですよ。それで一番最近のボランティア活動がきのうの土曜日なんです」

そう言って大澤さんは顔を上げ、みんなを見まわって言った。

「場所はどこだと思いませんか？」

「もしかして、福島？」とルミさんがいうと、大澤さんが大きくうなずいた。

「福島です。南相馬市で海岸の清掃をしているんですが、そのときの写真が何枚も載っています。リポート文も掲載されていますが、この『文責／岡本佐智枝広報部長』というのが、その岡本という教団の幹部じゃないですか？」

全員がディスプレイをのぞきに大澤さんのもとに集まった。

高村の父が一枚の写真を指さしてこう言った。

「ここに『月の水』という段ボール箱が何箱もあるでしょう？　これは教団の売っているミネラルウォーターで、教祖が念を入れてパワーアップさせた奇跡の水だって言うんですよ。これで多額の利益をあげている」

「一本いくらですか？」と大澤さんが聞いた。

「千円」

「わお」とカメさんが小さくつぶやいた。

「ボランティア活動の最中にさすが千円で水は売らないと思いますが」と高村の父はあきれたように言った。

「ということとは……」とエミルが暖炉のほうに向かって歩きながら言った。

「福島にボランティアで出かけた岡本さんという教団幹部が、偶然、南相馬で家出した麻里さんを見かけてまずは驚いた。麻里さんもおそらくは南相馬でボランティア活動をしてきた。そのときふとひらめいた。これを教祖の超自然的な能力を持っていることの例として利用できるのではないかって。そして教祖と共謀し、鈴木のお母さんをだました」

「間違いないわ」とルミさんが応じると、全員が大きくうなずいた。

「鈴木のお母さんにこの見立てをどう話して、どう理解してもらうか。それが難しいなあ」

と天道さんが腕組みをして天井をあおいだ。

エミルがきっぱりとこう言った。

「麻里さんを連れ戻しましょう。……いえ、連れ戻す必要はないわ。麻里さんが自分らしい生き方を福島で見つけたなら、たとえ彼女が高校生だとしても、それはオレたちが邪魔することじゃないし。だから、麻里さんにお母さんに連絡をしてもらい、真実を話してもらいましょう。それが一番だと思う」

「うむ、賛成だ」と天道さんが言うと、他のみんなも「賛成」と声をそろえた。

エミルは高村兄弟の父に向かって言った。

「高村さん、感謝です。高村さんのお話を聞けなかったら、たぶん、オレたちの推理は行き詰まっていたと思います」

それからエミルはセーヌ川に向かって両手を合わせて、「セーヌ川、もっと詳しい情報をお願い」と頭を下げると、セーヌ川は右手の拳で自分のぶ厚い胸をドンと叩いた。

「エミル、あなたは明日、学校があるからね」とアンジェリーナが隣のエミルをじろりと見た。

「わかってます、安藤先生」と冗談めかしてエミルが言うと、ルミさんが「わたしは大丈

夫。仕事、ひまだから」とニコニコとエミルに向かって手を振った。

「ぼくもヒマです」と大澤さんが手を上げると、「じゃ、ぼくも」とカメさんが手を上げ、「おいしい、じゃ、オレも行くしかねえだろうよ」と天道さんが笑いながら言った。

「組織に捕まった鈴木君を助けに行ったときと同じメンバーだね」とエミルもニッコリした。

「鈴木麻里探索救助隊ってわけね」とアンジェリーナが言うと、高村の兄が「あつ、自縛死者探索救助隊のほうはどうしますか？」とおそろおそろみんなの顔を見まわした。

「明日の放課後、オレが勇貴君の小学校に行く」とエミルは言い、「案内してくれる？」と高村兄弟の弟を見た。

「はい」と弟が元氣よく返事すると、「なんの話だ、勇貴？」と父がニヤニヤした。

「呪いの動画の話」と照れくさそうに弟が答えると、「オレも行くからね」と兄がひじで勇貴の横っ腹をまたこづいた。

食堂に射しこむ夏の夕陽はいつまでも白かった。

母はいつも夜遅くにひとりで食べるのが常だったし、父はいつものように帰りが遅かったから、日曜なのにキッチンのテーブルでたったひとりで夕食を終えた智也は、見たいテレビ番組もなく、さっさと自分の部屋に閉じこもった。

今日の午前には月に一度の身体検査があった。父と母はそれを「ホムンキュリテスト」と呼んでいる。

渋谷にある大きな屋敷に連れて行かれ、そこで医者さんたちからいろんな検査を受ける。検査が終わると、ミッキーマウスが『ファンタジア』で着ていたような黒いガウンを着せられ、頭には三日月が銀色の糸で刺しゅうされた三角形の帽子をかぶされる。その衣装のまま大きな広間に通されて、家族を含めた全員で豪華な昼ごはんを食べるのだ。ごはんが終わると、白い長髪のおじさんが同じような黒いガウンを身につけて現れ、何語かわからない言葉で呪文のようなことを言って、三日月型の短刀を子どもたちに向けて、シュツシュツと空気を切るように振り下ろす。それから白いガウンをまとった女の人たちが現れ、

その人たちのマンドリン演奏と歌を聴いて、すべてが終わる。

智也と同じ年頃の子どもが別に3人いて、みんな、1号、2号、3号、4号と呼ばれるので、それぞれの名前は知らない。ちなみに智也は1号と呼ばれる。会話も禁止されているので、他の子どもたちがどんな子どもたちなのか、ちっともわからない。ただもくもくとごちそうを食べるだけだ。

苦痛というわけではないが、楽しいというわけでもない。ただ面倒だった。

なぜこういうことをするのかとたずねると、母親は「あなたは星で選ばれた子どもたちのひとりだから」とだけしか答えてくれない。そして「このことは絶対に誰にも言うてはいけません」と言う。このときの表情は別人のように恐ろしいが、そのとき以外の母は常に優しく、怒ることもめつたにないのだった。

そんな「ホームキュリテスト」から解放され、宿題も片付け終わり、さあ、たっぷりある夜の時間をなにして過ごそうかと、久しぶりにちよっぴり嬉しい気分だった。だが、パソコンの電源を入れ、ゲームソフトの広告ぐらいいしかメールが来ないのでほとんど使うことのないメーラーをたまたま立ち上げ、そこに代々木西原小学校の同学年の生徒からのメールを見つけてしまった智也はとたんに胸が重苦しくなった。

アカウントを削除するのを忘れていたんだと、智也は後悔した。

このアカウントから自分のことがわかるはずはないと思い直して、少し気分は楽になったが、それでも忘れようとしていたことを忘れさせてはくれない現実には、智也は蜘蛛の巣につかまった無力な昆虫になった自分を想像した。

そのメールの主は西条君のことを調べていると書いてあった。呪いの動画のことで聞きたいことがあるとも。

智也はゴミ箱にそのメールを入れた。捨ててはいけないものを捨ててしまったという気がした。

それから智也の手は無意識に古いアクションゲームのアイコンをクリックした。『トゥームレイダー』の3だった。もう何度も何度もクリアしているから、いまでは死ぬようなへまはしない。いかに効率よく敵を仕留め、ゴールに到達するかだけが目的だ。知り尽くしなじんだ、ポリゴンでできた世界の中に、まるで頭だけでもぐり込ませていくような、そんな感覚が気楽で快感だった。

それはあの死者の探索救助の夢に似ている。

ゲームでは自分は決して死なない。自分の代理であるララ・クロフトは死んでも、保存

した時点に戻ればまた生き直すことができる。決して自分自身は死ぬことがないのだ。そんな死と肉体を超越した世界で、宙返りをしたり、川に飛び込んだり、回転しながら銃で敵を倒したり、ロープにぶらさがってマグマの上を渡ったり、ほかにも限りない超人的な行いをするのは、ほんとうに面白くてたまらなかった。

そんなゲームの世界と死者の探索救助の夢は似ているが、一つだけ違うところがあった。そしてそれこそが本当に大きな違いだった。

それはゲームと違い、生身の人間を相手にしているということだった。

夢の中とはいえ、智也にとって、それはもはや想像上の世界などというものではあり得なかった。

目に見える形や色はともリアルだったし、なんといっても自分の感情を揺さぶる生身の人間の悲しみや喜びはリアルとイマジネーションという対立を越えて、まさに直接体験として智也の記憶に刻まれ、心を震わせた。

ときどき自分は病気なのではないかと思う。

なぜなら、こんな不思議な夢を見続けること自体、絶対にありえないじゃないか。頭の半分で夢を見ながら、もう半分では目覚めていることもしょっちゅうだし、第一、同じ背

景、同じ登場人物、同じテーマの夢をまるでテレビの連続ドラマのようにして見るなんてことが可能だろうか。しかも、あんなにリアルに！！

おおもとの原因はなんとなくわかっていた。

ひとつは毎朝の黄金の夜明けの儀式だ。朝の5時に起き、父と母とともに東の方向に向かって、わけのわからない呪文を唱え、独特のイメージを思い浮かべる瞑想をする。それを、小学校1年のころから毎朝続けてきた。

そして小学校4年のころから聴かされ始めた謎のCD。ザーツという雑音だけが入っている、言葉も音楽もない、謎のCDだ。母親に無理やり毎日聴かされ始めたころから、不思議な夢を見るようになった。

5年生になってからは、ときどき、母親の言いなりに、夢うつつの状態の中でさまざまな化け物のイメージを作り出し、ゲームのようにしてだれかを攻撃させるというような奇妙な練習をさせられるようになった。名前を書いた紙と写真を渡されて、その名前の人間を恐怖のイメージで攻撃してみなさいと言われることもしょっちゅうあった。時には、切った爪や血が染みこんだハンカチなどもいっしょに渡され、持ち主を殺してしまいなさいと命じられたこともあった。

一度、いやだと拒否したことがあった。すると母親は「星で選ばれた子どもたちのひとりだから、わがままは通らない」と智也を厳しく叱った。

……智也は『トゥームレイダー』を強制終了した。やけっぱちな、意地悪な気分がムクムクと胸の中に広がったからだ。

智也はゴミ箱の中からさっきのメールを受信箱に戻し、開いた。

メール本文の最後に高村勇貴という署名がある。

名前に聞き覚えはあったが、顔が思い浮かばない。

いじめを恐れるあまり、他人からの視線をも恐れるようになった智也は、5年生の4月からずっと、学校内での人間関係をほぼゼロに保ってきた。それは自分を透明人間のようにすると同時に、学校の他の生徒への関心も失い見えなくしてしまう。同級生の名前なんか知らなくても生きていける。名前と顔が一致しなくても実際、不便はなかった。自分の名前が呼ばれたかどうかだけに注意を向けていればいい。そうして透明人間になれば、だれからも興味は持たれないし、侮辱されることもない。そして現実には、5年生のクラス替え以降、智也はいじめの対象となることがぱったりとなくなったのだ。

他の生徒たちがLINEを介して偽善的な感情のやり取りをしているときも、智也の携

携帯電話にはそもそもLINEなど入っていないので、よけいな不安や怒りとは無縁でいっづけられた。それはとてつもなくさわやかで、自由な気分を智也に毎日もたらしてくれた。だから、高村勇貴という名前の記憶はおぼろにあっても、その名前が顔やからだをともなうことはありえなかった。

透明人間としては本来なら、そのメールはゴミ箱の中に入れたままにしておくべきだった。だが、透明人間が帽子をかぶって歩けば帽子だけが動いて見えるように、透明であることを逆手にとって意地悪を試してみたいという誘惑に智也はかられた。

智也は、しばらくディスプレイをじっと見つめてから、キーを打ち、返信の文章を書き始めた。

12

晴天の7月8日 月曜日の午前7時。

ケプラーハウスの門から出て行くマツダCX5に向かって、エミルとアンジェリーナと

セーヌ川が手を振った。すでに夏の日は高く、イチヨウやケヤキの木々の葉の群れをすり抜けて突き刺す光はとくに真昼のようにまぶしかった。

ルミさん、大澤さん、カメさんと天道さんが福島へ向けて発ち、残った3人は食堂に向かった。安田は軽音の朝練とかで7時前に登校していった。早朝から大音響でロックを演奏するのかと思いきや、アコースティックギターをバックにボーカル練習をするんだそうだ。

今朝はいつもより早く全員で朝食をすませていたから、エミルとアンジェリーナは緑色した野菜のスムージーを、セーヌ川はたっぷり入れたコーヒーをマグカップで飲んだ。

「教団はどんな動きをしようとしているのかな？」とエミルがひとりごとのように言った。「向こうのほうが持っている情報量は多そうだし……」

アンジェリーナがスムージーを飲みほしたグラスを両手でいじりながら言った。「岡本という幹部がどこまで麻里さんに近づけたかによるわ。教祖様による奇跡という芝居を打つのなら、岡本という人が麻里さんに見つかってはまずいわけでしょ？ あくまでも最初に教祖が超能力で見つけたようにしなくちゃいけないから」

「でも、教団のだれかが麻里さんを尾行し続けているかもしれない。もしそうだったら、

ルミさんたちより先に教団が麻里さんを連れ戻す可能性がとっても高くなる」

「そういえば……」とアンジェリーナの顔が曇った。「きのうルミさんの報告で、こんなこと言ってなかった？ 麻里さんはあちこちを点々としているので正確な居場所を特定するのがむずかしい、そう教祖が言っていたって……」

「ということは……」

「エミルの言う通りかもね。だれかが尾行した。だから、いろんな場所を点々としていると言ったんだわ」

するとセーヌ川がこう言った。

「でも教祖は正確な居場所はわからないと言っていました。電車やバスを乗り継ぎますと、シュタージでもなければ尾行は難しいですね」

「シュタージ？」とエミルが問うと、「昔の東ドイツの秘密警察です」とセーヌ川はウィンクした。

「つまり、麻里さんの尾行に失敗したということか。それで1週間という期限を出したのかも。尾行がうまくいっていれば、今日にでも連れ戻せるわけだもん」とアンジェリーナはニヤリと笑った。

セー又川がぶ厚い胸に大きな手を当ててこう言った。

「わたしもこれから何度か瞑想して、新しいビジョンを手に入れるように努力いたします」
樂觀的な気分にな少し傾いた3人が次に取り上げたテーマはあの西条君のことだった。

アンジェリーナがエミルに聞いた。

「きょうの放課後に代々木西原小学校に行くんでしょう？」

「うん。接触はできなくても、接近はできるはず」

「接近？」

「西条君のエーテル体が見えるとかね。それよりも」とエミルは眉を上げてアンジェリーナを見た。「昨日の夜中、勇貴君からメールが転送されてきたの。あの自縛死者探索救助隊っていうアドレスからのメール」

「アカウントは消してなかったのね」

「読む？」とエミルが聞くと、アンジェリーナは食堂の壁に掛かる大きな時計に目をやり、「まだ時間はあるか」と立ち上がった。

「わたしはどうせ漢字が読めませんですから、コーヒーをゆっくり飲んでおります」とセー又川は肩をすくめた。

食堂を出てエミルの部屋に向かうと、長い廊下の突き当たりにある玄関から白い日差しと一緒に小さなシルエットが流れ込んできた。

「ママ、お帰り!!」とそのシルエットに向かってエミルが大きな声で言った。

シルエットは片手をあげてエミルの声にこたえると、廊下をこちらに向かってやって来る。

「お母さん、徹夜?」とアンジェリーナがエミルに聞いた。

「もうすぐ個展だからね。追い込み中」

近づいてくるエミルのママは全身絵の具だらけの白いつなぎを着たままで、顔色は青白い。

「大丈夫?」とエミルが眉を寄せると、ママは無理やり口をこじ開けるようにして少しだけ笑った。

「つかれた。お昼まで寝るね」

そう言ってママは自宅へと続く渡り廊下へとトボトボと向かった。

ママの後ろ姿が消えるのを待って、エミルは自室のドアを開けた。

エミルはデスクの前に立つと、パソコンのメーカーの受信リストを指し示した。

アンジェリーナは立ったまま腰を曲げてディスプレイに顔を寄せた。

メールはこんなふうに書かれていた。

まず勇貴の次のようなコメントがあった。

《自縛死者探索救助隊のアドレスから返信が来ました。ビックリしました。そのまま転送しますので、エミルさんの考えをあとで教えてください。》

そして転送されたメール本文があった。

《わたしは西条の死の真相を知っています。西条はのろいで自爆しました。これ以上、西条の死に興味を持つと、おまえものろわれます。死にたくなければ、西条の死のことは忘れろ。》

アンジェリーナはディスプレイから顔を上げると、困惑した表情でエミルを見た。

『呪い』が漢字に変換されていないね。どう思う?』とエミルが聞いた。

「文章が幼い。おそらく代々木西原小学校の同学年の生徒ね。西条君の死について、この子は何かを知っていて、それを隠そうとしている」

「もし、この子が西条君の脅しのメッセージの対象だったとしたら、この子が西条君をいじめてたりしてたのかな……」

「……どうかな。まず、わたしたちも呪いの動画を見てみなくちゃ」

「高村に言って転送してもらおうわ」

「さ、そろそろ出ないと遅刻よ」と安藤先生の顔になったアンジェリーナがエミルに言った。

「はい」と中三の女子に戻ったエミルが小声で返事をした。

13

まるで緑色に輝く山や高原を翼を出して地面すれすれに飛行しているかのような気持ちだった東北自動車道を、CX5は福島西インターチェンジで下りると、福島市の中心部に向かってこんどはゆっくりと、誰も渡らない信号で止まったり、横断歩道で老人が渡り終えるのをのんびり待ったりしながら進んでいった。

福島県のポランティアセンターは中心部の官庁の建物が並ぶ一角にある社会福祉センターの中にあつた。時間はちょうど12時だった。

駐車場にクルマを入れるとルミさんだけがリュックをかついで外に出、ボランティアセンターに向かって歩き出した。頭のとっぺんから降り注ぐ盆地の太陽がアスファルトに反射してまぶしかった。

センターの中に入ると「ボランティア受付」という大きな看板が立ってかけてあるカウンターがあった。ルミさんがその前に立つと、スポーツ刈りで日に焼けた青年がそそくさどやってきて、「ボランティア希望ですか？」と言った。

「いえ。あとう、人探しをしているんですが」

そう言ってルミさんはリュックを背中からおろし、中から自分の名刺と鈴木麻里の写真を取り出した。

「小山ルミと申します」とルミさんは名刺を差し出した。

青年は名刺を裏返ししたりして何度も見てから、「絵本作家さんですか？」とルミさんをためつすがめつ見た。

「それで、人探しでしたっけ？」

「はい。友だちの妹さんが福島でボランティアしているんですが、連絡が取れなくて。作品を書く参考にしたかったので、ボランティア経験の話を聞きたいと思っています」

「それだけのためにわざわざ？」と青年の目が疑わしげに曇った。

「いえ、これから宮城に旅行をするので、ついでに」

「そうですか。ちょっと待ってください」と言うとき青年は何かの台帳のようなファイルをかかえて戻ってきた。

「なんとという名前の人ですか？」

「鈴木麻里さんという17歳の女性で、マリのマはアサで、リはサトです。ボランティアを始めたのはここ数週間以内だと思います。写真もあります」とカウンターの上にルミさんは鈴木麻里の写真をおいた。

青年は写真にチラリと視線を落としただけで、「ああ、その人はうちに来ていませんよ」と無表情に即答した。「朝一番で、別の人が同じ人を探しに来ましたからね。そのときに調べたんで」

「別の人？　どんな人ですか？」

「中年の男性でしたが。二人で」

ルミさんはカウンターの前から写真を回収するとリュックのポケットにしまい、「ご迷惑をおかけしました。ありがとうございます」と頭を下げると、背中に青年の不審げな

視線を感じながら、そそくさと出口へと向かった。

車に乗りこみ、さっそくみんなに報告した。

「教団も探しているってことか」と天道さんがハンドルをギュッと握った。

そのとき、ルミさんの携帯が振動した。セー又川からだった。

「もしもし。ルミです。……ああ、そう。……素晴らしい」

みんなの視線がルミさんに集まった。ルミさんが携帯を左手に持ち替え、みんなを見まわしながら右手で何かを書くジェスチャーをした。カメさんがあわてて内ポケットからボールペンを取り出すと、大澤さんがノートをルミさんの前に広げた。

「はい、はい」と言いながら、ルミさんはセー又川の言葉を書き取っている。

「セー又川さん、本当にありがとう！！ オーヴォワー！！」

ルミさんは電話を切ると、まるで急がないと書いた文字が消えてなくなってしまうかのうように、メモを見ながら説明を始めた。

「セー又川さんが午前中に瞑想したときにですね、麻里さんが寝泊まりしている場所のイメージとしてこれからいうものが見えたということです。ノイズが混じっているかもしれないけれど……」

そのイメージというのは次のようなものだった。

軍隊の基地のようなもの。大きな門に兵隊が立っている。

赤い建物の屋上にある大きなポーリングのピン。

小さな川とそこにかかる橋。水色の鉄の欄干。

大好きな人間とともにいる感覚。二段ベッドで眠る楽しい感覚。子どものような無邪気さ。

何かはわからないが、5つの丸が五角形の頂点にある図形。麻里さんが睡眠をとる場所のそこら中にこのシンボルがある。

これらがセーヌ川が鈴木麻里のエーテル体に接触して得られたイメージだというのだ。

大澤さんがインターネットに接続させたノートパソコンを見ながらこう言った。

「軍隊の基地というのは、自衛隊の駐屯地のことだと思えますけど、福島にも仙台にも駐屯地があります。どっちだろう……」

カメさんが言った。「きつとそばにポーリング場のようなものがあるんでしょう。福島
の駐屯地に行つて、そばにポーリング場がなければ仙台ということになりませんか？」

「それから」とこんどは大澤さんが続けた。「二段ベッドのイメージはゲストハウスを思

「いおこさせるんですけど」

「ゲストハウスってバックパッカーとかが泊まる安宿のこと？」とルミさんが聞くと、「はい」と大澤さんがうなずいた。「被災地の近くではボランティアの若者たちが利用しているんですよ。ぼくも以前、がれきの片付けのボランティアで行ったときに、松島のほうのゲストハウスに泊まったんですけど、二段ベッドがあつて一部屋4人で使うみたいなのころでしたから、麻里さんもそういうところに寝泊まりしているんじゃないかなと思います」「そうだな」と天道さんが確信したかのように腕組みをして何度もうなずいた。

14

給食の片付けが終わり、みんなは校庭に飛び出していったが、勇貴はいつものようにひとり図書室に向かった。勇貴は紙とインクのおいが好きなのだ。

図書室は3階の端にあるので、6年1組の教室を出てすぐ前にある階段を上り、そして廊下を途中で一度90度に曲がって、あとはずっとまっすぐに歩くと到着する。

その階段の踊り場で勇貴は3人の生徒に呼び止められた。クラスは違ったが、もちろん誰だかすぐにわかった。

吉家君と梶本君、そして守谷君だった。呪いの動画メールの話だと勇貴はとっさに思った。

「あのさあ、高村」と勇貴より頭半分ほど大柄な吉家君が声をかけてきた。「きのうさあ、電話もらったじゃん」

「うん。いきなりで、ごめんね」と勇貴はまず軽く頭を下げて様子を見た。

「他のヤツらにもいろいろ聞いてみたいけどよ、なんで？」

答を準備していなかった勇貴は言葉に詰まった。すると梶本君が言った。

「おいらがメールした相手はさ、おいらが送ったって知ってるの？」

「いや、教えてない。確か沢渡君だと思うけど、ぼくはメアドを教えてもらったただけだから」と勇貴が言うと、梶本君は少し安心したように少し太り気味のからだの上に乘った丸顔の表情をゆるめた。

「もっかい聞くけど、なに、目的は？」

吉家君が少しいらついた。

「あの、実は……」と勇貴は本当の理由と少し嘘の理由をまぜてこう答えることにした。「西条君が亡くなったのは呪いの動画を見たからだって噂があるの、知ってるよね？」

吉家君ら3人はゆっくりとうなずきながら顔を見合わせた。

「それで、本当にそうなのか、調べてみようと思ったんだ。ぼくのところに届いた呪いの動画を送った人からさ、順番にたどっていけば、西条君が呪いの動画を見たかどうかわかるかなって思ったんだよ」

「で、わかったのかよ？」と吉家君が言った。

「わからなかった。途中で、誰のメアドかわからないのが出てきて、そこでストップしてしまったから」

「もしかして、そのメアドって、オレに送ってきた、わけわかんねえメアドじゃね？」

「うん。ジバクシシヤなんちゃらってメアドの人が誰か、考えても考えてもわからなくて、そこで止まっちゃった」

勇貴は吉家君が何か言いたそうにしているのを見て、こう聞いた。

「吉家君、あのメアド、誰かわかる？」

吉家君はからだをもぞもぞさせてからこう言った。

「オレさ、見たんだよ、あの動画。そしたらさ、西条が映ってんじゃない。だから、西条が送ってきたんじゃないの？」

「それは違うみたい。あのメアドにぼく、メールしたんだ。そしたら昨日の夜、返事があった。西条君だったら亡くなってるから返事は来ないはずだもん」

守谷君がからだをブルブルとふるわせた。4人は少しの間、何も言わなかった。

「その返事になんて書いてあったんだよ？」と吉家君は聞いてきたが、勇貴は本当のことを言うつもりは無かった。

「調べるのはやめろって。それだけ」

「わけわかんねえ……」

守谷君が四角い顔をこわばらせて「西条の幽霊がメールに返事したんじゃない？」と言うと、吉家君が「ぼかじゃね？ 幽霊がパソコン見るかよ、幽霊がキーボード打つかよ」と無表情で言った。

「でさ」と吉家君の視線が勇貴に戻った。「そもそもよ、それ調べて、なんの得があんの、高村に？」

「あ、ただの好奇心ってゆうか」

「好奇心のわりには熱心じゃね？」

「そう？」

「なんかさ、西条が事故ったことにさ、オレらが関係しているとか疑ってんじゃないかね？」

「それはない」と勇貴は即座に否定した。「一度も思ったことないよ、そんなこと」

「ほんとか？」

「ほんと」

「オレら、西条をいじったことって、一回もねえし。てか、『西条？ WHO？』って感じだよ。あいつ、目立たなかったからな」

梶本君と守谷君がシンクロしたように大きくうなずいた。

吉家君は踊り場の隅っこに後ずさるようになして移動すると、こっちに固まれというふう
に手招きした。勇貴も吉家君に近づいたが、50センチほどのスペースは守った。

「高村、LINE、してる？」と吉家君は声をひそめて言った。

「ううん」と勇貴は首を振った。

「ま、いいんだけどさ、6年2組の裏グループがあんだよ、LINEで。それで噂になっ
てんのがさ、西条は自殺したんじゃないかねえかってことなんだよ」

「どうして？　警察は事故って発表したんでしょ？」

「警察はな。でもよ、LINEではよ、自殺説で盛り上がってんだよ」

「盛り上がってる……」と勇貴はその言葉を繰り返した。不快だった。

「おう。なんでかつつーとさ、西条の親父さん、家出してもう一ヶ月も行方不明なんだってよ。しかもだ、社宅を追い出されてよ、近所のぼろアパートに引っ越したらしい。それで絶望して、死んだんじゃないのってはなし」

「誰がそんなことを言ってるの？」

「誰がって、みんなだよ。西条の近所に住んでるヤツもいるしよ、親どもが噂するのを聞いているのもいるしよ。それで盛り上がってんだ」

勇貴はたくさんの生徒たちが西条君の死について楽しそうに話す、その軽薄な表情が目につかぶようにムカムカした。

「人が死んだことで盛り上がるのって、よくないと思うけど」

勇貴の声は少し震えていた。

吉家君の顔がゆがんだ。

「なんだよ。おまえだって好奇心で調べてんじゃないかねえか。同じだろ」

勇貴は口を結び、うつむいた。

吉家君は自分の威厳を示すように右手を勇貴の肩に置くと言った。

「高村もよ、なんかわかったら、メールくれ」

そして3人は階段を一段飛ばして1階まで駆け下りていった。

勇貴は3人とは反対に階段を上り、図書室に向かった。

廊下を歩きながら、いまの吉家君の話が、少なくとも呪いの動画メールの写真の謎を解く一つの手がかりになったと勇貴は思った。

おそらくは西条君の父親であろうあの中年男性の写真。そして家族写真でそのお父さんの顔だけが黒く塗りつぶされていたこと。それは父親の失踪を表現しているのだと勇貴は確信した。

とすれば、あの呪いの動画は、西条君が父親の失踪について、だれかに訴えたり、あるいはだれかを脅したり、責めたりするために作ったものなのか？ その相手とは？ それは同級生のだれかなのだろうか？

図書室のドアをそっと開け、勇貴は科学コーナーを目指したが、書棚の本の行列を見ても上の空だった。適当に1冊を抜き出し、窓際の読書席に座った。北東向きのその窓はちょ

うど日陰となって、校庭で遊ぶおおぜいの生徒たちが見えた。それはまるで緑色の空間内
であちこちぶつかるいろんな分子の運動のようだった。

勇貴はそれをぼんやり眺めながら、また考え始めた。

西条君の父親の失踪と呪いの動画が関係があるのは確かだし、動画を作ったのは西条君
だ。ここまでは間違いがない。

問題は次だ。だれに訴え、だれをとがめようとしたのかだ。

同級生はありえないと思った。父親の失踪と、西条君の同級生になんらかの関係がある
とは思えない。

それじゃ、どうして西条君がつくった呪いの動画が同級生たちのあいだに広まったの
か？

そうだ、自縛死者探索救助隊のメアドの人物が鍵だ。

その人物からの昨日の返信によれば、西条君の死に関わるなど警告していた。知られた
くないことがあるのだ。いったい何を？　そしてあのメアドの主は誰？

わからない、わからない。

「しーっ」と隣で女子生徒が言うのが聞こえた。横を向くと人さし指を口に当てて勇貴を

見ていた。

無意識のうちに「わからない」と声に出していた。勇貴は恥ずかしくて顔がほてった。

15

校門を出ようとする、「エミル」と高村見太郎の呼ぶ声がした。どこにいるんだろうとキョロキョロすると、肩をポンとたたかれた。

振り向くと安田も一緒に立っていた。

「おう」とエミルが言うと、「オレも行っている？」と安田が聞いた。

「いいけど」

「いちおうオレの母校だし」

「ちょっとメールを確認するから待ってて」と校門を出たエミルは立ち止まり、カバンからiPhoneを取り出した。

ルミさんと美紗からメールがお昼すぎに入っていた。

ルミさんのメールには、セーヌ川のビジョンと一致する場所がなかったので仙台へ移動しますとあった。

美紗のメールには、エミルの母の個展のオープニングパーティーに行ってもいいかとあった。

2つのメールに急いで短い返事をした。

ルミさんのメールには、ご苦労さま、麻里さんが見つかるようにと。

美紗には、楽しみに待っているし、その日はうちに泊まってねと。

それから3人はいつものように最寄りの経堂駅までを、静かな住宅街の中の道をてくてく歩く。やって来る車も、追いこす車もほとんどない。梅雨が早く明けたせいでやって来た7月上旬の真っ青な夏空の下。歩いているのは同じ鷗星学院の生徒だけだ。

道々、エミルは高村の弟から転送されてきた『自爆死者探索救助隊』からの返信について安田に教えた。もちろん高村の兄はすでにそれは知っていて、昨日の夜から弟とずっと考え続けたけど何も思いつかなかったと口をとがらした。

すると安田が「あ、そういえば」と並んで歩くエミルに顔を向けた。

「その西条君の姉貴ってさ、シオリって名前じゃない？」

「そうなの？」

「俺たちと同じ学年にさ、西条シオリって子がいたんだよ。同じクラスになったことはないけど、なんで覚えてるかって言うとき、すごい成績がよくてさ、筑波大付属に入ったんだよ。たぶん、彼女は西条君って子の姉貴だと思うよ」

「なんでだよ？」とこんどは高村が聞いた。

「だって、弟と一緒に歩いてるの、何度も見たからな。勇貴と同じ学年だろ、西条君って。西条シオリって子の弟も勇貴と同じ学年だったし」

小学校のころの記憶が鮮やかに安田の頭の中によみがえった。姉のほうはおかっぱ頭で黒縁の眼鏡をかけていた。スカートから突き出たほっそりとした足がまじめそうに道を踏みしめ、ひとまわり小さい弟はけっして姉のそばから離れることなく、二人して歌を小さな声で口ずさみながら安田の少し前を歩いている。なんの歌だったのだろうか……。

「くわしすぎ。あやしくね？」と高村が肩で安田をつついた。

「その西条君の家ってさ、たぶん学校から俺んちまでの途中にあるんだよ。登校るときも、下校るときも、よく同じ道で見かけたからな」

道の向こうに商店街のにぎやかな往来が見えてきた。経堂駅はもうすぐだ。

突然、高村が「なんかジージー言ってね？」と言い出した。

「あ、オレのiPhoneかも」とエミルはカバンに手を入れた。「やっぱり。……もしもし」

電話するエミルをまん中に、途端に人通りも騒音も激しくなった商店街を駅に向かって歩く。

「はい、わかりました。……がんばって」

そう言ってエミルは電話を切った。

「ルミさんから。ラウンド1がそばにある自衛隊の駐屯地が仙台にあったって。しかもそばを川が流れていて、橋の欄干が水色だったって」

「なにそれ？」と高村が眉を八の字にした。

「セーヌ川のビジョンと一致した場所があったってこと」

「てことは、もうちょっと？」

「うん、もうちょっと」

安田が言った。

「鈴木も少年院で心配してるだろうな。たった一人の姉貴だもんな」

エミルと鈴木は、安田のたった一人の弟、翔二もまた少年院にいることを思って、何も言わなかった。

経堂から各駅停車に乗り、十数分ほどで着いた代々木上原駅から、3人は代々木西原小学校に向かって、またてくてく歩き始めた。

高級マンションやお屋敷が両脇に並ぶ坂道を上りきり、家々が少し小粒になってきたあたり小学校はあった。

南門でジーンズにTシャツの勇貴がランドセルを背負って待っていた。

「あ、安田さん」と言って勇貴はぴよこんとおじぎをした。

「ひさしぶり」と安田は手を上げてニコリと笑った。

自宅から比較的近所にある母校だが、3人とも滅多に訪れない。だから、校舎を見た途端になつかしさがこみ上げてきた。広く感じた校庭はこんなに狭かったのかと安田は思ったし、巨大建造物のように思えた校舎は高村にはいまや「耐震基準は大丈夫か」と頼りなげに映った。いじめられたり、冷やかされたり、そういう悲しい記憶がどうしてもよみがえるエミルには、この学校自体が自分が克服し踏破した高い山のように見えた。

「南門のあそこで、オレ、エミルから死んだ母さんの話、聞いたんだよな」と高村は校庭のイチヨウの木を見た。「ごめんな、エミル。すまんかった」と高村が下を向いた。

「兄ちゃん、泣いてんの？」と勇貴が兄の顔を心配そうにのぞき込むと、兄はクルリと反転して弟の視線から逃れた。

「高村、センチになってるひまはないぞ」とエミルが言うと、安田が笑い声をかみ殺そうと口を結んで息を止めた。

3人は南門から校内に足を踏み入れた。花がしぼんだ朝顔が一行に並んでいる。クラブ活動が休みの日なのか、校庭で遊ぶ生徒も少なく、閑散とした放課後だった。

すると警備員が目ざとくエミルたちを発見して駆け寄ってきた。

とっさにエミルが「照井先生はいますか？ 卒業生なんですけど」と言うと、青い制服に制帽の初老の警備員は、「あ、そうなの。職員室に行ってみてね」と親切そうな笑顔を浮かべた。

4人は礼を言って、東玄関に向かった。

玄関へ続くコンクリートの段差のところまでやって来ると、段差の脇に飾られた花が見えた。大きなガラスの花瓶に入れられたたくさんの白菊と、小さな白い陶器の花瓶に入れ

られた青く可愛らしい矢車菊が並べて置かれ、その横にペットボトルのジュースが数本あった。

西条君はここで亡くなったんだなと3人は思い、その前で立ち止まった。勇貴は何も言わず、3人のうしろでじっとしていた。

勇貴が言っていたプレハブの資材小屋が無くなっていた。

「撤去したのね？」とエミルが勇貴に聞くと、こくりとうなずいて、「西条君が亡くなった次の日に解体してました」と勇貴が答えた。

エミルが2階を見上げると、つられるようにして安田と高村も空を仰いだ。

それからエミルが両手を合わせて目をつむると、あわてて残る3人も手を合わせて黙とうした。

エミルは顔を上げると安田たちを振り返った。

「職員室に行こうか。せっかくだし」

勇貴は自分のうわばきにはきかえ、エミルたちは来客用のスリッパを借りて1階の廊下をスタスタと奥のほうへと向かった。

職員室の手前までやって来たところで、うしろから「能流登！」と大声でだれかが呼

んだ。間違はなく5年と6年のときの担任の照井先生の声だとエミルは振り返ると、まさしく、キューピーさんがメガネをかけたような照井先生が廊下の端のほうで手を振っていた。

照井先生は早足でこちらに向かいながら「元気かあ」とまた大声で言った。

エミルは先生に見えるように大きくうなずいた。

先生は4人のところにやって来ると、安田と高村を交互に見くらべて、「もしかしておまえ、安田？ おまえ、高村？」と嬉しそうに言うのと、「オレに会いに来たのか？ なわけないか」と豪快に笑った。

「先生、あいかわらず、声、でっけえ」と高村が言うと、「心はちっちゃいけどな」と先生はまたゲラゲラ笑った。

「能流登、おまえ、超能力は健在か？」と照井先生がエミルに聞いた。

「おかげさまで」と照れくさそうにエミルはうつむいた。

「おまえの超能力にはみんな世話になったな。オレのオフクロンときもだ」

高村が「えええ？」と目を丸くした。「先生もエミルの世話になったの？」

「おうよ。放課後な、血相変えて職員室にやってきてさ、先生、おかあさんが来てるって

言うわけよ。オレは最初、エミルのお母さんが来たんだと思って、何の用かかってきいたら、オレの母親のことだって言うわけだ。なに馬鹿なこと言ってるんだって思った。だって、母親はその1週間前に死んだばかりだったからな」

「先生、もういいよ」とエミルが恥ずかしそうに手を振った。

「いや、言わせてくれ……。でな、能流登が言うわけだ、真剣な顔してさ。オレのオフク口がそこに来ている、『薔薇の十字架の本』と言っていると。なにそれと思うわな。でも、能流登は真剣だ。先生のお母さんが『薔薇の十字架の本』と伝えろと言っていると。いい。わかったといって、能流登を帰らせた」

照井先生はそこで一度言葉を切った。ごくりとツバを飲んで、腕組みをして、過去を眼前にたぐり寄せるかのように目を細めると、「ここじゃなんだな、こっち来い」と回れ右して歩き出した。4人が続くと、先生は応接室のドアを開け、のぞきこんでひとがいないのを確かめ、みんなを中に入れた。

「座れ」と言いながらソファに腰を下ろすと、照井先生はエミルをじっと見て、こう言った。

「能流登。あれは6年のときだったな」

照井先生はまた腕組みをして目を閉じた。

「ずっとオレはオフクロと二人暮らしだったんだが、能流登に言われた日によ、家に帰って、死んだオフクロの部屋の本棚を見た。そうしたら『薔薇十字団とカバラ』という本があった。薔薇の十字架の本ってのは、このことか。そう思った。取り出してみたら、本のあいだに手紙がはさまってた。封筒に遺書って書いてあったよ。たぶんな、オフクロは自分分は病院でゆっくり死ぬもんだと思ってた。だのに、脳いっ血でポックリいっちまったもんだから、遺書のことを言わずじまいになっちゃった。それでオレのそばにいた能流登に頼んだんじゃねえか。オレはそう思うんだよ」

「先生、遺書になんて書いてあったの？」と高村が聞いた。

「それだよ。能流登にそれをまだ伝えてない」

照井先生は腕組みをほどこいて、こんどはソファの背もたれにからだをあずけ、お腹のうえで両手を組み合わせた。

「今で言うシングルマザーよ、オレのオフクロは。だから父親の思い出は何にも無かった。一度、小学校の頃だ、オレのお父さんはどこにいるのって聞いたんだ。そしてら、オフクロ、烈火の如く怒ってな、こんどそういうことを聞いたら口を引き裂くって言ったんだよ。

それがな、タイガーホースになってさ」

「タイガーホースってなに？」と高村が聞くと弟の勇貴が「トラウマ」とボソツと言った。

「……先生、ここ、ダジャレ言うところ？」

「いやあ、5人の男!!」

勇貴が「ゴメン、だよ」とまたしても解説した。

エミルがうつむいてクツクツと笑い始める。

「悪い。オレな、話がシリアスになるのが苦手でさあ……」

「先生から話し始めたんじゃないかねえか」と高村が口をとがらすと、「そうだな」と先生はお腹のうえで組んだ両手をほどいて、また腕組みに戻った。

「遺書の話だよ……。そうさ、オフクロは父親がだれかをオレに教えてくれたのさ。遺書にさ、『いまおまえが手にしているバラ十字団とカバラという本の翻訳者がおまえの父親です』と書いてあったよ。会いたきゃ会えとも」

「会ったんですか？」と安田が聞いた。

「いや。まだ会ってない。勇気がねえんだ」

「勇気がいるの？」と高村が言った。

「先生って奴にはな、臆病もんが多いんだよ」

照井先生はそれから思いに沈むように腕組みをしたまま目を閉じた。

「先生、話してくれてありがとう」とエミルが沈黙をそっとかきわけるように言った。

「こっちこそな、能流登。ほんとうにありがとうな。もしも勇気が出てきて、親父に会ったら、また話、聞いてくれるか？」

「もちろん。いつでも電話して」

「引っ越さねえな？」

「うん」

「よし」

照井先生は眼鏡を外すと、右手の甲でごしごし目をこすった。

天道さんは水色の欄干の橋のそばに見つけた時間貸しの駐車場にC X 5を入れた。

後ろの座席の大澤さんが嬉しそうにノートパソコンから顔を上げた。

「このすぐそばにゲストハウスがあります。梅田ハウスというところで、ボランティアの人たちの集まる場所という口コミコメントがあります。しかも」と大澤さんはもったいぶって言葉を切った。

「しかも、梅田ハウスと言うだけあって、このロゴが梅の形なんです。ほら」と大澤さんはノートブックを持ち上げ、ルミさんと天道さんにディスプレイが見えるように裏返した。

「やったね」とルミさんの唇の両端が嬉しそうに持ち上がった。

それはセーヌ川のビジョンにあったように、5つの丸を円周上に並べてつくった五角形の梅の花の形をしていた。

「たいしたもんだよ、セーヌ川は」と天道さんは首を振り子のように何度も振った。

それから車内で4人は作戦を練った。

場所は絞られた。あとはそこに実際に鈴木麻里がいるかどうかだ。

どう接触するかが問題だ。母親に頼まれて探しに来たと思われれば、逃げ出されるかもしれない。

こちらの真意をどうしたら伝えることができるか。

「泊まりますか」とカメさんがボソツと言った。

「えっ？」とルミさんが首をかしげた。

「同じゲストハウスに、ぼくらも泊まったらどうかかと」

「なるほど」と天道さんがニヤリとした。

「そうしましょう」とルミさんが言うと、大澤さんがiPhoneから電話を入れ、あっという間に予約を済ませた。

「女性はドミトリーしかとれなくて、ぼくら男性はちょうど3人用のプライベートルームが空いていたのでそちらで」と大澤さんが言うと、「ドミトリーって？」とルミさんが聞いた。

「相部屋です。まさに二段ベッドの世界です」

CX5はゲストハウスに向かった。100メートルもないほどの近さだった。

住宅街の中に建つ、コンクリート打ちっ放しの外壁の、玄関の周囲がアルミの角材で構成されたオシャレな建物で、オンポロ旅館を想像していた4人は驚いた。

玄関のドアを開けて中に入ると左にカウンターがあり、奥にはまるで普通の家庭のリビ

ングルームのようなスペースが見えたが、人の姿はなく、しんとしていた。

「すみませーん」とルミさんが言うと、「はい」という女性の声が4人の背後、建物の外から聞こえ、玄関のドアを開けて30代ぐらいの女性がニコニコしながら入ってきた。

「いらっしやませ」と言うと、カウンターの向こう側に回り込んだ。「自宅がこの隣なもんで」

そう言って女主人らしき女性は宿泊カードを4枚カウンターの上ののせて、ボールペンを1本差し出した。

「さっきお電話をいただいた大澤様ですね？」

「はい」とルミさんが答えて、4人は順番に宿泊カードに記入した。

4人はスリッパにはきかえると、2階へと案内された。

ルミさんが泊まる女性用ドミトリーと、男性陣が泊まるプライベートルームは隣り合わせになっていた。

まずルミさんが女性用ドミトリーの部屋に入り、おかみがルミさんのベッドはここですと教えてくれた。入り口を背にして左右に二つある2段ベッドの右側の下だった。フロアリングの床に白い壁紙のシンブルで清潔な部屋だった。着替えなどが入った紙袋が左側の

二段ベッドの下に置いてあった。もしかして麻里のものだろうか。

次いでおかみは男性陣のプライベートルームに案内した。そちらは畳敷きの部屋で、押し入れから自分たちで蒲団を出して並べ、寝るのだという。

男子3人は荷物を押し入れの横に置くと、畳に大の字になって寝転がり、「フワー」と声を出して大きく伸びをした。狭い車内に閉じ込められていたからだの細胞が、やっと取り戻した自由に大喜びしているようだった。

ルミさんが男性部屋にやって来た。

「さてと」と、天道さんは畳の上に伸ばしていた足をたたんであぐらをかいた。

「我々はイチカバチかここに泊まることにしたわけだ。だから、ここに鈴木麻里がいない場合のことも考えておかなくちゃ」

「となると、現段階ではお手上げですね」とカメさんが言った。「自衛隊駐屯地がある日本中の大都市を全部探さないといけないことになりましたからね」

「確かに。その場合は、セーヌ川の新たなビジョンがない限り、動けないということになるな……」

それからみんなで様々な可能性を話し合うと、ルミさんは男子部屋を出て階下に向かっ

た。

数分後、コンコンと扉をノックして、ルミさんが嬉しそうな表情を浮かべて部屋に入ってきた。

「茶髪の若い女性が2週間前から泊まっているそうよ。被災地でボランティアをしているんだって」

「よし」と天道さんはカメさんと大澤さんと小さくハイタッチした。

「ただし」とルミさんはみんなの顔を見まわした。「若い男と一緒にだそうです」

みんなは驚いて口をポカンと開けた。

「ボーイフレンドのようね、どうやら。部屋は別々だそうだけど」

3人の男はようやく口を閉じると、カメさんがこうつぶやいた。「純愛、ですかね」

「かもな」と天道さんが言い、「せつないっすね……」と大澤さんがぼんやりと言った。

「そういえば、お前ら、用事があってきたんだろ」

照井先生は急に大事なことを思いだしたかのように身を乗り出した。

「実は」とエミルが正直に理由を説明した。

「ふん、ふん」と聞いていた照井先生は、エミルの話が終わるところ言った。

「西条君の家庭の状況については、オレはなんもわからん。で、西条君が亡くなったことについてはだ、警察はその日のうちにほぼ事故と断定していたんだ。目撃者が複数いたからな」

「えっ、一人じゃなかったんですか？」と勇貴が思わず問い返した。

「一人どころか、何人もいたんだ。あの日はクラブ活動があったからな」

照井先生が語るところによれば、西条君が落下した瞬間を目撃した生徒も複数いたという。中には低学年の生徒もいて彼らは心理的ショックを強く受けたため、いまはカウンセリングを受けていて、警察も学校もあえておおやけにはしていないという。

目撃した生徒によれば、教室の窓からプレハブ小屋の屋根に飛び移り、次に東玄関のコンクリート製ひさしに飛び移った直後、西条君はバランスをくずし、うしろにひっくり返るようになつて落ちたのだという。

こういった複数の証言から警察はその日のうちに事故とほぼ断定した。翌週おこなわれた全校アンケートでも西条君がイジメられていたという回答はなく、西条君の保護者からもいじめについての訴えはなかったという。

そういったことから警察は自殺ではなく事故として断定、捜査を打ち切ったのだという。「先生、でもさ、なんで西条君は度胸試ししたんだ？」と高村がきいた。

「職員会議でもそれが何度も蒸し返された。担任の先生は、度胸試しするような生徒ではないと言うし。じゃあ、だれかに度胸試しを強要されたのかというと、そういう情報はまったく出てこない」

「亡くなったときは、教室には西条君以外に誰もいなかったんですか？」とエミルが聞いた。

「そこなんだ。目撃した生徒の中には、教室の中に誰かがいたという者もいれば、誰もいなかったという者もいる。……いずれにしてもだ、代々木西原小学校50有余年の歴史の中で、初めて校内で生徒が亡くなったのだからなあ、我々の失態だ。西条君のご家族には何度詫びても足りん。慚愧に堪えん」

照井先生はもの上で両手をギューツと握った。

「先生」とエミルは一瞬ためらうように下を向いて、それからこうたずねた。

「小学校の歴史の中で初めて校内で生徒が亡くなったって言ったけど、それ本当？ 他に誰がいなかった？」

「おらん。なんでだ？」

「ううん、なんでもない……。先生、帰る」とエミルは立ち上がるとスカートのすそを両手でパツパツと払って形を直した。勇貴と高村と安田も続いて立ち上がると、「先生、元氣出してな」と高村がいい、「先生、また」と安田が言った。

「安田。おまえもたいへんだろうが、歯あ食いしばれ。おまえの母校の教師は全員おまえの味方だからな。応援してるぞ」と照井先生は言う。安田に右手を差し出した。その手を握りかえすと、安田は無言でおじぎをした。

4人は応接室をあとにすると、職員室へと向かう。照井先生に振り向きながら手を振った。照井先生の姿が見えなくなると、「6年2組の教室に行こう」とエミルがいい、東玄関わきの階段を上り始めた。

階段を登ってすぐに6年1組の教室があった。その右隣が6年2組だ。生徒は全員下校した後らしく、物音ひとつしない。

「気味悪くね？」と高村が小声で言った。

エミルは2組の扉のガラス窓から中をのぞき込み、だれもいないと見ると、ガラリと開けて中に入っていた。安田と勇貴が続き、最後に高村がしぶしぶ足を踏み入れた。

西条君がそこから飛んだという左端の窓に近づくと、エミルはスクールバッグを肩にかけたままじっと目を閉じた。一分か三分ほどそのままでいたエミルは、こんどは手近にあってたいすに腰かけるとバッグを床に置き、それから机の上で両手を組み合わせ、また静かに目をつむった。

勇貴と安田と高村はエミルの瞑想の邪魔にならないよう、そっと音を立てずにいったん廊下に出た。

やがてエミルがむずかしい顔つきで廊下に出てきた。

「どうした？」と高村が言うと、「とりあえず、学校の外に出よう」とエミルは言い、階段を下り始めた。

安田、高村の順に階段を下り、勇貴がしんがりだった。

すると突然、踊り場の数段手前で「わーっ」という声を出して勇貴がつんのめった。幸い、前にいた兄の背中にぶつかったので、転がり落ちて床に激突するという災厄は避けら

れたが、兄弟して踊り場に尻餅をつくことになった。

「どうしたんだよ」と兄が立ち上がりながら、まだ座り込んでいる弟に向かって不機嫌に言った。「気をつけろよ」

「だれかに押された」と弟は呆然としてつぶやいた。

「えっ？」と兄が聞き返すと、弟はもう一度「だれかに押された」と言って不安げに立ち上がった。

「だれかって、だれよ？」と聞き返しながら兄は階段の上に視線を移動させた。誰もいない。

「西条君よ」とエミルが階段の下からこちらを見上げて言った。「勇貴のことを突き飛ばしたの」

高村見太郎の背骨がビリビリと震え、急速冷凍されたように顔と胸が冷えてこわばった。

「マジ……っすか？」

「よくあることよ。さ、行こう」とエミルがきびすを返すと、高村見太郎はあわてて一段飛ばしで一階に下り、そのあとから安田が勇貴をかばうようにして並んで階段を下りてきた。

来客用スリッパを元に戻し、靴にはきかえ、校庭に出た。夏至から間もない空はまだ昼のように青く明るかったが、体育館と西校舎が校庭に落とす影はその分暗く濃かった。

南門から外に出ると、来たときは反対に幡ヶ谷方向にエミルを先頭にみんなは無言で歩き出した。代々幡齋場の手前で左に折れ、そのまま道なりに歩くと、右側に大山公園が現れた。

「一休みしようか」とエミルは言つて公園の中にずんずん入っていくと、一番奥の自動販売機の前に立った。「おこる。何飲む?」

「わりい。おれ、ポカリ」と高村が言つと、チャリンガシャリと音がして、それからエミルがポカリスエットを高村に向かって投げて寄こした。

「オレ、おーいお茶」と安田が言つと、勇貴も「おーいお茶、お願いします」と返事した。エミルはガシャガシャと自動販売機を言わせて、両手でペットボトル3本をつかんで戻つてくると、安田と勇貴に1本ずつ手渡してベンチに座った。

高村は立ったままポカリをゴクゴクと飲み、安田と勇貴はエミルと並んで、高いフェンスで囲まれただれもない小さな野球場を前に見ながらベンチに腰かけた。

さっきよりも、空の色は深い黄緑色に近づき、木々の葉叢にはすでに薄墨色の闇がしみ

出していた。

水分を補給して落ち着いた高村はお腹から「ふーっ」と息を吐き出すと、エミルにこう聞いた。

「さっき、西条君が勇貴を突き飛ばしたって、あれ、ほんと？」

「正確に言えば、突き飛ばしたフリ。物質的に突き飛ばしたわけじゃないから」

「フリ……って？」

「勇貴は意外と霊体質なの。だから西条君の密度の濃いエーテル体が勇貴のエーテル体に触れたとき、勇貴はその非物質的接触をまるで物質的接触のように感じた。物質じゃないから突き飛ばせるわけないんだけど、勇貴は突き飛ばされたように感じて、その感覚に肉体が反応してしまった。ということなわけ」

「わからん……」

すると勇貴がペットボトルを両手でいじりながらエミルに聞いた。

「西条君の霊、見えたんですか？」

エミルは答を探すように、空を一度見上げ、それから勇貴のほうに視線を戻した。

「見えた。いろんなところ、走り回ってた。言ってみれば、半覚半睡のような意識状態で、

自分が死んだことも自覚できず、とにかく走り回っていた。西条君には見える人と見えない人がいるの。オレや勇貴みたいなタイプの人間はよく見える。でも、それ以外の人たちのことはうっすらとしか見えてこない。だから、混乱している」

「なんか、わかりましたか？」

「お父さん、お父さんって言ってる。お父さんをしきりに探している。それが意識が地上に向いている大きな理由の一つに思えた。お父さん、お父さん、お父さんはどこにいるの？ って」

勇貴は昼休みに聞いた話を思いだした。

「あのう。吉家君から聞いたんですけど……」

勇貴はLINEでの噂と、自分なりの推理をエミルに話し始めた。

聞き終えるとエミルは「そうだったの……」と地面を見つめて、ため息を一つついた。

「お父さんが鍵だったんだ。もしもお父さんが失踪したというのが本当なら、お父さんを見つけてあげることが、西条君を天国に送り届ける一番の近道かもしれない。……西条君のお母さんに会うしかないかな。どうやって、どんな理由で会えばいいんだろう？」

すると安田が言った。

「理由なんて作る必要ないよ。さっき、言ったじゃねえか。西条君の姉貴とオレらは代々木西原小学校の同窓生だって。勇貴もいっしょに、4人でお線香を上げに行けばいいんだよ」

「そっか」とエミルの顔が少し明るんだ。「でも、住所、知ってる？」

すると高村が弟に「勇貴、走れ！！ 照井先生から聞いてこい！！」と言うと、「先生、まだ、いるよね？」と言いながら勇貴は一目散に大山公園を走り出ていった。

18

勇貴は10分ほどで息を弾ませて戻ってきた。

勇貴が照井先生に教えてもらった西条君の家の住所は代々木5丁目だった。iPhoneで調べると代々木公園の近くで、「やっぱり、引越したんだ」と安田が言った。

時間はまだ午後6時を過ぎたばかりだった。

夕ご飯どきにあたったら迷惑かとも思ったが、どうしても今日中に西条君の母親に会っておきたいとエミルは思った。ここから歩いて15分ほどで着くはずだし。

「行こう」とエミルが言うと、みんなは「うん」とうなずいた。

大山公園を出てから坂を下り、途中で左に折れて、住宅街の中をクネクネと代々木八幡駅に向かって歩く。やがて駅の手前の踏み切りが見えてきた。そこから線路に沿っていく。

「鈴木の家のおぼじゃね？」とキョロキョロ周囲を見まわしながら高村が言った。

実際、教えられた住所の前に立つと、まさしく鈴木の家に向かいにあるアパートだった。

「すごい偶然じゃね？」と高村が言うと、「ま、同じ小学校の学区だからな、近所でも不思議はないとも言えるけどな」と安田が返事をしたが、安田自身も少し驚いた。

深い緑と黄のまだらに染まってきた夏の夕空の下、西条君の家族が住むというアパートは、木造モルタルで、1階と2階に玄関が3つずつあり、2階に行くには鉄製の外階段を登る。住所は2階3号室となっていたので、エミルたちは階段を登って外に面した通路の奥の「3」と書かれたドアの前に立った。表札はない。

エミルが呼び鈴を押す。中でピンポンと鳴っているのが聞こえる。

応答がないのもう一度押そうと思ったそのとき、「はい」と女性の声が出た。

かすかに物音が聞こえ、そして明らかにドアスコップからその女性がこちらをのぞいているのが感じられた。

「代々木西原小学校でシオリさんと同学年だった能流登と申します。西条君と同級生の高村勇貴くんたちと一緒に参りました。お線香をあげさせていただきませんか」

そうエミルがドアに向かって言うと、カチリと鍵を外す音がしてゆっくりドアが開いた。目の前に立っていたのは、まさしく西条君の姉のシオリだった。

エミルほどではないが、ひよろりとして長身で、銀縁の眼鏡のレンズの向こうから賢そうな奥二重の目が怪訝そうにこちらを見つめていた。

帰宅したばかりなのか、夏用の白いセーラー服のままだった。

「おれ、安田。覚えてる？」とエミルの隣から安田が顔を出した。

「なんとなく」とドアに手をかけたままシオリは恥ずかしそうに答えると、「小学校の時の通学路、一緒でしたよね」と続けた。

「高村勇貴です。西条君と同じ6年生で、3年と4年の時、同じクラスでした」と勇貴がおじぎをすると、その横で高村が「こいつの兄貴です。オレも、あの、キミと、小学校、同じでした」と言うと、シオリは「覚えてます」とまた恥ずかしそうにうつむいた。

「お線香、あげさせてもらっても？」とエミルが改めて言うと、「どうぞ」とシオリはドアをさらに押し開けた。

「母は外出中で、わたししかいないんですけど」

そう言いながらシオリは、奥の居間へとみんなを案内した。

外から想像するよりは広めの2LDKのアパートで、居間のベランダ側の隅に置かれた大きな液晶テレビの隣に、小さなちゃぶ台に白布をかぶせてしつらえた急ごしらえの祭壇があった。そこには白い布に包まれたままの円筒形の骨壺と位牌があり、ロウソク立てや香炉などの仏具は真新しくつやつやしていた。

エミルは祭壇の前に正坐すると、線香に火を着けて香炉に立て、そして両手を合わせた。目を閉じると、西条君の気配を感じたが、あえてそちらに意識を向けないようにした。

続いて安田が、勇貴が、見太郎がお線香をあげた。

無言で見ていたシオリが、「こっちのテーブルに座ってください」と居間とキッチンの間のダイニングテーブルを手で指し示した。

ぞろぞろとテーブルを囲んでイスに座ると、シオリが食器棚からグラスを取り出してみんなの前に置き、それからキッチンの冷蔵庫から冷えた麦茶が入った冷水筒を持ってきて、

グラスに注いでいった。粘着テープで閉じられたままの引っ越し会社の段ボール箱が数個、部屋の隅に積まれていて、引っ越しが突然だったことを物語っていた。

「どう言えばいいのかわからないんですけど」とエミルは冷水筒を冷蔵庫に戻しているシオリを目で追いかけた。「元氣を出してくださいというのもおかしいのですが、悲しみが早く癒えますように……」

そう言ってエミルは目を伏せた。高村たちは言葉が見つからず、ただ顔を見合わせた。「来てくれてありがとう」とシオリはどこかから折りたたみイスを持ってくるとテーブルの一番端でそれを広げ、ちょうどエミルと向かい合うように座った。

「弟は友だちが少なかったから。クラス代表の子が先生に連れられて一度来たきりで、あとは誰も」

シオリはそう言って下を向いた。「弟、喜んでいいます」

エミルは正直に話そうと心に決めた。

「わたし、死んだ人が見えるんです。小学校の時、噂になってたと思います」

シオリはびっくりしたようにエミルを見つめると、「はい」とうなずいた。「高村さんのお父さんがそれで命拾いしたという話、わたしも聞きました」

「弟さんのことも、見えるんです」

「いまもですか？」

「はい」

「どこにいますか？」

「さっき玄関から入ってきて、いまはテレビの前に座っています」

全員が視線をテレビのほうに向けた。

「ただわかってほしいのは、生きている人間と違って、そこに物理的にいるわけじゃないんです。みんなは幽霊などと言いますが、そういう透明人間みたいなものではないんです。肉体という服を脱ぎ捨て、エーテル体というもう一つのからだで四次元的に存在しているんです。だから、ここにいなながらも、西条君は同時に代々木西原小学校にもいまもいるかもしれない。わかりにくいと思いますが」

エミルはリリーから教えてもらった四次元的な存在のしかたについて説明しようかと思っただが、やめた。それにはあまりに時間がかかる。

「人は死んだあと、エーテル体というもう一つのからだも宇宙に返さないといけないんです。肉体も地球からの借り物だとしたら、エーテル体も借り物なんです。でも、弟さんは

まだ自分が死んだことが信じられないでいます。まだ地上的な意識の中で、もがいて、苦しんでいます。オレは……わたしは、弟さんの苦しみを取り除いてあげたいんです。そうすれば、弟さんは魂の故郷に戻ることが出来ます」

「魂の故郷って？」

「天国とか、浄土とか、いろんなふうに言いますが、文字通りふるさとです。わたしたちはそこから地上に降りてきて、人間になるんです。いろんな経験をするために、ふるさとの記憶を失って、日食の日に、集団で地球にやって来るんです」

「弟は苦しんでいるんですか？」

「お父さんを探しています」

「お父さんのこと、探してるんですか？」

「お父さん、お父さん、お父さん……そう叫びながら」

最初は左の目から、そして右の目から、シオリは大きな涙の粒をこぼした。そしてスカートのポケットから取り出したハンカチをシオリは鼻と口にあてると、体を震わせて泣いた。声を出さずに、肩を上下に揺すり、息を詰まらせながら、泣いた。

高村兄弟は二人とも下を向き、兄のほうはもらい泣きをしていた。安田は腕組みをして

天井をじっと見上げ、エミルはテーブルごしに手を伸ばしてシオリの二の腕にそっと触れた。

シオリが落ち着くのを待って、エミルは言った。

「お父さんのこと、教えてくれませんか？」

そのとき玄関から「ただいま」という女性の小さな声が出た。西条君の母親だとみんなは思った。グレーのスカートにノースリーブのシャツを着た中年の大柄の女性が、両手にスーパーの袋を提げて居間に入ってくると、驚いたような表情を浮かべた。それから泣いているシオリを見つけて「どうしたの？」と言った。

シオリが答えずに泣き続けるのを見て、西条君の母はエミルたちを見まわしながら、「シオリの友だち？」ときいた。

「中学の同窓生です」とエミルが答えた。「西条君にお線香をあげたいと思って」

母はそれに礼を言うでもなく、逆に警戒するような表情を浮かべた。

「娘は何を言ったの？」と母は詰問するように言った。

エミルはとまどった。「いえ、なんにも」とエミルは答えた。

そのとき、シオリがしゃくり上げながら、言った。

「イオリを助けたいって言ってくれたの」

「イオリを？」

「それから、お父さんのことも」

その言葉は西条君の母親のせき止められたダム湖のような感情のどこを刺激したのだろうか。強い口調でこう言った。

「帰りなさい。さあ、帰って」

あわててシオリがこう抗議した。「違うの、お母さん」

「あなたは黙ってる」と母親は命じるように言うと、エミルたちに再度通告した。

「帰りなさい」

有無を言わせない言葉の威力に、エミルたちは顔を見合わせると立ち上がり、「おじゃまいたしました」と玄関に向かった。靴をはくのももどかしく、4人はアパートの外に出た。勇貴がドアを閉めながら、もう一度、「おじゃましました」と言って頭を下げたが、母親の大きな後ろ姿からの返事はなかった。

鉄の階段を下りて通りに出た4人は、誰ともなくフーッと大きな息をした。

午後7時に近い夏の夕空は、海底から見上げる海面のようにゆらゆらとした濃いブルー

に変わっていた。

エミルはなんとなくうしろの鈴木の家を視線に向けた。電気もついておらず、まるでうち捨てられだれも住んでいない廃屋のように、鈴木の家は冷たい海の底のような闇に浸されていった。

19

午後7時からの夕食に間に合わせたかのように、鈴木麻里は梅田ハウスに帰ってきた。

写真の中の麻里と同じ、茶髪の長い髪をうしろで結わえ、澄んだ瞳をした快活そうで小柄な女性が、夕食の大テーブルでルミさんたちの前にいた。そしてその麻里の隣では同い年ぐらいの男子がまるで兄のように麻里に皿をとってあげたり、はしをとってあげたりしていた。

両頬にいくつもニキビ跡が並んだその男子が、額にかかった少し長めの髪の毛を両手でかきあげると、聡明そうな広い額と、日本人ばなれした濃い眉と長いまつげの大きな目が

現れた。その目は何かに充足していることの喜びに輝き、そしてその喜びを麻里もまた共有するかのように、麻里はしきりにその男子を見つめては、何かおかしいことがあるわけでもないのにしきりに笑みをこぼしていた。

二人ともTシャツとジーンズのラフないでたちで、その日焼けしてたくましい印象は、高校生よりもっと大人びて見えた。

目が合ったルミさんに「こんばんは。はじめまして」とちょっとだけハスキーな声で、麻里があいさつをした。

隣に座る男子が、「みなさん一緒のグループですか？」とルミさんたちを見まわして聞いた。とつとつして誠実そうな声だった。

「はい」とルミさんが答えると、天道さんが「うちら、被災地のお役に立てることがないかなあとやって来たんですよ。ここに来ればボランティア活動をしている人が泊まっていると聞きましたんで、いろいろ教えてもらえたらいいなと思ひましてな」と快活な口調で言った。

麻里は面白そうに男子と顔を見合わせると、こう聞いた。

「何か、特技など、お持ちなんですか？」

天道さんが、待ってましたとばかりに満面に笑みを湛えて言った。「わたしら、手品師に占い師なんです」

麻里たちはまたしても面白そうに顔を見合わせた。

「召し上がってください」と、料理を配膳し終えたおかみが笑顔で言う、全員が「いただきます」と食事を始めた。

途中で、1週間ほど前から男性ドミトリーに宿泊しているという3人の若い男たちも加わり、食卓はますますにぎやかになった。

麻里は隣の男子をジルと呼び、そのジルは麻里のことを単に麻里ちゃんと呼んだ。おそらくジルはその顔立ちからヨーロッパ系のハーフかクォーターなのだろうと天道さんたちは思った。

そのジルが語るには、彼は幼いころから絵の手ほどきを受けていて、この若さですでに有名な公募展に連続受賞していた。この話を聞いてルミさんは「わあ、天才なんだ」と手を叩いた。

二人は民間のボランティア団体のスケジュールに従って、福島北部から宮城、岩手の沿岸のいろんなところに出かけては、力仕事を手伝ったり、あるいは麻里はお菓子作りを、

ジルは水彩画を教えたりしているのだという。

「明日、お二人の活動を見学させてもらってもいい？」とルミさんが聞くと、二人そろって「どうぞ」と答えた。

二人はいっしょに活動をしているボランティア団体を紹介してあげると言う。

食事が終わると、おかみがテーブルの後片づけを始めた。すると、突然思い出したようにおかみが麻里にこう言った。

「そういえば、きょうの晩がだね、鈴木麻里という人はそちらに泊まっていますかかっていう電話があったの。反射的に『はい、泊まってらっしゃいます』と答えたらブツンと切れたのよね。まずかったべか？」

麻里の表情がみるみる変わった。視線はあちこちをあてどなく移動し、一種のパニック状態になったのが見て取れた。同様にジルの表情も曇り、思いつめるような目の色で麻里を見た。

ルミさんは天道さんの顔をうかがった。天道さんは「作戦変更」と声に出さずに唇の形で伝えた。

ルミさんは立ち上がると笑顔で「同じ部屋なんだけど、ちょっと教えてほしいことがあ

るの」と麻里に言った。「いますぐですか?」と麻里は眉根を寄せた。「ゴメン、すぐすむから」とルミさんが言うと、「すぐ戻る」とジルに言って立ち上がった。まるでこわれた操り人形のように、麻里はルミさんに続いて2階へと消えていった。ジルはうつむいた。いまからルミさんはドミトリー部屋で麻里に自分たちの正体を明かし、目的を説明し、説得を始めるだろう、うまくいってくれ。そう念じつつ、天道さんは目を閉じた。

5分ほどして2階から麻里とルミさんが下りてきた。麻里の顔は堅くこわばっている。天道さんが麻里に「大丈夫?」と聞いた。

麻里は「大丈夫です」とうなずくと、それからジルと目を合わせ、ジルの耳に口を寄せ、てひそひそと何ごとかを伝えた。ジルの視線が、何度も天道さんたちの上を通過した。

やがて、それぞれがそれぞれの部屋に戻っていった。ジルはドミトリーに戻らず、天道さんたちと一緒に和室に来た。

数分ほどして、部屋着に着替えたルミさんが、同じようにTシャツに七分丈のルームパ
ンツに着替えた麻里を伴ってやって来た。

すでにジルも天道さんから事情を簡単に説明されていた。

狭い和室に、6人は窮屈そうに体育座りをした。

天道さんがまず口を切った。

「麻里さん、驚いたかい？」

麻里は無言でうなずいた。

「わたしらの目的は麻里さんを連れ戻すことじゃない。わたしらは、教団からあなたと、あなたのお母さんを守ることなんだ。それがひいては一輝君のためになり、鈴木家のためになる、そう信じている」

麻里は黙ったままうなずいた。

「うちがボランティアをしてるって、教団はどうしてわかったんですか？」と麻里が聞いた。

「岡本佐智枝というおばさん、知っているでしょ？」

「ああ、あの人、うちんちにも何度か来てました」

「その岡本さんがね、先週の土曜日に教団のボランティアで南相馬市に行ったときに、どうもあなたを偶然見つけたようなんだ」

「土曜日ですよ……」

するとジルがかわりにこう答えた。「仮設住宅の集会場で午前中、教室をして、午後は

海岸清掃を手伝ったんじゃないっけ？」

「そっか」

「岡本というお婆さんも海岸清掃をしていて、そこで麻里さんを見つけた。あなたの家出のを知っていた岡本さんはその偶然に驚き、同時にしめしめと思った。麻里さんに見つからないように、だれかにあとをつけさせた。その日は、福島経由で帰りませんでしたか？」

そう天道さんが聞くとジルが答えた。

「原発事故の影響で、福島まで来て、そこからバスに乗るしか南相馬市に行く方法は無いんです。だから、帰りもバスでいったん福島まで行って、福島から東北本線で仙台に戻りました」

「たぶん、教団の連中は福島行きバスに乗りこむまでは見ていた。だから、福島に麻里さんがいるはずと彼らは考えた。実は、わたしら、きょうのお昼前に福島のボランティアセンターに行ったんですが、わたしらの前に中年の男二人がやって来て、鈴木麻里という人はこちらでボランティアしていないかと聞いたそうです」

麻里がからだをブルツと震わせた。

「おそらく、教団関係者はこの近所で明日、麻里さんが出かけていくのを待ち伏せするはずです。そして強引にクルマに乗せて、東京に連れ帰る。きっとそういう計画だとわたしは考えています」

「うち、どうすればいいですか？」と麻里は体を固くすぼめた。

「していただきたいことが二つあります」

天道さんはそう言って手をじゃんけんのチョキの形にした。

「一つは、わたしが最初に麻里さんを見つけ、ここで安全にしているということをお母さんにいま電話してほしいんです。教団より早くわたしが見つけたという事実をまずお母さんに、そして教団に突きつける」

「はい」

「二つ目は、明日は、わたしらのクルマで移動してください。明日一日、教団の手から逃れられれば、教団はあきらめるはずですよ」

そう言って天道さんは麻里の目を見据え、「いいですか？」と念を押した。

「はい」と麻里が言う、「よし、まずはお母さんに電話です」と天道さんは体育座りをやめて正坐した。

ルミさんが麻里に iPhone を差し出した。

麻里は数字ボタンをタップして、それから iPhone を耳に当てた。最初はうつむいて呼び出し音を聞いていたが、やがて不審げに顔を上げた。

ルミさんが「出ないの？」と聞くと、麻里は iPhone を耳に当てたままうなずいた。「自宅に電話したんですけど、誰も出ないし、留守電にもなってない」

「お母さんの携帯電話は？」

「うち、番号、知らないんです」

「お父さんの携帯の番号は？」と天道さんが聞くと、麻里は首を横に振った。

天道さんは腕組みをしながら左手の腕時計を見た。九時半を少し回っていた。

「しかたない。深夜までにはお父さんかお母さんか、どちらかがお帰りになるだろう。つかまるまで電話しましょう」

麻里はうなずくと、何かを聞いたそうに口を開きかけたが、言葉を呑み込んで目を伏せた。ルミさんが「なんか聞きたいことが？」と麻里に聞くと、「一輝のことなんです」と体育座りのひざの上にあごをのせてルミさんを見つめた。

ルミさんがジルに顔を向けると、麻里が言った。

「ジルは大丈夫です。一輝のことも全部話したし」

ジルがうなずいた。

「母から、一輝の様子、聞きましたか？」

「あまり詳しくは。元気そうだということと、少年院はイジメが多いらしいんだけど、一輝君はそういう目にはあってないって」

「よかった」

「一輝君は自首しているしね、成績が良ければ、あと2、3カ月でシュツインできるそう

よ」

「シュツインって言うんですか」

「そう、出る院って書いてね」

「一輝がいる少年院ってどこにあるんですか？」

「お母さんたちから聞かなかった？」

「はこ」

「小田原ですって」

「一輝は中学に戻るんでしょうか？」

「義務教育だからね」と天道さんが答えた。「少年院の中にも学校があつてね、みんな、そこで普通の中学生と同じように勉強するんだよ。一輝君、勉強好きになって戻ってきたりしてね」

麻里がおかしそうにほほ笑んだ。

大澤さんが口を開いた。

「あのね、少年院というのは刑務所じゃないからね、前科は残らないんです。もしも出院が遅れても、少年院の中で中学卒業できるし。しかもその卒業証書は普通の中学校の名前でもらえるから、少年院に入ったという形跡は完全に消えるんです」

「詳しいですね」と麻里が言うと、大澤さんは「ぼく、実は、少年院で中学を卒業したから」とつとめて明るく答えた。それはルミさんたちもすでに知っていることのように、みんなは別段特別の表情を浮かべることもなかった。

天道さんが言った。「だから、本当に、まっさらからのスタート、まさにリセットができるんだよ。高校受験をして、高校に入って、新しい鈴木一輝になる」

「よかった」と麻里は言って両目を両手でゴシゴシこすった。左隣のジルが右腕で肩を抱き寄せるようにすると、麻里の涙は大粒にかわった。

麻里が少し落ち着いたところで、カメさんがこう聞いた。

「そもそも、どうして家出したの？」

麻里は体育座りの両足に回した腕にギュッと力を入れると、考えをまとめようとするように「うーん」とうなり、そしてジルの顔を見つめた。

そのときだった。

階下に「こんばんは！！ ごめんください！！」という男の声が響いた。

全員が顔を見合わせた。天道さんが「しー」と唇に人さし指を当て、やおら立ち上がると、部屋のドアを少しだけ開けて聞き耳を立てた。

おかみが応対する声が続いて、「鈴木麻里さんはいますか？」と男が言うのを全員がはっきりと聞いた。

不審に思ったのだろう、おかみは答える前に「どちら様ですか？」と男に尋ねた。

ガタガタと物音がして、別の声が聞こえてきた。

「鈴木麻里の母です」

麻里が口を一文字にした。ほぼが見る間に赤く染まり、涙が残る瞳が空虚な一点を一心に見つめた。それは怒りのせいだと、だれもがすぐにわかった。

ルミさんが立ち上がると、麻里にここにいるようにと両手で示し、天道さんに目くばせをして部屋を出た。

ルミさんは階段を下りていった。階段はリビングルームに通じているので、カウンターをはさんで向き合うおかみと鈴木君のお母さんらの一団とをちょうど真横から見ると、形になった。

「鈴木さん」

ルミさんのその声に全員が一斉にこちらを向いた。

「小山さん！」

鈴木君のお母さんは叫ぶようにそう言うと、まるで亡霊でも見たかのようにからだを硬直させ、口をあんぐりと開けて立ちすくんだ。

男たちは何が起きているのか、事態をまったく飲み込めていない。

ルミさんが言った。「麻里さんは、わたしたちが先に見つけ出しました。2階にわたしの仲間と一緒にいます。ただ、麻里さんはいまはお会いにならないと思います。明朝、お一人でいらしてください。わたしたちが責任をもって麻里さんを守りますから」

鈴木のお母さんはまだ混乱したままで、ポカンと口を開けている。

「鈴木さん」とルミさんがもう一度言うど、鈴木君のお母さんはようやく口を閉じ、彼女を取り巻く男たちをゆっくりと振り向いた。

黒いスーツを着て髪の毛を七三にぴっちり分けた中年の男がまるでコピー・ペイストしたように3人いて、そのうしろにはジーンズにダンガリーシャツというラフなかつこうの若者がいた。彼は肩からトートバッグとカメラを下げていた。ルミさんは、この若者が週刊ブレードの記者に違いないと思った。

するとその一団をかきわけるようにして、長い白髪をうしろで結わえた男が進み出てきた。髪は真っ白だが、その日に焼けてつやつやした肌やガツシリとしたからだから、年齢は50代半ばではないかとルミさんは推測した。仕立ての良さそうな生成りの麻のスーツを身につけ、糊のきいた白いシャツは大きめの襟のクールビズタイプで、ネクタイはしていない。スーツの袖口から青いカフスボタンがキラキラとのぞいた。ルミさんはこの男こそ

があの教祖に違いないと確信した。芝居を劇的にするために、わざわざやって来たのか。

「あんたは誰かね？」とその白髪の男が言った。よく通る声だった。

「人に名前を聞くときは、まず自分から名のるものではないですか」とルミさんもよく通る澄んだ声で言い返した。

「失礼した。緒形大三郎というものだ。鈴木さんの友人だ。困っているというのでお手伝いしている。で、あんたは誰だ？」

「小山と申します。鈴木さんから依頼されて、麻里さんを探していました」

緒形は眉根を寄せて鈴木君のお母さんを見ると、「聞いとらんぞ」と不快そうに言った。

鈴木君のお母さんは無言でうなだれた。

「どうやって見つけた」と緒形はルミさんに向き直ると言った。

ルミさんはニコリと笑うと、「あなたとは違う方法で」と答えた。

「だからどんな方法だ」

「超自然的な方法。つまり、あなた方がとった、尾行したり、いろんな宿に電話をかけまくったりといった物質的な方法とは違う、非物質的な方法でということですよ」

「なにを馬鹿なことを」と緒形は苛立ちを隠さずに言った。「あんたはわたしが何者か、

知らんのか」

「存じております。ムーンチャイルド教団の教祖様で、1000円のミネラルウォーターを1000円で売っている人です」

ルミさんの耳に2階でだれかが笑ったのが聞こえてきた。それは緒形の耳にも届いたらしく、「誰だ、笑ったのは」と緒形は大声を上げた。

「わたしはゲツカイに入り、大天使から麻里さんの居場所を聞いたのだ。そうだったか、大天使が用心せいと申しておられた試練の茨とはおまえのことか」

そう言うと、緒形は背後に立っている鈴木君のお母さんに向かって、「だまされちゃいかん、だまされちゃいかん」と教祖の威厳を演じつつゆっくりと語り出した。

「あの女は大天使が警告された試練の茨だ。リリスの化身だ。我らを迷妄のゲツカイに引きずり込もうという魂胆を持っているリリスの化身なのだ。リリスの歌声に耳を貸してはいかん。リリスの歌声は天使の魂をも眠りこませる。試練だ、試練だ。この試練を乗り越えてこそ、麻里さんは幸せになれる。もうひとふんばりだよ」

緒形が鈴木のお母さんに話し続けているあいだ、ルミさんは目を閉じ呼吸を整えた。そして、ある言葉を緒形の胸に送った。

緒形は鈴木君のお母さんに語り続けるのを突然やめると、ルミさんをゆっくりと振り向いた。

「なににい？ わたしが詐欺師だとお？ もういっぺん言ってみなさい、ただではおかん」
ルミさんはニッコリとして、男たちを見まわすと、こう言った

「みなさん、いま、だれか、緒形さんに『詐欺師』と言いましたか？」

男たちは返答に窮し、沈黙した。

緒形が言った。「あんたが言ったじゃないか、詐欺師と」

「週刊誌の記者さん、わたし、『詐欺師』と言いましたか？」とルミさんが言うと、「いや」と若い記者はぼつりと答えた。

ルミさんはまた目を閉じ、呼吸を整えた。そして、こんどは「あなたに超自然的な能力はない」という言葉を緒形に送った。

緒形は驚いたように胸を両手で押さえた。

「なにをぬかす」と緒形は言い、日に焼けた顔が紫色に変わった。

ルミさんが言った。「あなたに超自然的な能力はない、そう聞こえましたか。でも、それはわたしが声に出して言ったものではありません。超自然的方法で伝えたものです。」

緒形さん、力が無いのに、さもあるようなふりをし、善良な方々をあざむいてはなりません」

「なんのことか、さっぱりわからん」

冷静さをなくした緒形はそうはき出すのが精一杯だった。

そのとき、2階から下りてくる天道さんがルミさんの視界に入った。天道さんはルミさんに近づくと、何ごとかを耳打ちした。

それから天道さんは、「さて、緒形さん」と笑みを浮かべて言った。「そろそろお帰りになられた方がよいのでは。週刊誌の記者さんの前でこれ以上の醜態をさらすわけにもいきません」

緒形は紫色の顔をしたまま「誰だ、貴様は」と天道さんに言った。

「天の道と書いてテンドウ。しがない手相見でございます。もしよろしければ、緒形さん、あなたの手相を観てさしあげましょうか。何か、お悩み事がありそうですね」

そう言って緒形の顔をあからさまにじろじろ見まわすと天道さんは言った。「うん？ お悩みごとは税金がらみか？ わたし、面相占いもいたしますので」

緒形は「ふざけるな。このままではすまんぞ。ムーンチャイルド教団の力をあなどるな」

と天道さんをにらみつけた。

その間、ルミさんはまた目を閉じ、呼吸を整え、何ごとかに一心に集中していた。

緒形は自らを落ち着かせるようにスーツの裾や袖を手で引っぱって整えると、こう言った。

「きょうのところは引き下がろう。だが、この緒形大三郎への侮辱は高くつくということ
を忘れるな。ゲツカイの天使たちに率いられたゲツカイの魔物たちの報いが必ずやある
だろう。鈴木さんも、だまされちゃいかん。麻里さんをこいつらから救わねば」

緒形はそう言って、男たちに出口をアゴで指し示した。

「さ、鈴木さん、行きましょう。また、明日、出直した」

ところが鈴木君のお母さんはその言葉に激しくかぶりを振った。

「どうした、鈴木さん」と緒形はまた苛立ちをあらわにした。

鈴木君のお母さんは、その場にしゃがみ込んだ。

「おい」と緒形は黒いスーツの男たちに声をかけると、しゃくったアゴで鈴木君のお母さん
を示した。

男たちはしゃがみ込んでいる鈴木君のお母さんを両脇から抱きかかえ、引っ張り起こそ

うとしたが、鈴木君のお母さんはまた激しくかぶりを振り、立ち上がるまいと抵抗した。

「ここにいたいんじゃないですか」と記者が言った。「無理やり連れて行くのはどうかな」

緒形は記者の顔を一瞥するときびすを返し、無言のまま大またで玄関を出て行った。男たちと記者がそのあとを追うと、玄関のたたきには、黒い石のようになってしゃがみ込む鈴木君のお母さんだけが残った。

カウンターの向こう側でじっとしていたおかみが、「はーっ」と大きく息を吐き出した。「どうなるかと思った」とつぶやくように言うと、天道さんが、「すみませんでした。ワケは明日、ご説明します」と頭を下げた。

ルミさんがおかみに「女子のドミトリ、ベッドが空いていますよね。この方がそこに泊まってもいいですか」とたずねた。

「ええ、どうぞ。鈴木麻里さんのお母さんなんですよ？　どんなご事情かわかりませんが、もしよければ、1階の和室も今夜は空いているので、使ってもいいですよ」

「ありがとうございます」とルミさんと天道さんが一緒に頭を下げた。

「おかあさん、上に行きましょう」と天道さんが言うと、鈴木君のお母さんはふらふらと立ち上がり、少しかすれた声でルミさんにこう聞いた。

「麻里が会いたいと言っていると、さっき、わたしの胸の中で言葉が聞こえました。小山さんが言ったんですか、そのう、超自然の、あれで？」

「はい、あれで」とルミさんはニッコリほほ笑んだ。

21

ルミさんからエミルに長い長い電話があったのは、夜の11時を過ぎたところで、アンジェリーナがちょうど部屋に来ていた。

「麻里さんは、いま、わたしたちと一緒に」というルミさんのはずんだ第一声を聞いたエミルは、その言葉をそのままアンジェリーナに伝え、二人は満面の笑みを浮かべ、力いっぱいハイタッチをした。

ルミさんは、それから、麻里がジルというボーイフレンドと一緒にいたこと。驚いたことに、緒形大三郎が鈴木君のお母さんを連れて新幹線で東京から突然やって来たこと。ルミさんと天道さんが緒形を退散させたこと。そして麻里とお母さんが一緒に部屋で今夜は

話をしながら寝ることにしたこと。それらを話した後に、こんなことを伝えて寄りこしたのだ。

それは、麻里は西条君の父親のクルマに乗って家出したということだった。

詳しいことは明日改めて聞いて連絡するとルミさんは断った後に、現状ではこんな話をしていると教えてくれたのは、次のようなことだった。

鈴木のお母さんと西条君のお母さんは息子同士が小学校で同級生で、しかも一度PTAで仕事をいっしょにしたことがあるので顔見知りだった。その西条家が突然、自分たちの家の真ん前のアパートに引っ越してきたのを知って、鈴木君のお母さんはビックリし、西条君のお母さんから事情を聞いた。すると、西条君のお父さんが失踪したので、西原にある社宅にはいられなくなり、急きよ近所に引っ越したのだという。麻里はそういったいきさつを父と母の会話を通じてなんとなく知った。

麻里の部屋は2階にあり、西条家の越してきたアパートがよく見える。それに、渋谷のカフェでのバイトのシフトは夜が多いので、家に帰る時間も夜遅いことも頻繁だった。そんな麻里は、西条家が越してきたその日から近所をうろつくスーツ姿の不審な男にたびたび気づいていた。やがて、その不審な人影を見かけなくなったと思うようになったある

夜のこと、バイトの帰りにひとりの中年男性に自宅前で遭遇した。近くで見ると銀縁の眼鏡をかけてポロシャツを着たまじめそうな男性だったという。麻里は勇気をふるって何をしているのかと聞いてみた。自宅の真ん前だから、何かあれば大声を出せば大丈夫だと思っただのだ。そうしたら意外にも、逆にこんなことを聞かれた。西条という家族がこのへんに引越したと聞いたのだけどのアパートか知らないかと。麻里があなたはだれかと聞くと、言いにくそうに、西条家の親戚だと言ったのだが、麻里は失踪したという父親ではないかと直感し、このアパートの2階の3号室ですと教えてあげたのだという。

それから数日後の深夜、カフェのバイトからの帰り道、麻里はその西条君の父親とおぼしき男性が家の近所の児童公園の横に止めたクルマの運転席にいるのを見かけた。よく見れば、肩をふるわせ、泣いているようでもあった。自分でもなぜかわからなかったが麻里はそのクルマに近づき、助手席側のウィンドウをコツコツとノックした。顔をあげた男性に「こんばんは」とあいさつをした。男性は麻里のことを覚えていたらしく、腕を伸ばして助手席のウィンドウを開けると、ああ、このあいだのと、鼻をすすりながら言った。大丈夫ですかと麻里が聞くと、大丈夫ですと答える。すると麻里は自分でも思いがけないことだが、こう言ってしまったのだ。「どうして家に帰らないんですか？ 息子さんも娘さ

んも、悲しそうですよ」と。すると男性はこう答えた。「自分にはもう生きていくすべがない」と。

西条君の父親とおぼしき男性は、クルマのエンジンをかけた。麻里はとっさに助手席の開いていた窓から車内からだをねじ入れた。男性は驚いて、エンジンを止めた。このままだと西条君の父親は自殺をするのではないかと思ったのだと麻里は言った。

それから二人の奇妙なドライブが始まった。

「そこから先は麻里さんから明日聞いて、また連絡するわ」とルミさんは言った。

まったく無関係だと思っていた二つの出来事が、思いがけないところでクロスしていたことを知り、エミルもアンジェリーナも驚いた。

「イツァ・スモール・ワールドってことか」と言いながらアンジェリーナがエミルのベッドの上であぐらをかいた。

「そういえば、高村が例の呪いの動画を送ってくれたんだけど、見る？」

「うん」とアンジェリーナはベッドから下りるとエミルの横に立った。

「オレも初めて見るんだけど」と言いながらエミルは動画のアイコンをダブルクリックした。

動画はうす暗い森の中の映像から始まり、小さな墓地、そして中年の男性の写真、最後に男性の顔の部分だけ黒く塗りつぶされた家族写真で終わった。

QuickTimeプレーヤーの表示を見ると、わずか33秒の短い動画だった。

「写真の家族が西条君の家族だとしたら、西条君が作ったものに間違いないわね。呪いと言うより、父親の失踪への抗議ということになるかしら」とアンジェリーナが言った。

「問題は、誰に対しての抗議かってことだね」とエミルはファイルを閉じた。

「西条君のお父さんがどうして失踪したのか。その理由がわかれば、誰への抗議かもわかるんじゃないかしら」

「西条君のお母さんが無理なら、シオリさんのほうに当たってみる」

アンジェリーナはうなずくとまたベッドに腰かけた。

するとエミルが思い出したように、こんな話を始めた。

「そうそう、きょうね、わが母校へ行っただでしょ。そこに西条くんとは違う子どもがいたの」

「それ、エーテル体がってこと？」

「うん。西条君ほど濃くはなかったけど、はっきりと見えた。オレが生徒だったときには

一度も見たことがなかったから、最近亡くなった子かなくて思ったんだけど、先生は校舎内で亡くなった生徒はこれまで西条君しかいないって」

「ということは、代々木西原小学校の生徒ではないけど、近所に住んでいた子どもってことかしら」

「かも。ちょうど西条君と同じくらいの男子だった」

「そうお」とアンジェリーナが両腕をつきあげながらした返事はあくびになった。「さ、また明日。おやすみ」

アンジェリーナが部屋を出て行くと、エミルはベッドの上に大の字になって目を閉じた。夕方に見た西条君ともう一人の男子の姿がビデオのようにまぶたの裏で再生された。もう一人の男子は走っている西条君をはっきりと目で追いかけていた。まるで西条君のことを昔から知っているかのように。

きょうは救出はないなと智也は思った。救出の夢はいつもうたた寝をしているときか、早朝だけだから。きょうのうたた寝は、学校から帰ってすぐ、夕ご飯前にしてしまった。だから、もう12時近くになるというのに、今夜はまだ眠くはない。

夕方のうたた寝のとき、智也は初めての経験をした。それは救出のために乗船する宇宙船と同じほどりアルに、現実の世界を夢に見たことだ。まるで、自分が幽体離脱してその場に行ったかのような、不思議で真に迫った夢だった。

気づいたら智也は学校にいたのだった。

正確に言えば、智也は飛んだのだ。自分の部屋のジュウタンの上に寝転がって、うたた寝していると、左腕の先から不思議なしびれが始まり、それが全身にまわったかと思った瞬間、何か巨大な手にさらわれたかのように智也のからだはふっと宙に持ち上げられた。気づくと、何も見えはしないけれど、どこか広い空間に立っているのがわかった。腕を伸ばしても、手は宙を切り、指は何にも当たらない。ただ、どこかに立っていることだけは確かだった。自分は確かにここにいると立っているというはつきりとした意識があった。ところが、目を開けているという自覚があるにもかかわらず、真っ暗で何も見えないのだ。

もしかしたら自分は目を開けていないのではないかと思った智也は、両手の親指と人さし指でまぶたの上下を押し広げた。目は開いている。眼球は外にさらされている。でも、何も見えない。真っ暗闇だ。自分は盲目になってしまったのか。そんな恐怖に背中が震えた。

智也は思わずしゃがみ込んだ。そして、考えた。何が起きたのか。

結論は一つしかなかった。夢の中だ。これは夢の中だ。夢が覚めれば、目は見え、すべては元に戻るはずだ。

そう思ったときだ。視界がゆっくりと明るくなってきた。まるで、真夜中から朝になるまでを早回しの映像で見ているように、闇は灰色の深い霧のような空間へと変わり、その霧がまたたく間に晴れ上がるようにして、視界の中に学校が浮かび上がってきたのだ。

智也は校庭のトラックの横の人工芝の上に立っていた。

不思議なのは、その学校や周囲の風景が実際のそれと微妙に違うことだった。

まず校門の鉄の扉の色が違う。クリーム色のペンキで塗られているはずの鉄はブルーだった。そして、校門から校庭に向かい、塀に沿って一列に並んでいるはずの、朝顔が植えられた緑のプラスチックのプランターが消え失せていて一つも無いのだ。

校庭のトラックも何かがおかしかった。何が違うのだろうか、よくよく見てみると、きれいな楕円形になっていなくてはいけないのに、卵形のように微妙にゆがんでいるのだ。校舎のほうに視線をあげ、そしてぐるりとみまわした。誰もいない。人の気配もなかった。まるで、人間がすべて滅んだ後の世界のように、しんとしていた。

そして撤去されたはずのあのプレハブの資材小屋が、なぜかまだそこにあった。そのときだった。

「おとうさん」と叫ぶ声が聞こえた。

うしろを振り向くと、西門から一人の生徒が走ってくる。

西条君だった。

ランドセルを上下にカタカタゆらしながら、青いポーターのポロシャツを着た西条君がこちらにめがけて走ってくる。

ぶつかる。

智也は足がすくみ、よけることもできず、立ちつくした。

西条君がぶつかった。

西条君がとおりにぬけた。自分のからだの中を。風のように、すーっと。

西条君がとおりすぎた。

そのとき、西条君の心が見えた。

赤くただれた傷口からしたたるウミのような、怒りが見えた。

智也は走り去る西条君の背中を目で追った。

東玄関から校舎の中に入り、西条君の姿は見えなくなった。

智也は何か別の気配を感じて視線を校門のほうに向けた。

ユラユラとした二つの人影がうっすらと見えた。まるでゼロハンでできた人間のように、透き通っている。

一つは背が高く、一つは背が低く、ユラユラとこちらに向かってくる。

智也が強い恐怖心を抱いたその瞬間、世界は暗転した。

ふたたび真っ暗闇の中にいる智也の背中へ、やわらかで、しかも確かなものに支えられていた。

こんどは目を開けたとたん、暗闇は消え去った。見慣れた自分の部屋の、木目に入った板の天井が見えた。

夢だったのか？ それとも、幽体離脱ってやつなのか？

心臓がドキドキした。

それが夕方だ。

そしていまは深夜の12時近く。

ずっと考え続けた。夕飯を食べながら、テレビを見ながら、勉強をしながら、ずっと考え続けた。

あの西条君の怒りを見た。怒りが物質のようにして見えた。

その怒りの理由を知っているのは自分だけだ。

だから、西条君のかわりに西条君のうらみをはらすことができるのも自分だけだ。

以前、西条君から智也の父親のメールアドレスを教えてくださいといわれたとき、智也は家に誰もいない昼時に、父の部屋のパソコンを立ち上げ、父の会社のネットワークに入るためのIDとパスワードを手に入れていた。

とっても簡単だった。父親はパスワードなどを管理するアプリケーションに、クレジットカードから会社のネットまで、あらゆるもののログイン情報を保存していた。そのアプリケーション自体もパスワードを入れないと起動しない仕組みになっていたが、ために父親の生年月日を西暦から入れるとあっけなく起動した。自宅で自分しか使わないパソコン

ンだからと油断してるのだ。

そこから、智也は父が会社のイントラネットに接続するときのIDとパスワードを手に入れたのだ。同時に、父親の仕事上のメールアドレスもすぐにわかった。

でも、西条君には教えなかった。怖かったのだ。

かわりに教えたのは、智也がこしらえた父親の名前を冠したGメールのアドレスだった。それが父のアドレスだと智也は西条君にウソをついた。だから、そのアドレスに送れば、メールは父親にはではなく、自分に届くことになる。

そのとき教えなかった父のメールアドレス、そして会社のIDとパスワード。それを使って行動を起こすべきだ、西条君のためにも、自分のためにも。

智也はそう心に決めた。この地上でも、勇気ある人間でいたいと、心に決めた。息子ではなく、一人の人間として父を否定するためにも。

でも、いま自分にできるのはこれしかない。ひきょうかもしれないが、これしかできないのだ。

智也は机の上のパソコンに向かい、キーボードのESCキーを押してスリープを解除した。

翌朝、火曜日の7時。

いつもより30分早くエミルはケプラーハウスの門を出た。エミルは駅へは向かわずに、代々木西原小学校の前を抜け、代々木公園の方向に歩いていった。

きのう、寝る前に書いたシオリ宛の短い手紙を、西条家のアパートの郵便受けに入れるためだ。

20分ほどであるアパートの前に着いた。鉄製の階段の登り口に、6世帯分に分けられた赤いスチール製の郵便受けがあった。エミルは「2F-3号」と書かれたボックスの口から白い封筒に入れた手紙をぼとんと中に落とす。

振り向くと鈴木の家があった。きのうは気づかなかった玄関脇のオリーブの木が美しくかった。

鈴木のお父さんは一人で夜をどうやって過ごしたのだろうか。母親から連絡はあったのだろ

うか？　きっと、麻里は無事だという電話があったはずだ。安心して、父親は出勤していったのだろうか。

そんなことを思いながら、鈴木の家をぼんやり見ていたら、背後で「行ってきます」という小さな声がして、ドアがパタンと閉まった。

エミルが首をめぐらせてアパートの2階の通路を見上げると、ちょうど部屋から出てきたシオリと目が合った。

シオリは閉めたばかりのドアに視線をチラリと投げてから、エミルに向かってニコリと笑みを浮かべると、小走りで階段を降りてきた。

シオリはそのまま走るように駅のほうに向かったので、エミルは急いであとを追った。アパートから50メートルほど離れたあたりで、シオリはようやく立ち止まり、振り向くとエミルにこんどは小さくおじぎをして、こう言った。

「お母さんに見つかるとうるさいから」

「さっき、シオリさん宛の手紙をポストにいれちゃったの」とエミルが言うと、「その手紙に書いたこと、いま話してくれますか？」とシオリはゆっくりと歩き出した。エミルはシオリと肩を並べてその歩みに合わせた。

「電話をくださいっていうことと、私の電話番号を書いただけなの」

「聞きたいことがあるんでしよう？ いま聞いてください。駅に着くまでに話しきれなかったら、電話します」

「ありがとうございます」

エミルは左横を歩くシオリに目をやった。

「お父さんのこと、聞いてもいい？」

「……どうぞ」

「お父さんが失踪した理由はなんだったんですか？」

「本当の理由は父だけが知っているわけですけど、母は会社のせいだと言っています」

「会社の？」

「追い出し部屋ってわかりますか？」

エミルは首を振った。

「会社がクビにしたい人をそこに集めていじめるんです。無理やりクビにすると法律違反になるから、自分からやめるようしむけるために会社が嫌がらせをします。そういう人が集められるのが追い出し部屋なんです。父はずっと追い出し部屋にやられていたんで

す。出勤しても駐車場の草むしりとかしかさせてもらえなかったそうです」

「どうしてそんな目に？」

「上司に反抗したんです。部下を守るために。サービス残業ってわかりますか？」

エミルはまた首を振った。

「普通、残業したら、その分、残業手当がもらえるんです。サービス残業っていうのは、残業しても残業手当がもらえないこと。だから、サービスなんです。でも、本当は、誰だって働いた分、お給料が欲しいですよ。でも、会社は利益を上げるためにできるだけお給料は払いたくない。だから、残業しても手当てを払わないんです」

「でも、それも法律違反でしょ？」

「そうです。でも、上司に刃向かえないから、みんな我慢してサービス残業をするんです。父が課長だった部署は中でもそれがひどくて、父の部下が働き過ぎで入院したんです。それで、父が悩んだ末に、自分の上司の部長に訴えたんです、サービス残業はやめませんかかって」

「勇気があるんですね、シオリさんのお父さん」

「はい。そう思います。勇気のある父です。ふだんは静かで、怒ったことなんか一度も無

くて、腰の低い父でしたから、そんなふう上司に刃向かうなんて、わたし、信じられませんでした」

「それで追い出し部屋に？」

「そうです。半年近くも、ずっと。草むしりや、トイレ掃除や、そんなことばかりさせられたそうです」

「半年も……」

「はい、半年も。父がさらに辛かったのは、その上司が同じ社宅に住んでいたことなんです。社宅でしょっちゅうその人と顔を合わせなくてはいけないし、家族同士のつきあいもありますから、父にとっては余計に屈辱的だったんです。でも、父は静かで、忍耐強い人だったから、それでも半年我慢したんです。でも、一ヶ月ほど前、突然、会社に行くと言って出て行って、そのまま帰ってきませんでした。クルマが無くなっていたので、きっと、クルマでどこかに行ってしまったんだと思いますけど……」

「会社のほうは？」

「いなくなつた前日に、父は退職届けを出していました。とうとう負けちゃつたんです、父は。ついに降参したんです。それで、きっと、希望とか、プライドとか、いろんなもの

がズタズタになって、わたしたちをおいて、どっかに逃げていっちゃったんです。結局、勇気が無かったんです……」

エミルは言葉が見つからず、うつむいた。

「わたしたちは社宅にいられなくなって、あわてて今のところに引っ越したんです。社宅は元代々木にあるんですけど、イオリとかの学校もあったから、社宅からあまり離れていないいまのところを越しました。万一、父親が戻ってきた場合は、社宅から離れていないほうが父がわたしたちを探しやすいだろうってこともあって」

気がつくと、目の前に代々木八幡駅のホームが現れた。電車を待つたくさんの人が金網越しに見えた。

エミルはこれだけは伝えなければと、立ち止まり、シオリに向き合った。

「あの、伝えておかなくてはいけないことがあるんです」

シオリはげげんな表情でエミルを見上げた。

「わたしたちの小学校の同級生に鈴木一輝君という男子がいたの。覚えてる？」

シオリは少し考えてから、首を振った。

「シオリさんがいま住んでいるアパートの真ん前に彼のお家があるの。シオリさんのお母

さんは鈴木君のお母さんをよく知っていると思います。その鈴木君の高校生のお姉さんが、シオリさんのお父さんを何度か見かけているの」

「父の失踪のあとにですか？」

エミルはうなずくと続けた。

「あのアパートの周辺で。シオリさんたちの部屋はどこかと、お父さんから聞かれたって。その鈴木君のお姉さんも半月ほど前に家出したんです。どうも彼氏に会うためというのが理由のようだけど、そのとき、シオリさんのお父さんのクルマに途中まで乗せてもらったらしいの」

シオリは驚き、カバンを持っていないほうの左手で口をおおった。

「この話は、わたしの友人たちがきのう仙台で鈴木君のお姉さんから直接聞きました。だから、まだ詳しいことはわからないんだけど、きっと、今日の夕方までには、いろんなことが鈴木君のお姉さんから聞いているはずなの。場合によっては、シオリさんのお父さんが今どこにいるのか、その手がかかりもつかめるかもしれない。だから、学校から帰ったら、わたしに電話をしてくれませんか。わかったことをお知らせしたいの」

口をおおったままのシオリの左手が震えていた。

「このこと、お母さんにはまだないしよにしてほしいの。鈴木君のお母さんのこともあるから」

シオリはうなずくと、左手を震わせたまま、大きく息をした。

「ありがとう」とシオリは言うのと、駅に向かって再び歩き出した。

駅に着くと二人は黙ったまま改札を抜けた。

反対側のホームに向かうおうとしたエミルが階段の手前で立ち止まり、シオリにこう言った。

「そういえば、その部長さんって、なんという名前の人？」

「カミソノダ。神様のカミに公園のエンに田んぼの田」

「珍しい名字ね。あ、それから、シオリって漢字でどう書くかわからなかったから、手紙にはカタカナで書いてちゃった」

「ポエムの詩に機織りの織」

エミルはうなずくと、「それじゃ」とシオリに向かって小さく手を上げた。シオリも小さく左手を振った。

エミルは階段を上り、下りのホームに降りたった。

同時に各駅停車の電車がやって来て、比較的空いているその下り電車にエミルは乗りこむと、上りホーム側のドアの窓にもたれかかるようにしてホームを見た。ホームからあふれ出しそうな人波に隠されて、シオリの姿を見つけることはできなかった。

24

「ルミさん、どうした？ 大丈夫かい？ ルミさん？」

天道さんがドミトリーのドアを何度もノックするが、返事が無い。

「おかみさーん、来てくれえー！」と天道さんは階下に向かって叫んだ。

バタバタと階段を上る音がして、おかみが駆け上がってきた。その後ろを、心配そうな顔をした大澤さんとカメさんがついてきた。

「鍵がかかっているんだ。それに、オレ、男だから。おかみさん、頼む、部屋の中を見てください」と天道さんが言うと、おかみはエプロンのポケットから鍵束を出し、ドミトリーのドアの鍵穴に鍵を差し込み、回した。

おかみはおそるおそるドアを押し開け、中をのぞき込むと、あわてて飛び込んだ。

「大丈夫？」と叫ぶおかみの声に、天道さんたちも駆け込んだ。

二段ベッドの下でルミさんが仰向けに横たわっているのが見え、ハーハーという激しい息の音が聞こえた。おかみはルミさんのかたわらにひざをつき、額に手を当てている。

「ものすごい熱だあ」と、おかみは心配そうに言いながら天道さんたちを見上げた。

「ルミさん、大丈夫か？」という天道さんの言葉にもルミさんの反応はない。

カメさんが、おかみに脇にどくように手で示し、ひざまずきながらルミさんの手首に手を当てて脈を取った。それから口もとに耳をあてて呼吸の音を聴き、そしてルミさんの額に手を当てた。

「救急車、呼びますか？」とおかみが聞いた。

カメさんは首を振ると、「大丈夫です。ぼく、医学生なんで」と言って、こんどはルミさんのまぶたを指で押し開いて眼球を調べた。

「天道さん」とカメさんはひざまずいたまま頭を上げると、「セー又川に電話してくれませんか？ ルミさんの様子を見て欲しいって」と言った。

「そういうことか……」と天道さんはつぶやくと、隣の部屋に急いで戻っていった。

「オレ、ホワイトセージの葉を持ってきている」と大澤さんが言うと、カメさんが「焼きましよう、いますぐ」とうなずいた。

大澤さんはおかみに「お香を焚いても大丈夫なお皿とライターをお借りしてもいいですか。あ、それからお塩も」と言いながら隣の部屋に行き、すぐに白っぽい葉が詰まった小さなビニール袋を持って戻ってきた。

おかみが大きめの灰皿とライターと1キロ入りの食塩を持って階段を上ってきて大澤さんに手渡した。大澤さんはビニール袋の中から取り出した数枚の葉を灰皿の中に置くと、ライターで火を着けた。煙がモクモクと立ち上り、おかみは驚いたようにあどずさった。ホワイトセージの爽やかで胸がつんとするような強い香りが部屋中に立ちこめた。

大澤さんは、灰皿の中から穏やかに燃えている葉を一枚つまみだし、何ごとかをブツブツつぶやきながら、ルミさんの周囲を煙でなぞるようにその葉を動かした。

それから部屋の四隅に、塩を二つかみずつ置いていった。そしてまたホワイトセージの葉を手にとると、ルミさんの頭に煙があたるように片手であおいだ。

天道さんが iPhone を手に戻ってきた。

「いますぐ様子を見てくれるそうだ」

天道さんは心配そうにルミさんを見おろした。「あのオッサン、もしかしたらとんだバケモンかもしれんな」

大澤さんがポツリと言った。「いま気づいたんですけど、ムーンチャイルドって、アレイスター・クロウリーの書いた小説の題名ですよね」

「黒魔術師クロウリーか」と天道さんが言った。「おそらく、あのオッサンは、呪術オタクかもしれないな。セー又川やルミさんのような力は無いが、呪術の知識はある。オッサン、恐怖で教団を支配しているのかもしれないな。でなきゃ、あんな小者に人が帰依するとも思えん」

天道さんはそう言って、腕組みをして左手であごをなでた。

ふと振り返ると、ジルと麻里と母親の3人が心配そうな表情でドアの横に立ち、こちらを見ていた。

「ああ、疲れが出たんだと思います。大丈夫です。亀田君は医大の学生ですし。どうぞ、朝ご飯を召し上がってください。我々も、もう少ししたら下に行きますから」と天道さんはつとめて明るく麻里たちに告げた。

「おかみさんも、下で皆さんのお世話をなさってください。こっちはわれわれで大丈夫で

す」

「そうですか？」と心配そうな表情を浮かべたまま、おかみが階下へ降りていくと、麻里さんたちも従った。

大澤さんは持っていたホワイトセージの葉を灰皿に戻すと、ルミさんの頭の側にあぐらをかいて座り、左右の人さし指でルミさんの額に触れた。そのまま大澤さんは目をつむり、何ごとかを一心につぶやき、それから口を閉じ、ゆっくりとした呼吸を続けた。

数分が過ぎると、激しかったルミさんの呼吸が元に戻った。スースーと、まるで熟睡しているときのような息づかいに変わり、カメさんも脈が正常に戻ったと親指を立てて天道さんに知らせた。

すると、ルミさんのまぶたが震え、ゆっくりと目を開けた。

ルミさんはまっすぐ頭上を見たまま、しばらくじっとしていたが、やがて、みんなのいるほうに顔を向けると、嬉しそうにほほ笑んだ。

「もう大丈夫かい？」と天道さんが静かに聞くと、ルミさんはゆっくりとうなずいた。

「みんなのエネルギーを感じたし、セー又川がいろんな怪物をやっつけてくれた」とおかしそうに笑った。

「そうかい」と天道さんもおかしそうに笑うと、カメさんと大澤さんがそろってフーッと安堵のため息をついた。

「油断してたわ」とルミさんが言うと、3人とも大きくうなずいた。

天道さんの iPhone が鳴った。

「セー又川君か。ありがとう、ありがとう。メルシーぼくーだ。ルミさんはもう平気だ」
天道さんはそれから、二言三言会話を交わし、電話を切った。

「セー又川君がね、ヨーロッパ系の呪術だと言っていた。深い森の奥にある沼地のようなところにルミさんがいて、カエルや蛇みたいな妖怪たちに脅されていたので、そいつらをけっ飛ばしてやったそうだ」

「そうなの」とルミさんが笑った。「それにホワイトセージの香りがしたら、沼の色が青色に変わって、底なし沼がきれいな池になったわ。ありがとう、みなさん」

「あのタヌキオヤジ、これからどう出てくるか、警戒が必要だな。まさか麻里さんを強引に奪回しにくるとは思えんが、これだけではすまんだろう」と天道さんが言うと、大澤さんがこう言った。

「ルミさんがいちばん霊的感受性が強かったので、ルミさんを襲ったと思うんです。つま

り、襲いやすかった。逆に言えば麻里さんやお母さんといった普通の人たちを襲う力は、あの教祖にはないはずです。ですから、われわれが油断しなければ、戦いには勝てます」

「ま、いずれにせよ、面倒は面倒だな」と天道さんはまたあごをなでた。

25

1時間目と2時間目のあいだに、詩織は机の下に隠すようにして携帯電話をこっそりと見た。授業中にカバンの中でかすかに携帯電話が震えたような気がしたのだ。こんな時間にメールを寄こすとすれば、母しかない。

案の定、ディスプレイには母の名前が表示されていた。タップしてメールを開いた。

《授業が終わったらすぐに帰ってきて。父さんの会社の人が話があるということ。5時に来ます。伊織の名をかたった人間から会社からメールがあったそうです。あなたにもいてほしいので》

詩織は《わかりました》とだけ返信し、急いで携帯電話をカバンにしまった。

弟の名をかたったメールとはいったいなんだろう。どんな意味があるんだろう。詩織は何が何だか想像もつかなかった。

いたずらなら、ほうっておけばいいのに、なぜ家にまで会社の人が必要があるのか。伊織が亡くなったことは会社は知っているはず。通夜にもお葬式にも、父さんの会社の人たちはやって来たし、社宅に住んでいる人たちもほとんど全員がやって来た。

それなのに、なぜ、伊織の名をかたるメールが来たと言うだけで、会社の人たちは直接母に話をしなくてはいけないのだろうか。

少しも理解できなかった。

授業は3時50分に終わるし、きょうは部活もない。お掃除を免除してもらえよう、担任に頼めば、5時までには余裕で帰ることができる。

エミルから父親についての話を聞いたあの瞬間から、からだか熱っぽい感じがずっとしていた。それは父親が今日にでも見つかるのではないか、あるいは帰ってくるのではないか、そんな根拠のない希望が心を占領し始めたせいだ。

考えてみればそれはあまりに樂觀的すぎることだけど、なぜだか、父親の存在がエミルの話によって再びリアリティをもって感じられるようになったのだ。まるで、父親の体温

が放射熱のようにして自分に届いているかのようだった。しおれていく花のオーラのよう
に希薄になる一方だった父親の存在感が、再び少しずつ力を増してきたのだ。

エミルの不思議な能力が父を見つけ出し、自分は無意識のうちに期待し
ているのだろうか。そう、詩織は自問した。

母と二人だけの生活はあまりにもさみしすぎた。

わずか一ヶ月前までは、父親も弟もいた4人の食卓が、3人になり、そしてあつという
間に2人になった。住むところも、駅への道のりも、何もかもが完全に変わってしまった。
弟の初七日が終わったばかりだが、ときどき、弟が死んでしまったことを忘れる。

「伊織い!!」と呼びそうになって開けた口を、とてつもない喪失感とともに閉じるとき、
詩織は世界全体を壊したくなるほどの怒りを感じる。そうなのだ。いまはまだ悲しみより
も、怒りのほうが何千倍、何万倍も強いのだ。

おそらくそれは母親も同じだろう。

通夜のときにやって来た社宅の人たちの顔を、母はかたくなに見ようとしなかったし、
かけられた言葉に返事もしなかった。まるで、社宅の人たちのせいで伊織が死んだような
そんな母の態度だった。

伊織はなんで死んだんだろう。

伊織はなんで教室の窓から屋根なんか飛び移ろうとしたんだろう。

きっと父親の失踪と関係があるに違いない。自殺ではないとしても、父親の失踪が伊織の心に大きな影響を与えたのは間違いない。

だから、会社が悪いのだ、社宅の連中が悪いのだ。母はそんな怒りを抱いていた。

だが、詩織の怒りはもっと抽象的なものへの怒りだ。

たとえば、それは神というものがいるのなら、その神に対しての激しい怒りだった。

26

10時21分発のやまびこ134号は滑り出すように発車した。

5番の窓側に鈴木のお母さんが座り、通路側にはカメさんが座った。

「東京までおよそ2時間なんて近いですねえ」と言いながら、鈴木のお母さんは加速度をつけて後退していく仙台駅のホームをぼーっと見つめた。

カメさんは、麻里たちが教室の会場に着いたころかなと、あらためて腕時計の文字盤を見ながら、9時に出発して、でも、一般道だから、運転上手の天道さんでも1時間じゃ着かないか、石巻までは、とカメさんは計算した。

「きのうの夜、占星術とやらで鑑定していただいて、あの、よかったです。何が問題だったのか、すっきりしました」と鈴木のお母さんは言うと、カメさんに向かってちょこんと頭を下げた。

「いえ、とんでもありません。でも、外に出て仕事をする気持ちになられて、よかったです。ご主人の説得はたいへんかもしれませんが、夫婦というのは、違っていろいろこそ助け合えるし、面白いんだと思います。なんて、独身のぼくがいうのも、おこがましいですが」

カメさんはそう言って、頭をかいた。

「きのうもみなさんのご指摘を受けましたが、こまかいところが気になってしかたがなく、大局を見失うといえますか、わたしには確かにそういうところがあるんです。一輝も麻里も、さぞやうるさい母親だと思ったでしょうね。……亀田さん、昨夜はね、麻里と手をつないだまま寝たんですよ。十なん年ぶりでしょう、麻里が幼稚園のころ以来ですから。

いくつになっても子どもはかわいいです。一輝も出院したら、よおく話を聞いてみます。天道さんにも言われましたが、十聞いて一話す人間になれるよう、頑張りますね。いままでは一聞いて十話す母親でしたからねえ……」

まるでつき物が落ちたかのような晴れやかさに、カメさんは半分驚き、半分嬉しく、隣に座る鈴木之母の横顔に目をやると、目尻に涙の粒が見えた。

それからしばらくよもやま話に花を咲かせているうちに、二人とも昨夜の疲れのせいか、いつの間にかウトウトとし始め、気がついたらすでに上野にさしかかっていた。

東京駅で新幹線を降り、鈴木之母さんは中央線に乗り換えようとコンコースを歩き出しましたが、カメさんが「タクシーで帰りましょう。ぼくが支払いますから」とうしろから声をかけた。

「そんな、もったいない」と鈴木之母さんはびっくりしたように振り返ったが、カメさんは「ぼく、なんかものごく疲れちゃって。さ、こっちの八重洲口から出ましょう」と、鈴木之母さんの腕を引っぱった。

鈴木之母さんはあきらめたように八重洲口から出ると、カメさんと一緒にタクシーに乗りこんだ。

日比谷から246に出て、それから表参道を抜け、代々木公園までやって来た。

かかった時間がおよそ20分ほどだったから、「意外と近いんですね」と鈴木のお母さんも少し驚いた。

地下鉄の代々木公園駅の近くでよいと遠慮する鈴木のお母さんだったが、家の前まで行きましよう、カメさんは無理やり道案内をさせた。

狭い一方通行の道に面した、1階が車庫と玄関というつくりになった3階建てのこじんまりとした家だった。玄関前には大きなオリーブの木が植わっていた。

鈴木のお母さんはタクシーから降りると、車内のカメさんに向かって何度もおじぎをした。

「ほんとうにありがとうございます。また、相談に乗ってください。天道さんたちにもよろしくお伝えください」

「はい」というカメさんの返事と同時にタクシーのドアがバタンと閉まった。

タクシーが走り出そうとすると、前方から若者の運転する原付バイクが一方通行を逆走してきた。運転手さんは窓を開け、からだを乗り出すと、バイクに向かって「一通だよ!!」と叫んだ。若者はキョトンとした顔を一瞬見せてから、無言でUターンした。

そのときだった。タクシーの背後から「亀田さん！！ 亀田さん！！」と叫びながら駆け寄ってきた鈴木のお母さんがタクシーの窓を激しくたたいた。

「運転手さん、ここで降ります」とカメさんはあわてて財布を取り出し、5000円札をわたすと「お釣りはいいです」とタクシーから降りた。

「どうしたんですか？」とカメさんが聞くと、鈴木のお母さんは「主人が、主人が」と言って自宅の玄関を指さした。

カメさんは玄関に向かって走った。

廊下に鈴木のお父さんと思われる中年の男性が、足を玄関側に向け、パジャマ姿で仰向けに倒れていた。

カメさんはあわてて土足のまま廊下にあがると、男性の頭の左横に正坐し、口のあたりに耳を寄せ、同時に手を胸に当てた。それから、ルミさんにしたときのように、まぶたを指で押し開き、眼球を見た。

「大丈夫ですよ」と男性を見おろしながら、カメさんは静かに言った。「眠っているだけです。起こしましょう」

鈴木のお母さんはカメさんの言葉が信じられないというように「眠ってる……んです

か」とつぶやいた。

カメさんは「鈴木さん、鈴木さん。大丈夫ですか」と少し大きめの声で呼びかけ、男性の額をひとさし指でトントンと2度叩いた。

鈴木のお父さんは、驚いたようにぼちっと目を開けると、カメさんの顔を見てビクツと体を震わせた。

すかさず、鈴木のお母さんが「お父さん、大丈夫？　ここに倒れてたから」と言いながら靴を脱いで廊下にと上がると、鈴木のお父さんをはさむようにカメさんの反対側に正坐した。

「なんで、オレ、廊下で寝てるんだ？」と言いながら、お父さんはからだをむくっと起こすと、あわてたように「今何時だ？」とお母さんに聞いた。

「もうお昼の1時過ぎよ」というと、お父さんは「会社に行かない」と立ち上がったが、すぐにヘナヘナと座り込んだ。

「力が出ない」とお父さんは言うのと、カメさんをじっと見つめた。「キミは？」

「亀田と申します」

「麻里を見つけてくださった能流登さんのお友達よ」とお母さんが言った。

「ああ、麻里をね。麻里をね」とお父さんはまだ混乱しているようにしきりにうなずいた。土足のままだったカメさんが靴を脱ぎながら、静かな口調でこうたずねた。

「おかしな夢を見たんじゃないやありませんか？ 暗い森の中で底なし沼に足を取られたり、不気味な者たちに襲われそうになったり」

鈴木のお父さんはなにか重要なことを思い出したかのように、目を大きく見開いた。同時に呼吸が速まったのがわかった。

カメさんがお父さんの肩にそっと手を置いて言った。「怖がらなくても大丈夫です。単なる夢で、実際にそういう場所に行ったわけじゃないですから」

「そうだよね、そうだよね」とお父さんは言うと、からだをぶるブルッと震わせた。「思い出したよ。恐ろしい夢を見てね……。魚が腐ったようなものすごい臭いがする、耳まで口が裂けた老女が襲ってきた。いや、まるつきり現実と変わらないリアルな夢でね、あまりの恐ろしさに目がさめて、それで飛び起きたんだ。その先の記憶が無い」

「きっと、無意識のうちに心が自分を防衛しようとして、外からの情報を脳がシャットアウトしたんですよ。それで、おそらく逃げ出そうと歩き出した途中で、いわば、気絶したようになっただんだと思います」とカメさんが言った。「医者のお卵として、ご助言いたしますが、

きょうは会社をお休みになったほうがいいですよ」

カメさんとお母さんはお父さんを抱き起こし、両脇からかかえるようにして、1階奥の寝室に連れ戻すと、乱れた毛布を横にだけ、お父さんが蒲団の上に横になるのを支えた。

お父さんは恐怖が忘れられないのか、まぶたを震わせながら目を閉じた。

カメさんが玄関に向かうと、鈴木のお母さんが追ってきて心配そうにたずねた。

「なにがあっただんでしょうか？」

「実は、ルミさんも今朝、同じような目にあっただですよ。仕返しだと思えます、教団の」「教団の……ですか？」

「十中八九。教祖か誰かが、ルミさんに送ったような邪悪な想念を、お父さんにも送ったんです。お父さんは幽霊を見たりする人じゃないですか？」

「はい、出張で地方の旅館やホテルに泊まると、へんな音が聞こえたり、へんなものが見えたりするとよく言っています」

「そのことを、たとえば教団の岡本さんに話したことはありませんか？」

「……たぶん、何度か。岡本さんから、お父さんは憑依されやすい体質だから教団に入れたほうがいいと言われた記憶があります」

「それで攻撃の対象になったんだと思います。心霊的感受性が強いと、攻撃されやすいんです」

「なんてことを……。あのう、亀田さん。実は……。心配なことがあるんです」

「なんですか？」

「お向かいのアパートに引っ越してきた西条さんも、実はご夫婦そろって以前から教団の信者さんなんです。ただ、最近はもう熱心じゃなくなったようなのですが、きのうの夕方わたしが東京駅に向かおうと外に出たときに奥さんと鉢合わせして、それで言ってしまうんです。教祖様のおかげで麻里が見つかったって。これから教祖様と麻里を迎えに行くって」

カメさんは西条という名前をどこかで聞いたぞと、しきりに思い出そうとした。鈴木のお母さんが続けた。

「きのう麻里が言っていた、1カ月ほど前にご主人が失踪したお宅です。ですから、もしかすると、西条さんも、ご主人を見つけてほしいといまごろ教祖様にお願いしに行っているかもしれない」

ようやくカメさんの頭の中に西条という名前が意味を持って浮かび上がってきた。同時

に高村兄弟の呪いの動画の話もカメラさんは思い出した。

「あおう、このご近所には教団の信者さんが多いんですか？」とカメラさんがきくと、お母さんは困ったように顔を伏せた。

「西条さんはご主人の会社の上司から誘われて入団したんです。その会社の社宅がこの近所にあるんですが、そういうわけで、その社宅の人には信者さんが多いんです。わたしが入団したきっかけは西条さんの紹介なんです。わたしを説得しにやって来たのは、その西条さんの上司の方なんです」

「その社宅が教団の信者さんの、いわば巢窟のようになっているんでしょうか？」

「巢窟というのは大げさかもしれませんが、たぶん、入居しているご家族の半分近くが信者さんだと思います。勧誘するのが会社の上司ですからね、断り切れずに、形だけの信者という人も多いと思いますけども」

「ちなみに、その上司の方はなんていう人ですか？」

「カミソノダさんです。神様のカミに公園のエンに田んぼの田」

急ぎよ教室の開催場所が石巻から岩手県の釜石に変わった。ジルと麻里に教室を依頼しているレスキューイーストという団体から、ジルの携帯電話に予定変更の連絡があったのは、梅田ハウスを出発してすぐだった。

天道さんの運転するCX5が釜石に着いたのは、だからすでにお昼をすぎたころだった。教室は午後3時からということだったから、時間には余裕があった。

大澤さんは何度かボランテニアに来ていたので被災地の状況についてはそれなりの知識があったが、初めてやって来た天道さんとルミさんにとっては、いまさらながらに衝撃が大きかった。

国道45号線を北上して釜石に向かうのだが、道は深い山あいを走ったかと思うと、突然に目の前に夏の日にきらめく海が開けるなど、美しい景色の連続だった。

陸前高田を通過するころルミさんが言った。

「きれいな海ね」

すると大澤さんがこう言ったのだ。

「昔はこの道から海は見えなかったんです」

ルミさんがキョトンとした顔をした。

「ずーっと、あの海の手前まで、家々が建ち並んでましたから、海なんか見えなかったんですよ。津波で家も防波堤もみんなさらわれたので、それで海が見えるようになったんです」

「だって、海まであんなに遠いのに？」

「そうですよ。このだだっ広い空き地に、2年前までは何千人も何万人も住む町があったんだと想像してみてください。どんなにすごいことが起きたのか、わかりますよね。しかも、2年もたったのに、ほとんど復興していない。ただの空き地がただだけです」

ジルと麻里がうなずいた。

そしていまは午後1時過ぎ。

釜石駅前の仮設商店街の「もりのや」というおそば屋さんで昼ご飯を食べた。

天道さんが、そば湯を持ってきたおかみにこう聞いた。エルメスのスカーフで頭を包んだ、オシャレなおばあちゃんだ。

「あの、入り口にかけてある、年季の入った、木目が見事なお店の看板ですが、津波で流

されなかつたんですか」

「看板？ いやいや、津波で店も家もみーんな流されたのお。避難所で暮らしてるときに、もお、店はやめるしかないべって家族で話したら、知人があの看板をさ、ガレギのながから見上げだぞって持ってきてくれたんですよ。何がら何までゼーんぶなぐしで、下着一枚も残らながっただけど、あの看板だけが戻ってきたの。神様が、もう一回、店やれってことだべがって、娘夫婦と話しでね、よおす、やるべって」

「そうだったんですか」

「そばの道具も丼も、みーんな流されでなくなっただけども、この看板のはなすが新聞さ出たらば、同業者のひどだずが道具だの食器だのみーんなおぐつてくれでえ、店ができるようになったのっす」

天道さんが目尻を人さし指でぬぐったのを大澤さんは見逃さなかった。横を見ればルミさんも鼻を押さえている。わさびのせいではない。

食事を終えてから、みんなはお寺の境内に建てられた青葉町仮設商店街に向かった。きょうの教室の世話役を務める仮設商店街の桑畑書店の店主をたずねた。

「ごくろうさまですう」と、ひよろりとした店主が会場のギャラリースペースにみんなを

案内した。

震災後に被災者のコミュニケーションのためにと建てられた小さな公民館のような建物の中には、すでに椅子が並べられていた。レスキューイーストのメンバーがとくに到着して、水彩の道具と、ラテアートの機材を段ボール箱から取り出していた。

ジルと麻里が笑顔で準備作業に加わり、天道さんとルミさんも手伝った。

大澤さんはC X 5に戻ると、後部座席に腰を下ろしてノートパソコンを開いた。そして、道々麻里さんから聞き出した西条君のお父さんの話の続きをエミルに伝えるためのメールを書き始めた。

エミル様

きのうルミさんがお知らせしたあとにわかったことをお伝えします。

助手席に乗りこんだ麻里さんと西条君のお父さんは、クルマを停めたまま話をしたそうです。お父さんは、ある組織の不正を告発しようとしたことがばれて会社からいらなくなりました。そればかりか、命の危険も感じるようになった。正義を貫けなかった自分が情けないだけではなく、家族にも迷惑がかかるので、失踪することを決断した。失踪のきっかけと

なった不正についても家族には一切話していない。家族が知れば家族にも危険が及ぶからだと、そう話したそうです。

それから西条君のお父さんは、自分の実家が原発事故のために立ち入り禁止になっている福島県の双葉町にあるという話をし、死ぬ前に一度故郷がどうなっているのか見てみたいと言ったそうです。すでに両親が亡くなり、生家が人手に渡っていることもあり、震災があっても訪れる機会がなかったのだということでした。その話を聞いた麻里は、家出して被災地でボランティアをしているジルのことを思い出し、たまらなく会いたくなったのだそうです。

ジルと麻里はそれまでもずっと連絡を取り合っていました。二人は渋谷のカフェでのバイトで知り合ったのだそうです。ジルは麻里の一つ上の高校3年生で、美術の道に進みたいの、父親は安定した確実な道を歩めと美大への進学を決して許そうとしない。それでケンカになっていたのだそうです。お互い、親との関係がうまくいかないという問題を抱えているどうし、話をしているうちに恋人どうしの関係になったという話でした。

西条君のお父さんが福島に行くのなら、自分も連れて行ってくれと麻里さんから頼んだそうです。それで二人は福島に向かって出発したのです。

双葉町に入る道路には検問所のようなものがあり、そこから先には行くことができなかったそうです。ふたりはクルマをおりました。あたりには雑草が生い茂り、まるでジャングルのような無秩序が広がっていたそうです。昆虫もたくさんいて、鳥もたくさん飛び交い、猿までいたそうです。そこに二人はけっしてへこたれることのない生命の力強いエネルギーを感じたと言います。

西条君のお父さんは元氣を取り戻し、東京に帰ると言ったそうです。

麻里さんは郡山で車から降りしてもらい、ジルに電話して仙台で落ち合ったということ
です。

麻里さんは西条君のお父さんは東京の家に戻ったとばかり思っていたようでした。

ぼく的には西条君のお父さんが言った「組織の不正」「命の危険」、そして「家族にも危険が及ぶ」という言葉が引っかかりました。

いまは岩手県の釜石です。仙台に帰るのは夜の8時か9時になるかもしれませんので、ジルさんと麻里さんの安全を考えれば、東京に戻るのは明日になってしまうと思います。

またメールしますね。カメによろしく。ちゃんと大学行けよと言っていてください。

それから大澤さんはメールの送信ボタンをクリックした。

顔を上げるとフロントガラスごしに、夏の光に閉じ込められて動きが止まった、人気の無い被災地の町が見えた。

東京とは違う時間の流れ方に、心地よい眠気のようなものを感じ、大澤さんはふっと息を吸い、目を閉じた。

28

詩織が家に着いたのは5時15分前ごろ。母親は掃除機で家の掃除をしていた。リビングルームに積まれていた引っ越し会社の段ボール箱が無くなっていた。

詩織はカバンをリビングルームの隣の和室の勉強机の上に置くと、キッチンのテーブルに座った。

「お母さん、どんなメールなの？」と、ゴーツという音を立てる掃除機を押す母の背に大きな声で聞いた。

母は掃除機を止めると、首を振った。「来てから見せるって」

「いたずらメールなんでしょ？」

母はまた首を振った。「もつと深刻な様子だったわね」

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。約束の時刻よりずいぶん早いと二人は思った。

あわてて掃除機を片付け、母がドアを開けると、二人の中年男性が立っていた。一人の顔に詩織は見覚えがあった。神園田という父の上司だった。母のからだがかわばったのが、後ろ姿からもわかった。

「どうぞ」と招き入れると、二人は無言で靴を脱ぎ、室内に入ってきた。

母はキッチンのテーブルを手のひらで指し示すと、二人はどっしりとイスに腰を下ろした。ワイシャツにノーネクタイの二人のうち、神園田ではない方の男は髪が薄く、眼鏡をかけて小太りで、腕にたたんでかけていた上着から取り出したハンカチで首筋の汗をふきながら、「お電話した法務部の斉藤と申します」と頭を下げた。

神園田はやせぎすの背の高い男で、少し白髪がまじった髪を七三に分け、ギョロリとした目で母を見て、「このたびは、どうも。初七日が終わったばかりだと思いますが」と頭を下げた。

母は無言で頭を下げると、キッチンの流し台に向かった。二人の男はこんどは詩織を見て、頭を下げた。詩織もあいさつを返すと、ソファの端に座った。

母が「どうぞ」と冷たいお茶をテーブルの上に並べると、二人の正面に座った。

「さっそくですが」と神園田はカバンの中からノートパソコンを取りだして広げ、カチャカチャと手早くキーを打つと、ディスプレイが母に向くようにノートパソコンをクルリと180度回した。

「ご覧になれますか？」

母はうなずき、ディスプレイに顔を近づけた。

「これが息子さんの名をかたって送られてきたメールです」と冷ややかに神園田が言った。「詩織」と母が呼んだ。詩織は立ち上がり、母の横に立ち、のぞき込むようにディスプレイに顔を寄せた。

本文を読んだ。短い文章だった。

《この呪いの動画を見たおまえは自分の行いを懺悔し、そして自ら死をもって償うのだ。

とくに神園田は万死に値します。のろいがとけることは永遠にない。》

そして、『地獄をさまよう西条伊織より』という署名があった。

神園田が言った。「メールの一番最後に、動画のアイコンがあるはずです。それをダブルクリックしてみてください」

詩織が言われたとおりにダブルクリックすると、再生アプリケーションが立ち上がり、動画がスタートした。

暗い森が揺れ動き、そしてお墓があった。詩織はそのお墓に見覚えがあったが、どこで見たのかは思い出せなかった。

それからぼんやりした男性の写真が写り、そして次に、驚いたことに父の写真が大写しになった。なぜ父の写真が……。

と思う間もなく、こんどは家族写真が現れた。去年、沖縄に旅行したときの写真だ。伊織がいて、母がいて、自分がいる。だが、父だけが顔を真っ黒に塗りつぶされている。

だががこんなものを作ったのだろう。詩織はわけもわからず、呆然とした。

神園田が母と詩織の顔を見くらべるようにして言った。「このメールが、我が社の本社勤務の全社員あてに届いたんですよ。本社の560名すべてにです。今朝のことですがね」

母は困惑の表情を浮かべ、詩織の顔を見た。

「この写真はご家族の写真ですよね。とすれば、ご家族のだれかがこの動画をつくったと考えるのが当然かと。そうでなければ、だれかがご家族の写真をどうにかして手に入れたということになりますな」と神園田は無表情に言った。「どうなんでしょうか、そのところは？」

「どうなんでしょうかと言われましても……」と母はディスプレイに視線を向けたまま答えた。

「ご主人からは連絡はありませんか？ 息子さんは亡くなられています。考えられるのは、ご主人が作って送ったか、お嬢さんが作って送ったか」

詩織はブルブルッと体を震わせ、「わたしは、何も、知りません」とつぶやくように言った。怒りの小さな炎が胸の中に点った。

「本社のネットワークに入るIDとパスワードがないと、全員一斉にメールを送ることはできませんし、送り主はわたしになっています。だれかがわたしのIDとパスワードを盗み、このメールを送った。ご主人のIDはすでに抹消されていますから、考えられるのは、ご主人がわたしのIDとパスワードを推測して、わたしのアドレスを不正に利用したとい

うことです。IDはみな社員の名前ですから、ご主人ならすぐにわかります。パスワードがよくわかったものだと思いますが、わたしの趣味などから推測できるもので、そのためにご主人が直感的に導き出したのかもしれないかもしれません。あるいは他の手を使ったか。いずれにしても、考えられるのはご主人だけなのです」

汗を拭きながら、もう一人の男がしきりにうなずいた。

母は大きくため息をつくとき、怒りを押し殺したような声でこう言った。

「主人からはもう1カ月以上も連絡がありません。生きているのか、死んでいるのか。それというの、あなたがたが主人にひどい仕打ちをしたからなんじゃありませんか。それに、伊織だって、あの子だって、死なずにすんだかもしれない。そんな動画が送られてきたくらいで、何をビクビクしているんですか。さ、お帰りください。お帰りください」

神園田はノートパソコンを閉じ、カバンにしまうと、サッと立ち上がった。イスが背後に押しやられ、がたと音がした。

「いいですか、西条さん。ご主人から連絡があったら、すぐにわたしに知らせてください。必ず。必ずです。そうでないと……」と神園田は言葉を切り、もう一人の男の様子をうかがうようにチラリと見て、こう続けた。「あの方の怒りが、ご家族に及びますよ」

母は返事もせず、神園田から視線をそらして、ベランダのほうを見た。

神園田はさっさと玄關に向かうと、もう一人の男があわてたようにあとを追った。バタンとドアが閉まる音がして、二人の男の姿が消えた。

詩織は力が抜けたような気がしてイスにドスンと腰を下ろした。

「誰が作ったんだろ……」と母がつぶやいた。「お父さんのわけはない。だって、お父さんのパソコンは家にあるし」

すると詩織が言った。

「伊織かも……」

「だって、伊織は……」

「伊織、自分のパソコンで、一生懸命なんか作ってたの、死ぬ少し前」

詩織は和室に入ると、伊織のノートパソコンを持ってきた。

キッチンのテーブルの上に置き、電源を入れた。

立ち上がるまでに1分ほどかかり、その後、メーカーが自動的に立ち上がった。詩織は送信リストに切り替えた。やっぱりだと思った。

送信リストの一番上に、宛先が「kamisonoda-tomono」というメー

ルがあった。標題は「呪い」だった。

「お母さん、これ」と詩織は言う、その送信済みメールを開いた。

こんな本文だった。

《この呪いの動画を見たおまえは自分の行いを懺悔し、そして自ら死をもって償うのだ。》
それだけだった。

添付書類のアイコンをクリックした。するとさつき見たのとまったく同じ動画が再生された。

「どういうことなの？」と母は口を手で押さえた。

詩織が送信日時を見ると、7月3日になっていた。伊織が亡くなる3日前だ。

差出人は Gmail のアドレスで、「Jigoku-kara」となっていた。

「きつと伊織が生きているときに動画を作って、神園田さんに送ったんだと思う。お父さんの仕返しをしたかったんだよ」

「だったら、なんで、そのメールが、いまごろ？」と母は呆然として詩織を見た。

「わからない。メールの文章も違っていたし。なにがどうなってるんだろ……」

詩織はふと、さつきの神園田の言葉が気になった。

「お母さん、あの人が言ってた、『あの方』って？」

母は無意識にこしらえた両手のこぶしを見つめると言った。

「きつと、教祖様のことよ」

そのときまた玄関のチャイムが鳴った。

誰だろう？ 詩織はゆっくりと玄関に向かうと、ドアスコープをのぞいた。

向かいの家の鈴木さんのお母さんの姿が、魚眼レンズのせいでゆがんでいた。

午後6時、ケプラーハウスの食堂に、居残り組が集まった。

もう少ししたら、詩織と彼女の母親もやってくるはずだ。

点と点がつながり、いくつかの線分ができあがってきた。その線分が結びつき、大きな一本の線になるのも時間の問題だ。エミルはそんなふうに思っていた。

詩織からの電話で伊織の名をかたったメールの話聞き、そしてもとなった動画や

メールが西条君のノートパソコンにあったこと、神園田と思われる人へ送った形跡があることを知り、エミルは自分の直感は当たっていたと思った。

西条君はあの呪いの動画メールを父の失踪に対する抗議として誰かに送った。それは誰か。詩織の今朝の話から、西条君のお父さんの上司である神園田という人ではないかと考えていたのだ。

だが、いくつもの疑問が残っていた。その神園田に送った呪いの動画メールが、どうして代々木西原小学校の生徒たちのあいだに回ったのか。しかも、西条君が書いた本文にだれかが文章を付け足して……。そしてまた、こんどは神園田のメールアドレスを使って、本社の社員全員に呪いの動画メールが送られた。その文章もまた微妙に変えられていた。誰のしわざなのか？ なによりも妙なのは、7月3日に西条君が神園田に送ったはずのメールを、神園田は受け取っていないように思われることだった。この呪いの動画メールの存在を、神園田は今朝の一斉メールで初めて知ったようなのだ。

とすれば、西条君が送った「kamisonoda-tomono」というメールアドレスの持ち主はいったい誰なんだろう？

そして西条君のお父さんの行方は？

大澤さんのメールにあった「組織の不正」、そして「家族に及ぶ危険」とは？

さらには、神園田がお母さんに言ったという「あの方の怒りが家族に及びますよ」という言葉の意味とは？ ムーンチャイルド教団が西条君のお父さんの失踪にも関わっているというのだろうか？

いずれにしても、まったく無関係と思われていた西条君の事故死と麻里の家出が奇妙な形で結びついていったことに、エミルだけでなく、ケプラーハウスのだれもが不思議な感慨を抱いていた。

大テーブルでは、セーヌ川とアンジェリーナとカメさんがクロウリーについて話をしていた。

「ということは」とカメさんがセーヌ川にこう聞いた。「ルミさんや鈴木のお父さんに使われた呪術は、クロウリー流のものだど？」

「はい。ま、クロウリー流というよりは、イングラウンド・スタイルでしょうか」とセーヌ川が先が割れた大きなあごをゆっくりと二度たてに振った。「東洋のものと違うのは確かです」

アンジェリーナが言った。

「ちょっと気になったのは、ルミさんの見た幻想と、鈴木君のお父さんが見た幻想が、かなり違うタイプだなんてこと。ルミさんを攻撃したのは妖怪たちだった。でも、鈴木君のお父さんを攻撃したのは腐臭を放つ老婆のような人間だった。同じ人物による攻撃ではなく、別々の人物によるものと考えたほうがいいんじゃないかしら」

「なるほど」とカメさんがうなずき、ずり落ちた眼鏡を指でおしあげた。「つまり、教団には呪術を使える人物が少なくとも二人はいるということですね」

そのとき、廊下をやってくる2人分のスリッパの音が聞こえた。

案の定、ギーッと音を立てて開いた食堂の観音開きの扉から、高村兄弟の顔がのぞいた。「いやあ、突然来ちゃって、五人の男」と兄が言うと、「五人の男？」とアンジェリーナが繰り返した。

「いいの、気にしなくて」とエミルは言って、冷たいお茶を取りに調理室に入った。

高村兄弟は大テーブルの奥のほうにふたり並んで座ると、兄がカメさんに言った。

「鈴木のお姉さん、見つかってよかったっすね」

「ああ。彼氏と一緒にだったよ」

「彼氏、外国人なんすか？」

「ううん、お父さんが日本人で、お母さんがブラジル人」

そのとき、ピンポンというチャイムが鳴った。高村の弟がビククリして言った。

「チャイム、つけたんですか、玄関に？」

「そうよ。きょう、工事したの」とアンジェリーナが答えた。「最近、お客様が多いから」
調理室からエミルがあわてて飛び出してくると、食堂を出て行った。

すぐにエミルと一緒に詩織とその母が食堂にやって来た。二人は食堂に集まった面々を見て少し驚いたようすを見せ、それから深々とおじぎをした。

二人は入り口に近いほう、アンジェリーナの隣に座り、向かい側にカメさんとセーヌ川を見るかたちになった。

アンジェリーナも調理室に入ると、エミルと二人で全員分の冷たいハーブティーをテーブルに運んだ。

「鈴木さんからどれくらいお話を聞きましたか？」とお茶を置きながらエミルが聞いた。

「いろんなことを」と母は横の詩織を見た。

「今朝、エミルさんが話してくれた父のことも鈴木さんから聞きました。あと、麻里さんのことを教団より先にエミルさんのお友達が見つけたこととか、鈴木さんのご主人が不思議

議な夢を見て体調を悪くされたこととか」と詩織が言った。

「主人の一件があって以来、教団からは気持ちが悪く離れてしまっていましたので、鈴木さんもお嬢さんの件がきっかけで教団と縁を切ると決めたとお話ししてくれて、嬉しかったです」と母のほうが言った。

「じゃあ、ご主人を探してほしいと教団に依頼はしなかったんですね？」とカメさんが聞いた。

「はい。もちろんです。最初から、そんなこと、考えてもいません」

「それは神園田っていう人が原因だからですか？」とエミルが聞いた。

「ええ。神園田さんが主人をこんな目にあわせたんですから。それに、主人がいなくなつたその日から、一日何度も教団の人たちが電話をかけてきたり直接やって来たりして、主人の居所を知らないかと、それはもうあきれるほどしつこく聞かれたんですよ。外でも毎日見張ってましたよ、教団の人が、主人が帰ってくるんじゃないかって。教祖様が不思議な力を持っているなら、そんなことしなくて、居所ぐらいわかるはずじゃないじゃないですか」

「会社の人じゃなく、教団の人が探し回ったんですか？」とカメさんが不思議そうに聞いた。

た。

「ええ。神園田は会社の人間より教団の人間のほうが使いやすかったんじゃないですか。教団には専従の人も大勢いましたから。会社の人間だったら、仕事に差し支えるし。そう思ったんでしょ。それにしてもなんでまた、やめさせたくて追い出し部屋に入れたのに、やめたらやめたで探し回るんだろ」

「その神園田っていう人、教団の幹部なんですか？」

「いえ、とくに役職についているわけでもないんですが、古くからの信者でえらそうでした。教団の月の子どもたちの育成に関わっているという噂を聞いたことがあります」

「月の子どもたち？」と、みんなが一斉に同じ言葉を繰り返した。

「ムーンチャイルド……ですね」とエミルが言った。セー又川の顔がこわばった。

「はい、なんでも、教祖から選ばれた特別な子どもたちがいて、教団のなんかの行事に月の神々のために祈ったり踊ったりする子どもたちらしいです」

「見たことはありませんか？」とアンジェリーナが聞いた。

「いいえ。レベルの上の少数の人しかそういった行事には参加できないんです。ま、献金が多額な人っていう意味ですけど」と詩織の母は軽蔑するように唇をゆがめた。

すると、さっきから何かを言いたそうにもぞもぞしていた高村勇貴が口を開いた。

「あの、ぼくと同じ6年1組に神園田君という男子がいるんですけど」

「その子は神園田さんの息子さんよ。あなたも代々木西原中？」と詩織の母が勇貴に言った。

「はい」と答えた勇貴は何かを言いかけたが、思い直したように口を閉じ下を向いた。

「その神園田さんの息子さんと伊織君は友だちだったんですか？」とエミルが聞いた。

「同じ社宅にずっといましたからお互いよく知っていたはずですが、とりたてて仲良かったということはなかったと思います。やっぱり神園田は主人の上司ですから、家族ぐるみでつきあうということもありませんでしたし、そういうのは自然と子ども同士の付き合い合いにも、なんていいいますか、影響がありますし」

セー又川が詩織の母にこう聞いた。

「あのう、神園田さんのお子さまの誕生日はいつですか、わかりますか？」

「いえ」と母は怪訝そうな表情で首を振った。

すると勇貴が「家に帰るとわかります。5年の時のクラス文集にみんなの誕生日がのってるから」とセー又川に言った。

「では、あとで教えてくださいませんか？」とセーヌ川は勇貴に向かってニッコリほほ笑んだ。

「はい」と勇貴がうなずいた。兄がキョトンとしてセーヌ川と勇貴の顔のあいだを何度も視線を往復させた。

「そういえば、きょう、神園田君、学校休んでました」と勇貴がポツンと言った。

カメさん、セーヌ川、アンジェリーナ、エミルの4人は何かを確信したように顔を見合わせた。

CX5を無理やり追い抜いて前方に躍り出た3台の車が猛スピードで走りすぎたかと思ったら、50、60メートルほど距離をあけて急停車した。3台のクルマはすぐに横並びになると、黒々とした恐竜のようにして道をふさいだ。

「一難去ってまた一難！！　なんでこうなるの！！」と天道さんは叫びながらCX5を停めると、急バックさせた。タイヤが地面をこするキュルキュルという音が響き、数十メートル後退したところで天道さんはブレーキを踏んだ。うしろから迫ってくるクルマのヘッドライトが急激に車内に広がった。衝突を避けようと後ろの車も急ブレーキをかけた。

2台が黒塗りのSUVで1台が黒塗りの大型セダンだ。そこから大勢の男たちが降りてこちらに向かってくる。何人かは銃のようなものを手にしている。片側1車線の国道で時間は午後8時だ。反対車線の交通量も多く、ヘッドライトがまるで連なる電車のように途切れず、CX5を反対車線に乗り入れるのは自殺行為に思えた。とはいえ車の左側は海に面したがけだ。

「みんな、降りて後ろの車に助けてもらえ！！　逃げ！！　大澤君、みんなを頼む！！」
後部ドアを開けて、麻里とジルが降りて走り出すと、助手席から降りた大澤さんがドアをボタンと閉めてその二人を守るように追いかけた。

「ルミさん、あんたもだ！！」と天道さんが叫ぶと、「わたしは大丈夫。狙いは麻里さんよ。わたしのことを麻里さんだと勘違いして時間が稼げる」とルミさんが後部座席のドアを内側から閉めながら答えた。

天道さんは迫ってくる男たちを蹴散らそうと、C X 5を前後左右にめちやくちやくに動かした。キーキーキーというタイヤのきしむ音があたりいっぱいに響いた。

ルミさんはリアウィンドウ越しに麻里とジルの動きを見ていた。後ろの白いバンに二人が乗り込むと、大澤さんが運転手に何ごとかを一生懸命に説明した。すると、すぐにそのバンはUターンし、反対車線の車列にスルリともぐり込むと走り去った。

大澤さんがOKというように親指をたてながら駆け足で戻ってくるのが見えた。

「麻里さんたち、逃げたわ。もう大丈夫」と天道さんに向かって大声で言った。

「よし」と言うと、天道さんはC X 5を止めた。

クルマの横では戻ってきた大澤さんが男たちを空手の構えをして威嚇している。数人に足蹴りが命中し、頭や胸を押さえて倒れたが、多勢に無勢で、あつという間に4、5人の男たちにはがいにじめにされた。男たちはみなぼくシング用のフェースガードで顔を隠していた。

一人の男が銃をかざし、後ろのドアを開けると大声を上げた。見れば、別の男の持つ銃が大澤さんの頭に押しつけられている。

「天道さん、開けるわね」

「ルミさん、自分は麻里じゃねえと言っただよ」

ルミさんはうなずくとドアを開けた。

「降りろ」と男が言った。

後続の車列が鳴らすクラクションがあたりにこだましている。前のクルマが銃で脅されているなど、あたりが真っ暗なせいもあり、想像だにしていなはずだ。

ルミさんは車を降りると男にこう言った。

「わたしは鈴木麻里ではないわ。残念ね」

「鈴木ナントカには用がねえ。おまえが小山ルミか」

ルミさんは、意味がわからず、かすかに首をかしげた。

「小山ルミかと聞いているんだ」

ルミさんは反射的に小さくうなずいて、すぐにそれが軽率だったことを悟った。

黒い大型セダンが逆走してCX5にノーズを突きつけるように停車した。

男たちはルミさんをからだの左右から抱きかかえるようにした。やせっぽちのルミさんは軽々と持ち上げられ、黒のセダンの中に押し込められた。

ボタンとドアが閉まり、黒のセダンは反対車線に車体をバックさせて強引にUターンを

すると、SUVの横をすり抜けてまたたく間に走り去った。

天道さんは予想と違った男たちの行動に呆然とした。

銃を構えていた男は開けっ放しの後部ドアから天道さんの後頭部に銃の狙いをつけながらこう言った。

「警察には言うな。用が済んだら女は帰す。警察に連絡したら女はすぐに殺す。一輝にしたことの貸しを返してもらおう。意味はわかるな？」

「わからねえ」と天道さんが落ち着いた声で言い返した。

「わかるはずだ。女の超能力に用があるんだよ。だから女の役目が終わったら、無事に返してやる。オレたちがどんなにデカイ組織か、あんたにだってわかるだろう？ 警察の内部にだって仲間はある。警察沙汰にして女の命をみすみす無駄にするか、少しばかりオレたちのお手伝いをして女の命を助けるか。一輝の件ではあんたらに貸しがある。少しばかり返してもらってもいいんじゃないか」

「保証はどこにある」と天道さんはゆっくり振り返った。銃を手にした男の顔が、フェースガードに隠されてはいいたが、薄暗がりの中でもその鋭い目や薄い唇まではっきりと見えた。フェースガードの上のほうからは茶色に染めたモヒカンみたいな髪が飛び出してい

た。

「オレの言葉が保証だ」

「それじゃ意味がねえ。人質を寄こせ」

天道さんがそういうと、男はクツクツと笑った。

後続のクルマのクラクションの音がまるで怒鳴り声のようにしてどんどん増えていく。

モヒカンの男は何も答えず、黒のSUVのほうに走り去っていった。

大澤さんをはがいじめにしていた男たちは大澤さんを銃で脅しながら、CX5の後ろの座席にルミさんのかわりに押し込むとドアを閉め、銃を天道さんに向けたまま後ずさると、やがて背を向けて一目散に走り出し、SUVに乗りこんだ。2台は乱暴にクルマを方向転換させて、あっという間に走り去った。

あれは日産のムラーノだと、そしてルミさんが乗せられたのはベンツのCクラスだと、天道さんは脳裏にクルマのシルエットをしっかりと焼き付けた。

天道さんは「エミルたちに電話だ」と後ろの大澤さんに向かって叫ぶと、アクセルを踏み込んで急発進させ、2台のクルマを追った。

詩織と母が帰り、高村兄弟も家に戻り、セーヌ川とカメさんと安田と、そしてアンジェリーナとエミルの5人で夕食をとっていたときに、エミルのiPhoneが鳴った。

なぜか全員が嫌な予感がした。

エミルは電話に出てすぐに右手で口をおおうと、みるみる間に顔色が赤くなっていった。「わかりました。こちらで話し合ってみます。はい」

そう言っただけでエミルは電話を切った。

4人ははしを置いて、じっとエミルの顔を見た。

エミルは目を閉じた。

「ルミさんが、さらわれた」

全員が意味を飲み込まず、ポカンとした。

安田が「だれに？」と反射的に言った。

「組織に。一輝の仕返しだと」

アンジェリーナは両手で口をおおい、セーヌ川は頭をかかえてうつむき、カメさんは口を開けたまま固まった。

安田は「それ、へんだ。組織はルミさんのことは知らないはずだ」とつぶやいた。

エミルも「確かに」とつぶやいた。「ルミさんの超能力が必要だと言ったそうです。用が済んだら帰すと。そのかわり、警察に知らせたらすぐに殺すと」

アンジェリーナが「殺す」という言葉に反応して、震える息を飲んだ。

エミルは大澤さんの電話の内容を4人に、もう一度順を追って伝えた。

目をつむったアンジェリーナのまぶたは小刻みに震えていたし、カメさんの指もまた小刻みに震えていた。セーヌ川は頭をかかえてうつむいたまま微動だにせず、安田もまた腕組みをしたままじっとテーブルの上を見つめていた。

「警察に知らせるべきか、それともオレたちで解決すべきか……」

エミルは天を仰いだ。「あるいはリリーに聞くべきか……。でも、きつとリリーはこう言うわ。おまえが選びなさいって」

カメさんが、のどにタンが詰まったようなせき払いをしてから、こう言った。

「状況をもう一度整理しませんか。ぼくにはどうしても、いろんなことが引っかかる」

「わたくしも」とセーヌ川が顔を上げた。

カメさんはエミルを見つめてこう言った。

「すべての鍵は西条君のお父さんにあるんじゃないでしょうか」

カメさんは息をひとつとくと、こう続けた。

「さっき、西条君のお母さんの話を聞いていて、とっても不思議というか、不自然な感じがしたんです。それは、神園田っていう人が、執拗に西条君のお父さんの居所をつきとめようとしていることなんです」

「わたしもそう感じたわ」とアンジェリーナが言った。「西条君のお父さんは会社を辞めた。神園田がそうさせたかったのなら、どうしてやめた後も居所を探すのかって。しかも教団の人間を使って張り込みまでさせている。おかしいって思ったわ」

「そうなんです。ぼく、麻里さんが西条君のお父さんらしき人を見かけたという話をしたときにそばで聞いてたんで、よく覚えているんですが、彼女は確か、こんなふうな言い方をしたんです。西条家が越してきてすぐ、不審な男が近所をうろつくようになった。やがて、その男たちがいなくなると。西条君のお父さんと会うのは、その不審な男がうろつかなかなくなってしばらくしてからなんです。麻里さんは不審な男はみんな西条君のお父さん

と思っっているようですが、始めの頃の不審な男はスーツ姿で、西条家の場所を聞いてきた男性、つまり西条君のお父さんはポロシャツ姿でした」

「つまり、スーツを着た不審な男というのは、西条君のお父さんが帰ってないか見張っている教団の人間だったということね」とアンジェリーナが言った。

「そうです。結論からいうと、さっきもアンジーが言ったように、なぜ、そこまでして教団は西条君のお父さんの行方に関心があるのか……」

そうカメさんが言うと、エミルの瞳がきらめいた。

「高村のお父さんが来て教団の脱税について教えてくれたでしょ。あの日、オレ、言葉がわからないので聞き返したから、ものすごく印象に残っているんだけど、たれ込みがあったって言ったの。わたしが、たれ込みってなんですかって聞いたたら、内部告発って教えてくれた。つまり、そう、そういうことなんだ」

「その内部告発者とは西条君のお父さんだったと」とカメさんがかみしめるように言うとエミルは大きくうなずいた。

「なるほどね」とアンジェリーナが顔を上げた。「西条君のお父さんは内部告発したのが自分だと発覚したので逃亡した。しかも、ここが大事だと思うんだけど、西条君のお父さ

んは他にも教団の秘密を握っている。それが社会に知られたら脱税よりもっと困るような秘密を。だから、教団は血なまこになって西条君のお父さんを探しているんだわ」

「それだと大澤君のメールの中身とつじつまが合いますね」とカメさんはアンジェリーナを見てこう続けた。「大澤君はメールで、告発した不正の内容は迷惑が及ぶので家族には話していいかと西条君のお父さんが言っていたと書いてます。ということは、西条君のお母さんや詩織さんが言っているサービス残業への抗議というのは、失踪の直接の原因ではないということになる。つまり、脱税の内部告発こそが失踪の理由であり、しかも命の危険があるということは、他にも知っている秘密もろとも自分が消される可能性がある」と、西条君のお父さんが恐れているからです。だからこそ、必死に逃走しているんじゃないでしょうか、家族を置き去りにまでして……」

全員がカメさんを見つめ、まるで舞台の幕が上がリ、舞台の書き割りがいま初めて観客の目にあらわにされたような、そんな気持ちにうたれていた。

エミルが口を開いた。「西条君のお父さんが秘密を暴露しそうになったから追い出し部屋に入れられたのか、それとも追い出し部屋に入れられた怒りから内部告発したのか。それはどちらかはわからないけど、でも、西条君のお父さんが教団にとっていまは何よりも

危険な存在になってしまったということですね……」

セーヌ川が言った。「ルミさんの誘拐も西条君のお父さんに関係がありますと思います。ルミさんの超能力に用があると組織の人間は言った。たぶん、西条君のお父さんを探すのに使いたいのではないですか？」

「そ、そうなんです。ぼくもそれが言いたかった」とカメさんが大きくうなずいた。

「間違いないわ」とアンジェリーナがグユッとこぶしを作った。「だって、組織の連中はわたしたちが何者か知らないはず。ルミさんが不思議な力を持っていることなんて、なおさら。鈴木は一切このことについては誰にも話していないはずだし、裁判でも、報道でも出ていない。ということは——」

カメさんがその続きを言葉にした。「教祖です」

全員がうなずいた。カメさんが言った。

「麻里さんを連れに来た仙台で、教祖はルミさんの能力を間近にして驚愕した。おそらく、麻里さんを探し出したのもルミさんの超能力に違いないと考えたはずです。それで組織に依頼してルミさんを誘拐した。鈴木君への報復を装って」

「ところが連中はやっぱりドジ」とアンジェリーナがニヤリとした。「ルミさんの超能力

に用があるなんて言わなきゃいいのに」

「それにしても、組織を雇うのにとれくらいいのお金を使ったんだろ？」とカメさんが首をひねった。「しかも、教団が組織にパイプを持っていたなんて……」

だまって聞いていた安田がポツンと言った。

「それなら、二人とも、確実に命が危ない……。ルミさんはセー又川さんのような遠隔透視は苦手だし、西条君のお父さんを見つけ出せなかったら、ルミさんは用済みになる。だからといって生きたまま帰してくれるような連中じゃねえ。西条君のお父さんだって、見つかればすぐに殺されてしまうんじゃない？」

全員が口を固くつぐんだ。

エミルがセー又川に向かってこう聞いた。

「ルミさんと会話はできますか？ 非物質的にと言う意味ですが」

「トライしてみたことはありませんが、トライする価値はあります」

「それと、西条君のお父さんの居所も」

「がんばりましょう」

「セー又川さんとルミさんがコミュニケーションできるかどうかにかに、すべてがかかっている

るわ」

そう言っただけで、エミルは大きく息をひとつとつくとこう言った。

「あとは教祖様にお願いをしてみましよう。ルミさんを探してくださいって」

「えっ!？」とアンジェリーナが素っ頓狂な声を上げた。みんなは目を丸くしてエミルの顔を見つめた。

32

麻里とジルの二人と待ち合わせた石巻駅に到着するまで、天道さんは一言も言葉を発しなかった。

後ろの席で、大澤さんがエミルに電話をし、そしてジルに電話をし、またエミルに報告をしているあいだも、天道さんは電話の内容を問うわけでもなく、まっすぐ前を向いたきり、黙々とハンドルを握り続けた。

ルミさんたちを誘拐した連中の3台の車に追いつくことはついにできなかった。

連中の逃走はとっても組織的に計画が練られていた。1 kmほど追いかけたところで、うしろのほうから6台の暴走族らしきオートバイがやって来たかと思うとまたたく間にCX5を追いこし、正面に躍り出た。

タンDEMシートの上しろに乗った男どもが運転席の天道さんに向けて中指を立てたり、意味のわからない罵声を浴びせたりしながらスピードを落として追走を邪魔したのだった。何度もクラクションを鳴らし、オートバイに接触しそうなほどおおっても、逆にタンDEMシートにまたがった男どもがCX5のボンネットを叩くなどするので、事故の危険のほうが高まった。

暴走族たちはいつの間にか横道にそれて姿を消したが、あの3台の黒のクルマももちろんその姿はもう見えなかった。

CX5が石巻駅のロータリーに入ると、白い三角屋根の駅舎の中から麻里とジルが飛ぶように駆けてきた。ルミさんが誘拐されたことはすでに知らせていた。

後部ドアを開けて大澤さんがいったん降りると、かわりに麻里とジルが乗りこんだ。大澤さんは助手席に乗りこんだ。

「大丈夫だったかい？」

天道さんがようやく言葉を発した。

「はい」と二人そろって、そして力なく答えた。

「宮城にいては危険だ。とりあえず、二人ともわたしらと一緒に東京に帰ろう。家に帰るのがイヤなら、わたしらのシェアハウスに泊まればいい。空き部屋がいくつかあるから」

「はい、そうさせていただきます」とジルが返事をする、「そうしたほうがいいって、二人で話してました」と麻里が言った。

CX5はそれから仙台の梅田ハウスに向かい、そこで二人の荷物をトランクに積みこむと、東京を目指した。

時間は午後10時を過ぎ、東京に着くのは明け方になるなど天道さんは思った。

「大澤君」と天道さんは東北自動車道に入ると前方を向いたままこう聞いた。「エミルはなんて言っていた？」

「組織が単独でしたものではなく、ムーンチャイルド教団の教祖が金で依頼した誘拐だろうという見方をしているようです」と、大澤さんはエミルたちの考えを簡潔に天道さんに伝えていった。

天道さんはしばらく無言のままだったが、「とにかく、いまできることは一刻も早く東

京に帰り着くことだな。大澤君、眠っていいぞ。疲れたろ」と言って助手席の大澤君にチラリと視線を投げた。

「いえ、ぼくも起きてます」

「いや、寝てくれ。もしかすると、セーヌ川君ではなく、キミのほうにルミさんからのメッセージが届くかもしれない。オレは大丈夫だ。だてに修行はしておらん」

「はい、わかりました」

そう言うと、大澤さんは前方を見すえたままお腹のうえで両手を組み合わせ、何度か深呼吸をして、それから目を閉じた。

天道さんがバックミラーを見ると、麻里はジルの肩にもたれてすでに眠りに落ち、ジルはぼんやりと窓の外の暗闇を見つめていた。

3台の車はきつと東京へ向かったはずだ。サービスエリアごとに駐車場を確認しようと天道さんは考えた。連中だって休息は必要なはずだ。

中央分離帯の丸い反射鏡がヘッドライトで次々にオレンジに輝いたかと思うと、すぐに輝度を落としてうしろに飛びすさっていく。ルミさんもいま同じ光景を見ているだろうか。と天道さんは思った。

エミルが高村兄弟の家に電話をし、兄弟の父親に状況を説明し、計画を打ち明けると、父親は5分後にはけなおしますと電話を切った。

大テーブルの上では、勇貴が家に戻ってから電話で教えてくれた神園田の息子の誕生日から作ったホロスコープを、カメさんが腕組みをして見ていた。

安田は携帯電話のディスプレイをさっきからじっとにらんでいる。

セーヌ川は自室にこもった。まずはルミさんとのコミュニケーションの確立が先だった。アンジェリーナは目を閉じ、何かを一心に考えている。

エミルのiPhoneが震えた。高村の父だった。

「編集長がつかまりました。ちょうど青山で飲んでいたところでしたから、10分か15分でそちらに着くそうです。わたしもこれから自転車で向かいます。では」

「ありがとうございます」

エミルは電話を切ると、フーツと大きく息を吐き、それからホロスコープを見つめるカメさんにこう言った。

「そのホロスコープ、怖くないですか？」

「うん。もちろんパラケルススのようなことじゃないけど、クロウリーが『ムーンチャイルド』に書いたようなことを試そうとしたのは間違いないでしょ」とカメさんが返事をすると、アンジェリーナがつむっていた目を開けた。

「確実に生まれる時間まで分単位でコントロールしていたと思うの。そうでなければ、努力が水の泡だから。ということは、産婦人科の医者とか、そういう人たちもこのムーンチャイルド誕生には関わっていたということでしょ。相当深いわ、教団の闇は」

「戦闘的な火星が神秘の海王星にびたりと重なるのは、心靈能力の持ち主たる証し。おまけにオカルトの象徴たる天王星とともに死と再生の8室にこれら3つの惑星がとどまる。しかも神秘主義的探求者の証しとなる、太陽と海王星のつくり出す90度のアスペクト。まさにこれぞ強烈なサイキックの力の持ち主という惑星配置。こうなるのは2001年11月6日午後6時30分の前後10分に東京で生まれた者のみ。神園田智也、ムーンチャイルドのひとり。恐るべし」とカメさんはディスプレイから視線をあげずにひとりごとのようにつ

ぶやいた。

「さっきから、呪いの動画のことを考えてたの」と、アンジェリーナが自分の指に視線を落としながら話し始めた。

「作った動画を父親の失踪への怒りの表明として送ったのは西条君。ここまでは確か。でも、西条君は神園田に送ったはずなのに、実際は神園田には届いていなかった。西条君が送ったのは、神園田の名前をアットマークの前につけたGメールのアドレスで、会社のものじゃなかった。神園田が今日初めて呪いの動画メールの存在を知ったことから、彼が受け取っていなかったのは明らかだし、ひいてはGメールのアドレスも彼のものではなかったということになる。じゃ、このGメールのアドレスは誰が作ったのか」

アンジェリーナは両手をギュッと組み合わせた。

「それは神園田智也しかない。これはあくまでも推測だけど、西条君は父親の失踪という出来事への悲しみと怒りのあまり、神園田智也を脅したんじゃないかしら。君の父親のメアドを教えろ、さもなければ、ってね。神園田智也は父親のアドレスを知らなかったか、あるいは知っていても自分が教えたということが父親にバレるのがこわくて、それでGメールでそれらしいアドレスを作り、脅された翌日かなんかに西条くんに教えた。西条君

はそれを神園田のメアドだと信じて呪いの動画メールを送った。誰が送ったのかわからないようにして」

エミルがこうアンジェリーナにきいた。

「代々木西原小学校の子に呪いの動画メールを送ったのも神園田智也？」

すると安田が携帯のディスプレイから顔を上げてこう言った。「さっき、勇貴が帰りしなにボソツと言ってたけど、神園田君は4年生ぐらいまでいじめられっ子だったって。だから、ついでっつーか、自分の復讐のために利用したってことも考えられね？」

アンジェリーナが「そうね」とうなずいた。「勇貴くんが言っていた自爆死者ナントカっていうアドレス……」

「自爆死者探索救助隊」とエミルが答えた。

「そう、それが神園田智也だとしたら、最初に送ったのが乱暴者のヨシなんとか君でしょ」

「吉家君」とまたエミルが補完した。

「ようするに、自分のつくったGメールアドレスに届いた西条君のメールの添付動画を神園田智也は見た。おそらく不気味だから最初の数秒を見ただけでやめたかもしれない。そしてふと意地悪な考えをいだいた。これを呪いの動画のチェーンメールに仕立て上げて、

かつて自分をいじめた吉家君に送ってやれと。それで、文章を付け足して、送った」

「まさしく、その通りでしょうね。自爆死者探索救助隊という言葉も、サイキックな能力のある神園田智也らしいとも言えますね」とカメさんがなんともうなずいた。

「すべては西条君のお父さんへ、そしてムーンチャイルド教団へと収れんしていく、ってわけね」とアンジェリーナは言うのと、大きなため息を一つついた。

するとエミルがアンジェリーナにこう聞いた。

「西条君の事故死と神園田智也は関係があるかしら？」

アンジェリーナは首を振った。「そこまでは、まだ……。きつと神園田智也本人しか知らないことなのかもしれない」

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

セーヌ川の瞑想の邪魔にならないよう、エミルはなるべく音を立てずに小走りに玄関に向かった。ドアを開けると、ハンカチタオルで汗を拭きながら、Tシャツ1枚の高村の父が立っていた。そのうしろには同年くらい歳の白っぽいジャケットを着た男性も一緒にいた。

「編集長です。いま、そこでばったり」と高村の父が言った。

「突然、申し訳ございません」とエミルは深々と頭を下げた。「どうぞ、お入りください」二人を従えてエミルは食堂へと向かった。

食堂のドアを開けると、みんながいつせいに顔を上げてこちらを向いた。高村の父と編集長がおじぎをすると、みんなも静かに頭を下げた。

大テーブルの端にいる安田がエミルに向かって小さく親指を立てた。もう一人の客がじきにここに到着するのだ。

みんなは編集長と言うから、もっと年配の恰幅がいい男性を想像していたが、その血色のいい顔色やしなやかな物腰はまだ4代にしか見えない若々しさだった。

高村の父がこう言って紹介した。

「週刊未来の大島です。実はぼくの大学の同級生、というか、同じサークルの仲間だったんですよ。だから、なんでもぼくのいうことを聞く」

「おいおい」と編集長は苦笑いをして、みなを一人ずつ見まわして目であいさつを送った。二人は椅子に腰かけると、エミルの顔を見た。

「大島さんに正直にすべてをお話しします。そのうえで、ご協力いただけるかどうか、お返事をいただきたいんです」

編集長はコクリとうなずいた。「わかりました」

それから、ときおりアンジェリーナが補足をしながら、これまでの経緯を簡潔にエミルが説明をした。そして最後に、ルミさんと西条君のお父さんの命がいま危険にさらされていることを。ただし、自分たちが持つ超自然的な能力については、エミルはほとんど触れないか、触れたとしても控え目だった。

「それで、ルミさんと西条君のお父さんの二人を無事に救い出すには、大きなお芝居を打つしか方法はないと思っただんです。そうでなければ、きっと二人とも殺されてしまう」

編集長はうなずくとこう言った。

「高村からは歴史的なスクープになるはずだと聞きました。ただ、その芝居の役者を我々が務めるというのは報道に携わる者としては……」

その時、また玄関のチャイムが鳴った。

安田が反射的に席を立ち、「オレが出る」と言っただけで玄関に向かった。

編集長は話を続けた。

「つまり、報道に携わる者は客観的な立場でいることが必要なわけですから、高村の父が編集長の腕をひじで小突くところ言った。」

「大島、カワイイお嬢さんがたの前だからって、きれいな事はよせ。『主観も客観もねえ、売れてナンボだ』と去年の忘年会で言ったのはおまえんとこの社長だけ」

「だから、オレは社長が大嫌いなんだよ」

高村の父はおかしそうにクツクツと笑うと、「こういうまじめなヤツなんですよ、大島は」とみんなに言った。「だからこそ信用できる」

すると食堂のドアがギーッと開いた。

安田が姿を現し、そのうしろから大柄で天道さんのようなスキンヘッドの下にゴツゴツした顔の中年の男が現れた。スーツの上着のえりを左手で持ってぶら下げ、右手に持った扇子で顔をあおいでいた。

安田が言った。「警視庁の安斉警部です」

スキンヘッドの男は「安斉です」とドスのきいた声で言うと、軽く頭を下げた。

「警部？」と編集長は顔をしかめた。

それに気づいたのか、安斉は安田のすすめる椅子に座りながら、こう言い足した。「ここには私人の安斉として参りました。翔一君のお父さんから、彼が困ったときには全力で助けるようにと言われております。翔一君のお父さんは、わたしの生涯の恩人ですから」

安田が唇をかんでうつむいた。

「安田、お茶」とエミルが言うと、安田は調理室に姿を消した。

「大島さん、さっきお話ししたことをそっくりもう一度安斉さんにお話しします。ごめんなさい」

エミルは編集長にそう言って頭を下げた。編集長は苦笑いをして「かまいませんよ」と返事をした。

エミルは再び、西条君のお父さんが失踪した時点から話を始めた。

安田がお茶の入ったたくさんのグラスをトレイの上で危なっかしげにゆらゆら揺らせながら戻ってきた。

これでいくつめのサーブスエリアになるだろう。天道さんは福島のアダチ太良サーブスエリアにCX5をゆっくりと乗り入れた。周囲の背の高い水銀灯に青白く照らされた広大な

駐車スペース。深夜だというのに、ほとんど車で埋まっていた。

天道さんは一生懸命に目をこらして、あの3台のクルマを探しながら駐車スペースを横断した。すると、なんと、駐車場のまん中あたりに、連中が乗っていたSUVと同じ黒のムラーノが2台、仲よく並んで停まっているのを発見したのだ。

「ようやく見つけたぞ」と天道さんはひとりつぶやくと、Uターンをしてもう一度用心深くその前を通り過ぎ、入り口近くにCX5を停めた。

ギョッとサイドブレーキを引くと、助手席の大澤さんがパチリと目を開けた。うしろの麻里とジルも目をさましたようで、ゴソゴソと体を動かしした。

「偵察してくる」と言っ、天道さんはiPhoneをつかんで車を降りた。

さっき見つけた2台のムラーノの前まで歩いて向かった。

間違いない、このクルマだ。天道さんは確信した。

車内は真っ暗で誰も乗っていない。のぞきこむと、ぼくシング用のフェースガードが無造作に座席の上に置いてあった。

周囲を見まわす。だが、ルミさんに乗せたあの黒のベンツの姿はなかった。

お偉方は一刻も早く東京へご帰還、下っ端の兵隊たちだけがサービスイリアで御休息っ

てわけかと天道さんは思った。

もう一度、ムラーノの後ろに回ってみると、2台ともにトレーラーを引っばるために取り付けられたバンパーのような形のヒッチメンバーが見えた。まさかロープで縛った人間を引っ張り回すためではないだろうが、いったい何を牽引するためだろうかと天道さんは思った。その頑丈そうなヒッチメンバーを見て、あることを思いついた。

とりあえず、iPhoneのマイクに向かって数字を読み上げ、音声メモに2台のナンバーを記録した。

次に、レストランや売店が入っている、明かりがこうこうと輝く大きな建物へと、天道さんはゆっくりと向かった。たくさんのガヤ羽虫があたりを飛び回っていた。

連なる大きなガラス窓から中の様子がよく見えた。深夜でレストランは営業をしていないが、そばやカレーやラーメンなどを出すカフェテリア形式のスナックコーナーには人だかりがあった。

天道さんは注意深く建物に近づくと、ガラス越しに中を見た。

スナックコーナーの前に広がるたくさんのテーブル席には、深夜にもかかわらず、大勢の客がいてにぎわっていた。

そのたくさんの人間たちを隠れみのにしているつもりなのか、一番奥で固まっている男たちの一団があった。彼らは黙々とドンブリや皿と格闘していて、酒を飲んでいる者もいた。そのうちのひとり、茶髪のモヒカン型の頭をしている。自分に銃をつきつけたあの男に違いないと天道さんは思った。男はチラチラと用心深く周囲に視線を投げかけながら、すでに食事を終えてしまったのか、ビールのようなものが入ったグラスを口もとに持っていった。

天道さんはC X 5にとって返すと、トランクを開け、非常時の牽引用金属製ワイヤーを取り出し、2台のムラーノのところまで監視カメラに写らないよう腰をかがめながら小走りで行った。

連中はまだスナックコーナーで食事をしている。少なくともあと5分は出てこないだろうが、作業を終えるには1分もあれば十分だ。

天道さんはムラーノのうしろに回り込むと、ワイヤーの片端を1台のムラーノのヒッチメンバーにしっかりと結わえ付け、それからそのワイヤーのもう片方のはしをもう1台のヒッチメンバーにこれまた堅く結わえ付けた。これで2台のクルマの後部をワイヤーで連結したような形になった。2台のクルマの間を人が通ってもワイヤーに引っかかることが

ないように、ワイヤーにはめいっばいのたるみをつけて地面にはわせ、念には念を入れた。これで気づかれることはないだろう。

天道さんはまた腰をかめながらCX5まで引き返すと、連中の2台のムラーノがよく見える角度のところまで、車を移動させた。距離は100メートルほど離れている。こちらが気づかれては元も子もない。

10分ほどして、サービスイリアの建物から連中がひとかたまりになって出てきた。人数を数えると8人だった。

連中はボタンボタンとドアの音を派手に響かせ、それぞれのムラーノに乗りこんだ。

天道さんが助手席の大澤さんに、フロントウィンドウの斜め右を指さしてこう言った。

「大澤君、あのクルマを見ていろよ、ハリウッド映画並みのスペクタクルだぞ」

大澤さんはいったい何が起きるのかと、身を乗り出した。

エンジン音が聞こえ、最初のムラーノが走り出し、駐車スペースから車路に出てスピードをあげたその瞬間、ガシャーン、ドスン、ガシャーンとものすごい音がいくつも響きわたり、周囲の何台ものクルマがまるで眠りを起こされて腹を立てたかのようにアチコチに動いて向きを変えた。1台目のムラーノはタイヤのきしむ音を盛大に響かせて、何かに

引っぱられるようにして急停止した。

「やった」と天道さんは小さくガッツポーズをした。麻里とジルもこの光景を見ていたように、
「ええー！」と素っ頓狂な声を上げた。

「さ、連中が犯人捜しを始める前に逃げちまおう」と言うが早いかな、天道さんはエンジンを入れると、そろそろとCX5を発進させた。

レストラン側ではなく、反対側のガソリンスタンドよりの車路を通ったので、2台のムラーノの悲惨なありさまを後ろ側から見るようになった。

手前側のムラーノはほぼ180度回転して、ヘッドライトが割れ、派手につぶれたノーズをこちらがわに向けていたし、周囲のクルマのボディもヘコんだり、サイドミラーがはずれたりしていた。車路に乗り出している1台目のムラーノは、見た目は無傷だが、すでにたくさんの野次馬に取り囲れていた。携帯電話で撮影している者もいたし、何ごとか大声を上げている者もいたし、「警察だ、警察だ」と叫んでいる者もいた。きつと、とぼちちりを受けた周囲の車の持ち主だろう。

天道さんは「すまん」と頭を下げた。

CX5を東北自動車道に乗り入れると、天道さんはアクセルを踏み込んだ。

「ヤツらの車にマーキングしてやったぜ」と、天道さんは低い声で言った。

「でもそれ以前に、あれじゃあ、警察のお世話になるんじゃないですかね。あいつら、銃が見つかったら、それこそたいへんですよ。ああ、ずっと見物していたかった」と大澤さんが言うと、天道さんがおかしそうに大澤さんの右腕を左肘でこづいた。

そのとき大澤さんのiPhoneが振動した。エミルからだ。

「もしもし」

大澤さんは、おおよその現在位置を告げ、サービスエリアでの出来事を告げた。それから、エミルからの報告を受けると、「じゃ、おやすみなさい」と電話を切った。

「芝居の打ち合わせは無事終わったそうです」

「そうか」と天道さんがうなずいた。

「それから、教団はやっぱりムーンチャイルドを作ろうとしたか、あるいはすでに作り出したかもしれないと」

「ホモンクルスカ……」と天道さんがつぶやいた。「ルミさんを攻撃したのは、その子どもか」

「おそらく」

ふたりはクルマに向かって前方から次々と押し寄せる夜の闇をじっと見つめた。
天道さんが言った。

「目だけでもつぶってな、疲れないように」

天道さんはバックミラーに視線を向けると、「ジル君も、寝てな」と小さな声で言った。
単調なエンジン音だけがかすかに響く車内に、ふたたび静けさが満ちた。

2本のヘッドライトの光が前方のアスファルトや標識をたぐり寄せては、後ろに投げ捨てるかのように視界から消えていく。「郡山 出口」という文字も緑色に輝いたかと思うと、あっという間にうしろに流れ去っていった。

35

午前2時。

眠くないのは、学校を休んだ日中、たっぷり寝たせいだった。

夕方に目がさめてから、ずっと起きている。

父親が帰ってきた気配はなかった。どんなに遅くなくても外泊などしない父親だったから、珍しいなと智也は思った。

エアコンのサーツツというかすかな音を聴きながら、智也は蒲団の上に仰向けに横たわっていた。

眠くないのには、今朝、初めて味わったとてつもない恐怖のせいもあったかもしれない。

黄金の夜明けの儀式の後、そう、朝の6時ごろだった。母親が名前を書いた1枚の紙と、携帯電話で撮られたような写真をプリントアウトした紙を智也に渡した。

また攻撃の練習かと智也はうんざりした。

名前は女の人で、写真には短い髪をした大きな目の女性が写っていた。家のリビングルームのようなところでふいに撮られたもののように、暗く青白い写真だった。笑顔はなく、何かに挑むような表情だった。

智也は両親の寝室に連れて行かれると、ベッドの上に仰向けに横たわるように言われた。映画やドラマを見ると、大方の家ではベッドは壁際に置かれるもののようになのに、両親の寝室ではベッドは部屋の中央に置かれている。それが智也にはいつも妙に感じられた。

小さな祭壇のようなものが部屋の片側、ベッドの頭の方におかれている。△と▽を組み合わせた六芒星の刺しゅうがほどこされた布でおおわれた祭壇の上には、月刀（げつとう）と呼ばれる薄い三日月の形をした、銀色に輝く短刀がおかれている。

その祭壇の両脇に大人の背丈ほどの白い円柱と黒い円柱が立っている。なんのためか智也にはわからない。

部屋の四方の壁には、それぞれ模様が違うペナントのようなものが飾ってある。一度、母親に聞いたことがあるが、これは四大（しだい）といって風、火、土、水を表しているのだと教えてくれた。

祭壇には陶器の香炉が置かれ、母がそこでお香を焚いた。智也はその香りがとても好きだった。この香りをかぐと、反射的に智也のからだから力が抜け、リラックスできるのだ。母親の指示に従って目を閉じ、まずはゆっくりとした呼吸を繰り返した。

しばらくすると母親はこう言った。この名前とこの写真の女の人を強く心の中で結びつけて、それからこの女の人を生き生きと想像しなさい。

智也は目を開けると、母親がさっきの2枚の紙を智也に見せた。智也は名前と女性の顔を記憶する。それからまた目を閉じ、ゆっくりとした呼吸を繰り返す。

すると、胸のあたりを走るくすぐったいような感覚とともに頭の中に闇が、いや正確には頭の中からつながっているどこか知らない別の空間の闇が見えてくる。

その闇には言葉では言い表せない独特な臭いがある。その臭いがすれば、第一段階がうまくいったという証拠だった。

その闇の中に智也は、さっきの女性のイメージを描いていく。半分眠っているようで、半分起きているような、そんな意識状態の中で、すべては進んでいくのだ。

グーンと世界が回転するような気分がして、その闇の世界の中にさっきの女性がリアルな姿で存在し始めた。

母親の声がある。それが記憶に残るか、残らないかの違いだけで、おそらく、一定のタイミングで母親は自分に何かを語り続けているのだ。

その母親の声がこう指示した。

その女性の周囲に化け物たちが住む森を作りなさい。その女性の足もとに恐ろしい底なし沼を作りなさい。

智也は言われるがままに、自分の知る限りのイメージを使って、恐怖の世界のイメージを織り込んでいく。

母親が耳元でささやくように言った。

もっとも恐ろしい化け物を作りあげ、その女を殺してしまいなさい。

智也は想像できる限りの恐ろしい生物を何匹も作りあげ、その女性に向かって放った。

だが、母親の「殺してしまいなさい」という言葉には強い拒否反応をおぼえた。

女性は沼のまん中で泥の中からだを引きずり込まれ、怪物たちの威嚇にしきりに手を振りまわして抵抗していた。だが、抵抗しようとかからだを動かせば動かすほど、女性は底なし沼に引き込まれていった。

まるで一進一退のゲームのようだった。

それがどのくらいの時間続いただろうか。

智也はいつも思う。この怪物たちは自分がつくったものなのか、それとも自分が呼び寄せたものなのか。呼び寄せたのだとしたら、この怪物が実在する異世界があるということにならないか、と。

すると突然、智也がこれまで経験したことのないような出来事が起こったのだ。

悪臭が漂い、智也は異世界でむせた。いままでかいだどんな臭いよりも耐えられない、ひどい臭いだった。智也の意識がその臭いの激しさによって少しだけ目覚めに傾いた。

底なし沼はなくなった。

かわりに美しい池が目の前に広がり、その池の中から巨大な竜が水しぶきとともに飛び出してきた。その竜のからだは緑色の苔でおおわれ、その目は赤く燃えているようだった。自分が作り出したものではない存在が突如現れ出したことで、智也のからだは恐怖で震えだした。

世界が何者かの手によって、まるでバグに侵されたゲームプログラムのようにガラガラと崩れていった。それとともに智也のからだの震えはさらに激しさを増し、智也の意識は急速に目覚めへと引き戻されていった。

吐き気がした。

眉間に強い不快感が宿り、吐き気はさらに強さを増した。そして吐いた。少量の吐瀉物を智也は口のまわりに嘔き出した。

目を開けると母親が驚いた表情で智也を見おろしていた。

どうしたの、なにがあったのと叫ぶ母親の手には、鈍く輝く月刀が握られていた。

恐怖心はさらに膨張して智也のからだをベッドに縛りつけ、眉間の不快感は激しい頭痛へと変わった。

そして学校を休んだ。

きのう拡散した呪いの動画メールの効果を、父親がいないので確かめられないのが、少し残念だった。父親が帰ってこない理由が、あのメールのせいだとしたら、なんて気分がいいんだろう。

自分の父親が、友人の父親よりも何倍も何十倍も卑劣な人間だと知ることが、こんなに悲しくて、こんなに憎しみをかきたてるものだったとは、智也はついこの間まで思いもしなかった。

36

途切れ途切れの眠りを繰り返したまま朝の6時を迎え、エミルはTシャツとジーンズに着替えて食堂に行った。調理室でガチャガチャと音がする。村松さんがみんなの分の朝食

の準備をしているのだ。

調理室のドアを開け、中に顔だけ入れて村松さんに「おはようございます」とあいさつを言う。村松さんは手を休めず、こちらに背中を向けたまま「うん」とだけ返事をする。

そのとき、玄関のあたりから人の声が聞こえてきた。天道さんたちだとエミルは思った。食堂の観音扉を開けたエミルに、天道さんと大澤さんの背後でスリッパにはきかえているもう二つの姿が見えた。初めて見る麻里とジルだ。

麻里は小柄だがすらりとし、ジルはひよろひよろと長身で、おかっぱのような長髪をしきりに手でかきあげている。

エミルが廊下を小走りで玄関に向かい、「お帰りなさい」と4人の前に立つと、天道さんがいきなりからだを45度に折り曲げ、「すまん、まことにすまん」とあやまるのを、エミルが「天道さんの責任じゃないから、あやまらないで」と押しとどめた。

大澤さんも両手にバッグをぶらさげて、天道さんの横でうなだれている。よく見れば片方のバッグはルミさんのオレンジ色のポストンバッグだった。

「おなか、すいてませんか？」とエミルがたずねると、「いや、途中でみんな、サンドイッチを食べたから」と天道さんがこたえた。

「高村のお父さんやみなさんが9時にいらっしやいます。そこで、もう一度、お話をして、計画を実行するということになっています。それまで、休んでください。オレが、起きますから」

「エミル、学校は？」

「オレとアンジー、ズル休みです。きょうは、特別だから」

「じゃ、悪いが、少し休ませてもらうよ」

そう言って天道さんは「大澤君もな」と横に立っている大澤君を見て、それからうしろを振り向いて二人に目をやると、「エミル、麻里さんとジル君の部屋も用意してあげてくれないかな」と言った。

「もう、準備できてます」とエミルは言う、「どうぞ、こちらへ」と麻里とジルに向かって廊下の奥のほうを手の平を上にして指し示した。

天道さんと大澤さんは荷物を持って2階へ上がり、麻里とジルは階段の横のゲスト部屋に通された。

「二人一緒の部屋でゴメンなさい」とエミルが言う、「いえ」と麻里が少しはにかんだように答えた。

大澤さんから受け取ったルミさんのポストンバッグを持ってエミルは食堂へと戻った。

村松さんがちょうど大きなボールにたわわに盛り合わせたサラダを大テーブルの中央に置くところだった。

「味噌汁とご飯と、それから日本一おいしい海苔と、えーと、あと、油で揚げていない大豆ミートの唐揚げもサービスで作っておいだから。あの若いお客さんの分も。調理台の上にあるからね」

そう言って自分の分だけを盛りつけたトレイを両手で持ち上げると、村松さんが食堂から自分の部屋、というよりも研究室に戻りに食堂の観音扉を背中で押し開けて出ていこうとした。

エミルが「ありがとうございます」と頭をちょこんと下げると、「あ、そういえば」と村松さんは観音扉を背中で押したまま、何かを思い出したようにエミルを見た。

「あのね、わたしね、昔、リリーから聞いたんだけど、トンネルみたいな筒をつくってね、A地点からB地点までエーテル体を移動させることができるそうだ。うん、だから、リリーがそのトンネルになるわけ。A地点からB地点までのね。そこを幽体が通っていく」

それだけを言うと村松さんは食堂から出て行った。

なんの話だろうと、エミルはキョトンとした。

それから「日本一おいしい海苔か」とつぶやくと、安田を追跡したあの夜のことをエミルはふと思いだした。村松さんは大事な日には日本一おいしい海苔を出すんだねと、エミルは少しおかしかった。

ルミさんのポストンバッグを椅子の上に置き、それからエミルは自分の分の朝食の準備に取りかかった。ご飯をよそった茶碗や味噌汁と、そして日本一おいしい海苔を入れた小皿と唐揚げと、それからサラダの取り皿を自分の前に並べて椅子に腰を下ろしたとき、セー又川が入ってきた。目の下にクマのようなものができていた。あまり眠っていないのだ。

「おはよう」とあいさつをかわすと、セー又川は調理室からコーヒーを入れたカップを手に戻ってくると、エミルの正面にどすんと座った。

「ルミさんは大丈夫です。元気です。ルミさんのメッセージは断片的ではありませんけれど、クリアに受け取れました。だけど、わたくしのほうからのメッセージはやはりうまく届きません。わたくしの力不足です。こちらからのメッセージがルミさんに届きませんと、計画はうまく進みませんですから、困りました。どうしましょうか」

そう言ってセー又川はうなだれると、両手でテーブルの上に置いたコーヒーカップを包

み込むようにした。

「だいたいの居場所もわかりませんか？」

「わかりませんのです、いまは……。たぶん、ルミさんはクルマから連れ出されたあと、どこかに監禁されました。ルミさんのエーテル体が落ち着けば、場所は少しずつわかってくると思います」

「午前中には？」

「午前中にはわかりますと思います」

「無理をしないで」

「大丈夫。わたくしの能力の場合、カロリーはあまり使いませんから」と言ってセーヌ川は小さくウインクをした。

いつものように「行ってきます」とアパートの玄関を出て、鉄製の階段を降り、代々木

八幡駅に向かって100メートルほど歩いたあたりで、うしろから「詩織、忘れもの!!」と叫ぶ母の声が聞こえた。振り向くと、手を振りながらゆっくり走ってくる母の姿が見えた。詩織は歩みをとめて、何を忘れたんだろうと考えながら母が追いつくのを待った。少しだけ息を弾ませた母の顔は、忘れものを手渡しに来たわりには深刻そうだった。

「詩織、駅まで一緒に歩こう」

「忘れものって？」

「それはウソ。詩織とね、誰にも聞かれないところで話したかったの」

「じゃ、家で言えればいいのに」

母は首を振ると、うしろを少し気にするように振り向いてからこう言った。

「お母さんが何を言っても、ビックリしたりしないで、ふつうにしててね」

「どうして？」

「わたしたちは見張られているの。きのうの夜から、また」

「もしかして、教団の人に？」

「そう。家にもね、ずっと前から盗聴器がついているの」

驚いて詩織が立ち止まると、「ふつうにしててと言ったでしょ」と母が少し怒ったよう

に言った。「うしろにいるのよ、男が。ふりむかないで」

詩織はふだん通りにしようと意識して歩き出した。

「いいい？ 絶対にビックリしないでね。絶対に普通どうりにしていてね」

「うん。大丈夫」

母は前を向いたまま、小声でこう言った。

「お父さんは東京に帰ってきている」

詩織はふつうに歩こうと努力した。だが、早くなつていく心臓の鼓動だけはどうにもならなかった。

「お父さんはね、いま、新宿のホテルに隠れているの。教団に見つからないように」

詩織はふるえる声で聞いた。

「いつ、帰ってきたの？」

「10日くらい前。伊織の告別式の夜、家に電話があったの。お母さん、盗聴器が仕掛けてあるのを知っていたから、お芝居して教団に気づかれないようにしながら、お父さんと話をした。それから何度か、電話で話をした」

「どうしてお父さん、家に帰らないの？」

母はまた背後を確かめるように振り向いてから、また小声で話し始めた。

「教団に殺されると言ってるの。理由は教えてくれなかった。どうすればいいのか、お父さんもわたしもわからなくて、とりあえず、当座は隠れているしかないって」

「盗聴器って……」

「キッチンのコンセントの裏側にあつた。引越して何日かして、買い物から戻ったら、なんか家の様子がへんだったの。キッチンに置いてあつたものの位置が微妙に違つたのよ。ずっと教団の人たちが家を見張つてたから、その人たちが家の中に入ったんだけ思つた。それで、前にテレビで見た盗聴器のことを思い出したの。コンセントの裏側に隠されてる場合が多いってテレビで言つてたから、ドライバーではずしてみたら案の定。でも、取つて捨てるのも恐ろしくて……」

「じゃ、ずっと盗聴器を意識してお芝居してたの？」

「そう。ずっとね……。だから、詩織にもお父さんのこと、言えなくて、ごめんね」

「うん」

「エミルさんたちがお線香をあげに来たときがあつたでしょ。あのとき、じゃけんにして本当に申し訳なかつたんだけど、もしかしたら、『あなたのお父さんを見かけた』なんて

ことをエミルさんが言い出したらどうしようと思って、それであわてて追い出しちゃうみたいなきょうをしたの」

二人の目の前に代々木八幡駅が見えてきた。母は立ち止まり、道の端に詩織を引っぱるようにして、それからあたりを見まわしてから、こう言った。

「きのうエミルさんたちに会って、信用できる人たちだと思った。それで家に戻ってから考えたの。あの人たちなら、なんとかしてくれるんじゃないかって。頼ってみようって。だから、詩織、電車を降りてからでいいから、エミルさんにお父さんの居場所を教えてくださいの。いい？」

「うん」

「新宿メトロホテル。ハウジヨウヨシヒコ。おぼえた？」

「うん」

「新宿メトロホテルよ。ハウジヨウヨシヒコという名前で泊まっている」

「エミルさんが電話しても大丈夫？」

「うん。きのうの夜、電話があったときに、お父さんにこう言っているの。ノルトさんという人から電話があるかもしれないからって。ノルトさんはガン治療の名医をおしえてく

れるはずよって。お父さんとはね、親戚のオジサンというふりをして電話で話をしているの。それで自然と、教団との問題をガンってという言葉で表すようになったのよ」

「わかった」

「お母さん、教団の人に見張られてるから、携帯でノルトさんに電話してるところを聞かれてもいけないし。何度もノルトさんの家に行けば、それも怪しまれるでしょ」

「うん」

「いい？」

「うん……。あのさ、お父さん、伊織のこと、知ってる？」

「うん。泣いてた、電話で、ずっと」

「そう。知ってくれていて、よかった……。じゃ、エミルさんに電話しとく」

母は少し笑顔になって、「頼んだよ」と詩織の肩を叩いた。

それから母は「行ってらっしゃーい」と、改札を抜ける詩織の背中に向かって大きな声で言った。

少し眠った。こんな状況でも熟睡できたのが自分でも不思議だった。

おそらく3時間はぐっすりと眠った。だが、時計を持っていないので時間がわからない。太陽の高さからすると、朝の8時から9時ごろだろうか。

途中までは目隠しもされず、ここまで連れてこられた。

車内では両脇にぼくシングのフェースガードで顔を隠した屈強な男が座り、身動きもできなかった。助手席と運転席の二人は、夜だというのに大きなサングラスをかけて顔を隠していた。助手席のほうの男は紺色のスーツを着てネクタイを締め、髪をきれいに七三にわけ、まるで公務員か銀行員のように、一方の運転席の男は黒っぽいTシャツ1枚だった。何を聞いても返事は無く、だれもが一言も話さなかった。まったくの無言のまま、ここまで連れてこられた。

東北自動車道を川口ジャンクションから東京外環自動車道に入るころには、夜は白々と明け始め、三郷西インターチェンジから常磐自動車道に入り、柏インターチェンジで一般道に下りたころには夏の太陽がすでにキラキラと東で輝いていた。

そこでアイマスクをさせられた。

早朝で通るクルマもまばらな市街を抜けたのが音でわかり、それから山道をくねくねと右に左に折れたり、上ったり、下りたりしたような感じがした。

クルマがスピードを落とした。おそらく一台がようやくよく通れるような細い道なのだろうか、木々の葉や枝を文字通り車体でガサガサと音を立ててかきわけながら進み、やがてギーっという音とともに停車した。

男がアイマスクを取った。まぶしかった。

見るとそこはテニスコートぐらいの広さの空き地で、2台のキャンプ用トレーラーが設置されていた。クルマで牽引するタイプのトレーラーだったが、牽引してきたクルマは見あたらなかった。

並んで置かれた2台のうちの1台に、ルミは無理やり入れられると、ボタンとドアが閉じられた。反射的にドアを押し開けたが、どういう鍵の仕掛けになっているのか、内側からはビクともしなかった。外からロックをすると、内側からは開けられない仕組みになっているのか。

狭い室内には2段ベッドがあり、対面式のソファとテーブルがあった。小ぶりのキッチン

ンとトイレ、そして洗面所もあった。テーブルの上には数個の菓子パンが置いてある。これが朝食ということなのだろうか。

小さな冷蔵庫を開けると、中にミネラルウォーターがぎっしりと詰まっていた。

何カ所かある窓にはカーテンがかかっていた。そのうちの一つのカーテンを開け、押し開く形式の窓を手のひらで叩くようにするとかんとんに開いた。だが、そこから逃げ出せるようなスペースではどうていなかった。

「ねえー、ねえー」と叫んでみた。その声は、森の中に吸い取られていくだけで、男たちからの返事は無かった。

そのままルミさんはじっと耳をすませてみた。

かすかにサーツという音が聞こえる。何の音だろうか？

ルミさんは目を閉じ、何も映っていないテレビの雑音のようなその音に注意を向けた。

だんだん意識が集中していくと、突然、額のあたりがムズムズしたかと思うと、深い緑でおおわれた両岸を従えた大きな川の情景が浮かんだ。そのビジョンは一瞬で消えたが、豊かな水量の流れをたたえた川だった。

柏インターで下りたことを考えると、利根川だろうか。そうルミさんは推測した。

ルミさんは目を開け、そして窓を閉めた。

それにしても、組織の連中はいったい自分に何をしろというのだろう。なんのために連れてきたのだろうか。

ルミさんはまったく見当もつかずに、ソファにどっと腰を下ろし、そしてそこでそのまま眠りにおちたのだった。

深い眠りではあったけれど、1度か2度、夢うつつの状態のときにセー又川が現れた。心配そうな表情で何かを聞いてきた。セー又川が自分に向かってなんと行ったのかはわからなかったが、ルミさんは反射的に元気ですと答えていたのだった。

冷蔵庫からミネラルウォーターを一本取り出すと、ルミさんはゴクゴクと音を立てて飲んだ。

まず、何をすべきか。

恐怖はある。でも、その恐怖は保留状態にしておくことができたし、できている。封をしたのだ。

エミルや天道さんたちとコミュニケーションできるようにする。それが第一だと思った。この後、なにをさせられるのか、あるいは自分がどうなるのか、いまは少しもわからな

いけれど、とにかく、自分がいるこの場所の、おおよその目安だけでも伝えなければと思っ
た。その相手はセーヌ川しかない。

トレーラーの中には生きていくための食糧と設備がある。連中は自分を何かのために利
用し、その役目を終えるまでは生かしておくつもりではあるらしい。そのうち、連中が望
みを伝えるにやってくるにちがいない。その前に、なんとか、セーヌ川とのコミュニケーショ
ンを確立せねば。

目標が見つかると、急にお腹が空いた。

ルミさんはテーブルの上のメロンパンを取り上げると、袋をビリッと破いた。

39

西条君のお父さんがすでに東京に戻ってきていたという詩織からの電話はショックキ
ングだった。だが、一方で、エミルたちの計画にとっては、願ってもない朗報だった。これ
で仕掛けが一つ少なくて済むと、だれもが歓迎した。何よりも、セーヌ川がルミさんとの交

信に専念できるのが大きい。

エミルは詩織が知らせてくれたホテルに電話をし、能流登という名を告げて、ハウジヨウヨシヒコなる人物の部屋につないでくれるように頼んだ。

電話に出た男性はおそるおそるではあったが、エミルの言葉を信頼し、受け入れた。

エミルはきょうの計画のあらましを説明し、協力を頼むと、西条君のお父さんは不安げではあったが、「わかりました」と返事をした。

それから西条君のお父さんの身長と体重を聞き、それをメモした。眼鏡のメーカーとポロシャツのブランドも。

話の最後に西条君のお父さんは、直接会いに来る人間に「自分は教団の人間ではない」という証拠を持たせて欲しいという条件を出した。エミルは「わかりました」と告げ、第一回目の接触は終わった。

そして午前9時半すぎ。全員が見守る中、天道さんがiPhoneの番号をタップした。左手を腰に当て、右手で持ったiPhoneを右耳にあて、それから天井をあいおいで大きく息をすると、「あ、もしもし」と天道さんは電話の相手に向かって語り出した。

「緒形大三郎さんにつないでほしいんだが。おとこの夜、仙台でお会いした天道と言え

ばわかる。小山ルミという女性のこと、ぜひ緒形さんにお願いがあると」

天道さんはテーブルの上の一点を見つめたまま、教祖が電話口に出てくるのをじっと待った。

「あ、もしもし。……仙台ではたいへん失礼をいたしました」

そう言っ、天道さんは自分を見つめる視線の一つずつにうなずいていった。緒形が電話口の向こうにいるということだ。

「実は、緒形さんの超自然的な力におすがりしたいと思って電話をしました。われわれの仲間が暴力団に拉致されました。あの小山ルミという女性です。警察に連絡したら命がないと脅かれています。……はい、その通りです。そこで、ここは緒形さんのお力におすがりする他に手はないと思います、ご連絡した次第です」

天道さんは、相手の言葉を二言三言聞いた後に、こう続けた。

「もちろんです。実は、週刊未来と関東テレビに知り合いがいて、話はつけてあります。小山ルミを救出するところが撮影できたら、週刊未来は来週発行予定の記事と差し替えてもよいと言っています。……はい。……では、一時間後にかがいます。感謝いたします」

天道さんは iPhone を左手に持ち替えると、右手の人さし指で OFF にした。

「よし、うまくいった」

そう天道さんが言ってみんなを見まわすと、「では、第2幕ですね」とアンジェリーナが言い、エミルがうなずいた。

「案の定、対価がないと引き受けないとやってきた。週刊未来の話をしたら、一発で態度が変わった」

高村の父がニヤリと笑い、大島編集長が神妙な顔つきで天井を見上げた。

腕組みをして目をつぶっていた安斉警部が口を開いた。

「それでは、わたしはいったん所轄に戻ります。いろいろと準備がありますから。決行時間が決まりましたら、ご連絡ください。なるべく早めに知らせていただけると助かります」

エミルが安斉警部にこう聞いた。

「神園田の顔写真は手に入りましたか？」

「大丈夫です。教団のサイトにたくさん出ていましたよ、活動報告の中にね」

エミルは西条君のお父さんの身長や体重などを書いたメモを、体を伸ばしてテーブル越しに安斉警部に手渡した。

「ありがとうございます」と言って安斉警部は立ち上がり、手にしたグレーのジャケットを幅の広い肩にかけて、「では」と全員の顔を見まわし、食堂の観音扉を右手で押し開け、出て行った。

入れ替わりにセーヌ川が巨体を揺らしてやって来た。

「だいたい場所がわかりましたです」

そう言って、セーヌ川は持ってきたノートパソコンをテーブルの上に置いた。開いたディスプレイにはグーグルマップが表示されていた。

「ルミさんからのメッセージは3つの言葉がはっきりとわかりましたです。いいですか？

利根川、柏インターチェンジ、森、です」

「森って？」とエミルが聞いた。

「森の中にいるということです。わたしが受け取ったイメージも同じでした。大きな川のほとりにある森の中。そこにルミさんがいます。何か、白い四角い箱のような家にいます。それが何かはわかりませんが、わたしには森の中にポツンと2つ置かれた、大きな箱が見えました。そこにルミさんが存在するという強い感情をいただきました」

そう言いながら、セーヌ川はグーグルマップ上のある部分を指で丸くなぞった。

「航空写真にしてみても」とアンジェリーナが言った。

セーヌ川が表示を切り替えると、のぞき込んでいた高村の父が言った。

「森と言っても、ここらへんはゴルフ場ばかりで山なんか少ないな。河川敷の藪の中だろうか」

「そうだろうね。山と言えるものは筑波山のほうまで行かないとね」と大畠編集長が言った。

天道さんが腕組みした腕の右手であごをなでながらこう言った。

「いづれにしても、セーヌ川君の透視ははずれたことがない。柏インターチェンジを下りてほどない、利根川の河川敷。そのどこか、うっそうと木木が生い茂っているあたり。そこに建つ倉庫かなんか。そこにルミさんは監禁されているということだろうね」

「でも、問題は」とエミルが難しい顔つきになった。「連中をおびき出す場所をどうやってルミさんに伝えるかです」

「がんばりますが、むずかしいです。ルミさんのメッセージは受け取れる。でも、わたしからのメッセージはうまく伝わらない……」とセーヌ川は小さく肩をすくめた。

エミルは考え込むように頭のうしろで手を組み合わせ、そして目をつむった。

「あのう」と食堂の扉が開いて声が出た。麻里だった。うしろにはジルが立っている。「うちたちも、なにかお手伝い、したいんですけど」

40

背伸びをしてキッチンの上のキャビネットを開けてみたら、懐中電灯や寝袋などと一緒に、小さな白いプラスチックの目覚まし時計を見つけた。動いていた。針は午前9時半を指していた。

その目覚まし時計だけを取り出して、キャビネットの扉を閉めたそのとき、クルマが近づく音がして、やがてエンジン音がやんだ。ボタンボタンとドアが閉まる音がして、複数の人間のザクザクと砂利道を踏む足音が聞こえてきた。と同時に、隣のトレーラーから降りて迎えに出た男たちがたてる物音も聞こえた。

やがて二つのグループはあいさつでもして何ごとかを報告し合ったのに違いはないが、連中は徹底的に声をひそめて言葉を交わした。ルミさんの耳に聞こえる音といえば、洋服の

こすれる音、靴が地面をこする音、たたく音、そしてひそひそとささやく声だけだ。

ルミさんはソファに腰をおろし、目覚まし時計をテーブルの上に置いた。

ガシャガシャとロックをはずす音がして、男が二人、順番に入ってきた。

ひとりはあるの助手席にいた、七三に髪をわけ、サングラスをかけたスーツの男で、黒のブリーフケースをさげている。

そしてもう一人は、同じようにサングラスをかけているが、初めて見る中年の男で、さっきのクルマでやって来たのだろう。ゴルフウェアのようなパンツに茶色のポロシャツを着て、高価そうな金色の腕時計を左手首に輝かせ、頭は短く刈り込んでいた。いかにも暴力団の人間という風体だとルミさんは思った。

真っ黒に日焼けした顔を少し右にかしげ、左手の薬指の金色の指輪をクルクルいじりながら短髪のほうの男が突っ立ったまま言った。

「おつかれだったのう。ちょっとは眠れたんかのう」

ルミさんが「まあ」と返事をする、男が続けた。

「生きて帰りたいきゃ、一仕事してもらわにゃならん。あんたなら、簡単な仕事じゃ。なんでも、鈴木一輝を自首させたのはあんたららしいの。その落とし前つけるつもりで、おれ

の頼み、聞いてくれんかの」

ルミさんは無言のまま男の顔をじっと見つめた。

「簡単な仕事じゃ。サイジョウテツオという男がおるんじゃ。こいつ、組織の金を持ち逃げしよった。目んたま飛び出るほどの大金じゃ。じゃけ、どうしてもつかまえてな、金を取り戻さんとあかんのよ」

そう言うのと、男はルミさんを見据えたまま、うしろのスーツの男に向かって左手を差し出した。

スーツの男はブリーフケースを開け、中から一枚の紙と写真を取りだし、短髪の男の左手に手渡した。男はそれをそのままルミさんの目の前のテーブルの上に置いた。

一枚の紙には「西条哲織」という文字が書かれ、そして写真のほうはその人物のものだろうか、カラーの証明写真だった。銀縁のメガネを掛け、髪をオールバック気味にきちんとそろえた実直そうな中年の男性が真正面を向いていた。

「こいつがサイジョウテツオよ。あんたの超能力でさ、こいつの居場所を探してもらいてえわけなのよ。な、簡単な仕事じゃろ。制限時間は夕方の6時までだ。それまでによ、こいつの居場所、ばっちり当ててくれよ。競馬じゃねえから当てるといいわねえか。ま、た

のんだよ」

ルミさんが口を開いた。

「もし、6時までにはわからなかったら？」

男はまたニヤリと笑って指輪をクルリと回した。

「できるっしょ、あんたならよ、6時までじゃあ」

「とっても時間がかかることなの」

「6時すぎたらアウトだ。あの世に行ってもらうしかねえのう。どんぶらこ、どんぶらこって、海まで流されてもらうかのう」

ルミさんは男をにらみ返すところ言った。

「その前に、あなたが呪い殺されてるかもね」

「おもしれえのう、それ」と男はケラケラ笑った。「どっちにしてもじゃ、サイジョウウテツオの居場所を探さねえ限り、あんたはここからどこにも行けねえってことよ、生きてはの。よおく考えての」

そう言って男がルミさんに背中を向けたとき、「待って」とルミさんが言った。男が振り向いた。

「なんじゃ」

「いま、何時？」

男はキョトンとした表情を一瞬浮かべると、左手首の金色の腕時計に目をやり、「10時5分じゃ」と言うと、「頼んだぞ、もう？」と片手を上げ、スーツの男どももトレーラーから出て行った。

それからボタンボタンとドアを閉める音がしてクルマは走り出し、エンジン音が遠ざかっていった。

ルミさんはテーブルの上に置かれた紙と写真に改めて視線を落とした。

西条哲織。

サイジヨウ——どこかで聞いた名字だと思った。どこで聞いたんだろう。だれが言ったんだろう。

それから目覚まし時計の時刻を10時5分に合わせた。

「これはどうもどうも」と言っただ緒形大三郎は大島編集長の差し出した名刺をうやうやしく両手で受け取った。

「こちらが記者の高村です」と大島編集長が横に立つ高村の父を紹介すると、高村の父は無言のまま軽く頭をさげた。

緒形は「うむ」とうなずくと、「さ、おかけください」と目の前のソファを目線で示した。天道さん、大島編集長、高村の父の3人は、木製の肘掛けにレリーフの文様が浮き出た高価そうなソファにそろって腰かけた。

緒形は執務用の巨大なデスクの向こう側に回り込むと、まるで被告や弁護士を見おろす裁判長のように自信たっぷりな表情でドッカと椅子に腰を下ろした。

広々とした執務室の豪華さに、天道さんたちはあらためて教団の金満ぶりを見た思いがした。床に敷き詰められたじゅうたんは毛足が長くてまるで雲の上を歩いているようだったし、窓にかかるカーテンもビロードで、深いワイン色をしていた。緒形の背後には巨大な三日月のオブジェが飾ってあったが、それは金箔でおおわれていた。部屋隅におかれた彫刻は、ジャコメッティのものではないかと、高村の父は思った。とすれば、億単位の

値が張るものである可能性がある。

緒形は仕立ての良さそうなワイシャツに赤いネクタイを締めていた。

効き過ぎではないかと思うエアコンの冷気に、天道さんのからだだがブルブルと一瞬震えた。

「わたしの力にすがりたいとね」と緒形は嬉しそうに3人の顔を見まわした。

「はい」と天道さんが答えた。

「わたしを侮辱したあの女性かね、拉致されたのは？」

「ま、そうです」と天道さんは苦笑いを浮かべると、こう続けた。

「くわしく説明しますと、我々がかつて関与した事件がございまして、その際、暴力団関係のある人物を説得して自首させました。その暴力団が、おそらくその落とし前をつけるという意味もあるのでしようか、理由はわかりませんが、小山ルミを宮城県内で拉致したのですな。その現場にわたしはいたわけですが、暴力団に鉄砲をつきつけられて、警察には連絡するなど。警察に通報したら小山ルミを殺すと。自分たちは警察内にも仲間がいるんだと。こう脅されたわけです。実際、警察は信用ならんでしよう。で、どうすればよいかと」

「ふむ、で、わたしの顔が浮かんだと」と緒形はニヤリと笑った。

「はい、その通りでございます。実は、小山ルミは昨日の朝、何者かの呪術による攻撃に遭い、ひどく体調を崩しました。あれほどの呪術を操れる人物で、しかも小山ルミを攻撃する理由がある人物となると、まことに失礼ながら、緒形さんしかないだろうと思いつたりました」

「ほほう」と緒形は満足そうに椅子の上で体をそらした。

「そのような強力な力をお持ちの緒形さんならば、小山ルミのいどころを透視し、無事に生きたまま取り戻してくれるのではないかと、そう思った次第です」

緒形は満面に笑みを湛えながら、天道さんを指さしてこう言った。

「だから言ったんだ。わたしを見くびるなど。思い知ったか、月の神々の力を」

天道さんは無言で大きくうなずいた。

「それでだ。わたしがその女性を救い出したとしたら、あんたはそれをどういう扱いの記事にしてくれるのかい？」と緒形は大畠編集長に向かって言った。

「直近の号でメインの記事として取り上げるつもりです。目の前で奇跡が起きたわけですからね、一種の大スクープですから」

「うちの教団がらみの記事が来週の号に出ると聞いたが」と緒形は大畠編集長をにらむようにして見つめた。

「正直に言えば、教団の脱税がらみの——」と大畠編集長が言いかけると、「脱税じゃない」と緒形は大声をあげた。「脱税など、しとらん。あれは申告ミスだ。それをマスコミっちゅー輩は金に目がくらみ、ホラばかり吹き回る」

大畠編集長は大きくひとつ息をつくと続けた。「それは見解の相違ですが、いずれにしても、目の前で起きた奇跡のほうが読者にはウケる。救出劇は絵にもなりますし、こういうことはかつてありませんでした。ですから、用意していた記事を差し止め、こちらの救出劇に差し替える考えでおります」

「テレビはどうなんだ？」と緒形が聞くと大畠編集長がこう答えた。

「関東テレビは我が社の兄弟企業ですから、すでに打ち合わせもすんでいます。わたしが連絡すれば、取材撮影クルーを乗せたロケバスがわたしたちに合流する手はずになっています。『ニュース11』の連中ですので、時間によっては、今夜の番組でいわゆる救出劇の模様が放送されることになります」

「よし」と緒形は大きくうなずくと、それから眉根を寄せ、口をへの字に結んで表情を一

変させた。

「ここまではいいだろう。だが、一つ、ハードルがある。相手は凶体のでかい暴力団だ。この緒形が邪魔立てをしたとなれば、教団の信徒に仕返しなどの被害が及ぶ可能性がある。その小山という女の証言によって、暴力団の人間が逮捕されたっちゅーことになれば、なおさらだわな。ここはあんたから小山という女に、警察にはあいまいな証言をするようにと言いついてくれんか。そうすれば暴力団も仕返しまではすまい。どうだね」と緒形は天道さんをじっと見つめた。

「承知しました。小山ルミにはそのように伝えましょう。目隠しされて何も見えなかつたし、何も聞こえなかったと、警察の調べにはそう言えと」

「うん、うん、うん」と緒形は満足げな表情を浮かべて何度もうなずくと、手元の電話機のボタンを押した。

「はい」とスピーカーから男の声で返事があると、緒形は「お客様にお茶をお出ししろ」と言ってまたボタンを押した。

「では、具体的な段取りっちゅーか、ま、くわしい話をしましょうか」と緒形は言うのと、デスクの上で両手を組み合わせ、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

セーヌ川はあせっていた。あせっては自己意識が過剰になり、透視もテレパシーも成功率は減るとわかっているだけに、なおのことあせってしまう。こんな悪循環ははじめてかもしれない。

ルミさんにこちらからメッセージを伝えることができなければ、きょうの計画は台無しになる。それは、ルミさんの命にかかわる。

厚手のカーテンをしめきった真つ暗な部屋の中で、セーヌ川はベッドに仰向けになり、全身の力を抜き、雑念を暗い煙のかたまりとしてビジュアル化して、それを少しずつ体内から吐き出していくさまをイメージし続けた。

それから大地のエネルギーを足の裏から通し、そして天のエネルギーを頭頂から通し、全身を貫かせてから自分を取り巻く球体へと変えていく。

やがて、胸のあたりに声が響いた。ルミさんだった。

30。そう聞こえた。

自己意識を薄めつつ、集中した。

0。

さらに集中した。

1時間に2回。0と30。共鳴。

さらにさらに集中した。

1時間に2回、0と30のときに、共鳴させましょう。

わかった。そういうことか。そうセーヌ川は思った。

了解——そう念じてみたが、ルミさんには届いただろうか。もちろん、返事はない。

集中を続けた。するとまた新しい言葉が胸の中で音となって響いた。

サイジヨウ。サイジヨウ。

やっぱり、とセーヌ川は思った。

サイジヨウ。サイジヨウ。場所。場所。

どこ。どこ。

サイジヨウのいる場所はどこ。

言葉が一つながりになって心臓のあたりで反響した。

わかりました、ルミさん、とセーヌ川は念じた。

だが、返事は無かった。

こちらからのメッセージが届いたかどうか、どうしても確かめる必要がある。

セーヌ川は、こんどはこういう言葉を音としてイメージして送ってみた。

「わたしのメッセージが届いていたら、届いたと返事をしてください」

じっと待った。集中して待った。だが、ルミさんからのメッセージは何も届かなかった。
何も。

ゆっくりと目を開け、そしてゆっくりとからだを起こし、そしてベッドサイドのランプをつけて時計を見た。

11時だった。つまり、最初の0だった。

セーヌ川はベッドから下りると、スリッパをはき、部屋を出て食堂へと向かった。

食堂の観音扉を開けると、エミル、アンジェリーナ、カメさん、大澤さん、そしてあの若い恋人たちがテーブルを囲んでいた。

「教祖様との話し合いはどうですか？」とセーヌ川が聞くと、エミルは「まだ連絡が無い

の」と言っつて首を振つた。

セーヌ川は暖炉を背にしてテーブルにつくと、こう言つた。

「やはりルミさんは、西条さんの居場所を探すことを命令されているようです。きつと、わたくしに言っつている、教えてください、西条さんのいる場所を」

「やっぱり、思っつていた通りでしたね」とエミルが言つた。

「ルミさんは、通信の確実さを保つたために、30分おきに同時に交信しましょうと提案してききました。ですから、次の交信は11時30分でございます。そのときにもっとくわしい状況がルミさんから伝わつてくると思ひます」

いっつたんセーヌ川はそこで言葉を切つた。それから小さなため息を一つついで、言葉を続けた。

「でも、わたくしからのメッセージはルミさんには届いていないかもしれない。30分後、もう一度頑張つてみますけれど」

エミルは黙つてうなずいた。

「それとは別にトライしたのですけれど、ルミさんの居場所ですけれど、マップを指でなぞりながらリモートビューイングしてみました。そうしましたら、もっとプロシユ、

えーと」

「接近できたということ？」とアンジェリーナが言った。

「そうです、そうです。指が熱くなりました」と言って、セーヌ川は大澤さんが広げているノートパソコンを見つけると、「いいですか？」と立ち上がり、大澤さんの横に立った。「グーグルマップで柏インターチェンジの近く、そして利根川を見せてくれますか？ アエリエンヌ」とセーヌ川が頼むと、「航空写真で」とアンジェリーナが言い添え、大澤さんはたちまちにマップを表示した。

セーヌ川は、じっとマップをにらむと、「ここです」とディスプレイの中の一点を指さした。

それは利根川の取手市側の、南北にそだけ幅がふくらんだ河川敷の、木木が生い茂った一帯で、そばを県道47号線が走っていた。十数分も歩けば住宅街があり、死角と言えば死角と言えたが、大胆と言えばあまりにも大胆な場所だった。

「ここに2つの白い箱の形の家があります。この写真には写っていませんが、その一つにルミさんは閉じ込められています」

「白い2つの箱型の家かあ」とカメさんがつぶやいた。「このグーグルマップの写真に写っ

ていないということは、最近建てられたものってことだよね」

「もしかして、トレーラーじゃないですか、キャンプ用の」と大澤さんが言った。「ぼくらを襲撃したクルマですが、天道さんの話だと、リアにヒッチメンバーをつけていたそうですから」

「ヒッチメンバーって？」とアンジェリーナが聞いた。

「それこそ、トレーラーを引っ張るためのどっかい金具ですよ」と大澤さんが答えた。

「じゃあ、間違いないね。トレーラーを引っ張ってきて、空き地に置いたんだ」とカメさんが言うと、セー又川が嬉しそうに小さなガッツポーズをした。

「ようし、これでルミさんを助ける必要条件の一つをクリアしたぞお」とカメさんが両手を突き上げた。

すると、エミルが小さなため息をついてこう言った。

「ここまでピンポイントで透視できたというのに……」

「これから警察に通報しても、それこそ連中に気づかれたら、ルミさんの命が危ないし……」とアンジェリーナもため息をついた。

「いまからぼくらで助けに行くわけにもいかないし」と、こんどはカメさんがため息をつ

いた。

「銃を持っていますからね、連中。とにかく計画通り、ゴーサインが出てから行くしかないですね」と大澤さんも元気なくうつむいた。

するとセー又川の目がみるみる輝くと、大澤さんの背中を手のひらでバシッと叩いた。

「いたっ」と大澤さんがからだをよじると、「大澤さんが行くことできませんか」とセー又川が言った。

「えっ、どこに？」と大澤さんがキョトンとした顔で聞くと、「ここです、ここです」とグルマップのルミさんがいるというポイントを指さした。

「ひとりで？」と大澤さんはまだ意味が飲み込めない。

「はい、もちろん。助けに行くのではなく、時刻と場所のメッセージを伝えに行くんです」

「えっ、電車で？」と大澤さんはまだキョトンとしている。

「いえ、幽体離脱で」とセー又川が言うと、大澤さんは目をまん丸にし、右手を無理だというようにひらひら振りながら、「ピンポイントでどこかに行くのはとっても難しいんですよ。この合意的現実世界でよく行ったところなら別だけど。それに、幽体離脱して行く世界と、この合意的現実世界とは振動数が異なるので微妙に違うんです。幽体

離脱して行った世界で会った人に何かを伝えても、この合意的現実世界ではそのことを覚えていないこともしょっちゅうだし」と早口で言った。

「でも、やってみる価値はあります。大澤さんは幽体離脱のマエストロです。この間、紀伊國屋書店で、大澤さんの本、見ましたです」

そう言って、セー又川は大澤さんの肩をうしろから大きな手でつかんでゆさぶった。

二人のやり取りを聞いていたエミルの顔がみるみる間に赤らんでいった。何かに気づいたのだ。

「あのね、みなさん」

エミルが青い目をキラキラ輝かせながら口を開いた。

「けさ、村松さんがオレにこう言ったの。リリーが昔、こんなことを言っていたって。それはね、リリーがトンネルになって、A地点とB地点を結んでくれる。そのトンネルを使って幽体は移動できるんだって」

「村松さん、きょう起こることをあらかじめわかっていたのかしら」とアンジェリーナが驚いて言った。

「大澤さんしかない。リリーの作ってくれるトンネルを抜けられるのは」

そうエミルが言うと、大澤さんは唇をわなわなと震わせた。

「それって、武者震い？」とカメさんが聞いた。

43

西条哲織という人物の見当がようやくついた。高村兄弟が言っていた、小学校の事故で亡くなった男の子。その子の父親で、麻里と一緒に福島まで行ったという、あの失踪中の男性のことではないかと、ルミさんは直感的に思ったのだ。

それにしても、その西条君のお父さんが組織のお金を持ち逃げしたなどということがありえるのだろうか。確かに、麻里の話によれば、ある組織の不正を知り、そのために追われ、生命の危険にさらされているということだった。だとすれば、つじつまは合うが、西条君のお父さんは普通のサラリーマンではなかったのか？ くわえて、なんとという偶然なのか。

情報がほしいと思った。自分が西条君のお父さんの居所を探して連中に話していいもの

か。いや、いいはずはない。それなら、自分はいったい、どういう行動を取るべきか。

頼るのはエミルたちしかない。

セーヌ川へのメッセージは伝わっているという実感はあった。だが、セーヌ川からの言葉は一言も感じることはできなかった。やはり、セーヌ川的能力は発信には向いていないのだろうか。

ルミさん自身も、たとえわかったとしても組織に伝えるつもりはなかったが、ために西条哲織という名前と写真を手がかりにその居場所を透視してみた。だが、勝手がわからなかった。

ルミさんの透視とは、対象を目の前において、その中に何が隠されているのかを見通す、いわばレントゲンのようなものだった。

たとえば目の前に壁がある。ルミさんは集中してある特殊な意識状態に入る。するとその壁の向こう側にあるものが映像としてルミさんの額のあたりに現れる。ときに不正確なこともある。たとえば、壁の向こう側に男女がいるとする。左側に男、右側に女がいたとき、ルミさんにはその逆に見えたりすることがある。しかも、二人の他にそこにいるはずのない第三の人物も見えることもある。その男女を憎んでいる者、あるいは反対に心配し

ている者。そういう第三の人物が一緒に見えることもあるのだ。

そしてルミさんは、言葉をその対象に投げつけることができる。いわゆるテレパシーだ。つまり、ルミさんの場合は、目前の対象に対する働きかけによってその能力を引き出すのだった。

一方のセーヌ川は、ルミさんの反対で、名前だけからでも居場所を知ることができた。セーヌ川によれば、人間にはひとりひとり宇宙的なIDのようなものが振られてあるのだという。それはもちろん番号や記号ではないけれども、名前から感じられる温かな実感のようなものからそのIDのようなものが見つかるのだという。つまり、ある一人の人間とまったく同じ人間は全宇宙には決して存在しない。だから、アカシャレコードという全宇宙の4次元的な記録にアクセスすれば、その人間のことを知ることができるのだとセーヌ川は言う。

セーヌ川はそこからその特定の人間のエーテル体にアクセスする。セーヌ川のエーテル体と、その人間のエーテル体が触れあったとき、情報がセーヌ川に流れ込む。その人間が見たもの、感じたこと、経験したこと。そこからセーヌ川は、その人間がいる場所を映像的に組み立てていくのだ。

それがルミさんにはできない。試したことすらないのだ。

どうすればいいのだろう。

ルミさんは思った。

もしもここで自分が殺されるのなら、それは自分が地上で受肉するために自分が決めてきた運命なのだろう。だから、受け入れよう。怖くはないと言ったらウンになるが、死後もまた別の形ではあるけれど、この魂が存在し続けることを知っているからには、甘んじて受け入れる覚悟はある。だから、組織の言いなりにはなるまい。たとえ西条君のお父さんの居場所がわかったとしても、彼らには決して伝えまい。

ルミさんはすでにそんなふうに関心を決めていた。

しかし、知りたかった。自分が大きなパズルのひとつのピースなら、そのパズルの全体像はどんな絵柄なのか。それが知りたかった。

狭いトレーラーの中で、ルミさんはそんなことを思いながら、二段ベッドの下に横たわった。もうすぐ、11時半だ。セーヌ川にメッセージがきちんと届いていれば、セーヌ川からのなんらかのエーテル的なたまりが届くはずだ。

セーヌ川が11時30分のルミさんとの交信のために部屋に戻っていった数分後、天道さんたちがケプラーハウスに帰ってきた。高村の父が緊張感をたたえながらもうっすら笑みを浮かべていた。エミルたちは教祖たちとの話し合いがうまくいったのだと確信した。

「教祖さん、ルミさんが警察に事情を聞かれたときに何にもわからなかったと言うようにしてくれとさ。おっさん、欲に目がくらんで、まんまとこっちの計略にのっかりやがった」と天道さんは、みんなへの報告の最後に、厳しい顔つきのまま吐き捨てるようにそう言った。

あとは決行時間を決めるだけだ。

ただし、その時刻と場所をルミさんに伝えることができなければ、すべては水泡に帰する。

もちろん、かわりの計画は用意してあった。だが、それは西条君の母や詩織を巻き込んでしまう可能性があった。だから、避けるべきだとだれもが考えていた。

安斉警部からエミルに電話があった。準備はすべて完了した。いつでもOKだと。おおよその時間さえわかれば、こちらは完璧な態勢を敷いて待ち受けると安斉警部は言った。エミルはお礼を言い、決行時刻については、1時間から2時間以内に伝えられると思いますと言った。

天道さんたちと話し合い、午後3時を決行時刻としてまずは設定しようということになった。もしも、ルミさんにこのことが確実に伝わったという確証が得られなかった場合、時刻についてはまた見直すことになった。

高村の父と大畠編集長は編集部へと戻っていった。

エミルは天道さんに、村松さんが語ったリリーのトンネルの話をした。

大澤さんによれば、離脱ができる状態になるには、それなりの時間がかかるということだったから、13時00分の交信時間にトライしてみることにした。

大テーブルには、エミルを囲んで、アンジェリーナ、天道さん、大澤さん、カメさん、そして麻里とジルが残った。廊下から家政婦の佐藤さんがモップでタイルを磨くキュッキュツという音が聞こえている。

大澤さんが言った。

「メッセージの内容が多すぎるんです。口頭っていうか、そのう、話して伝えきれ自信はありません。で、思ったのですが、アストラルのものとして残したらどうかと」

「つまり？」とエミルが聞いた。

「非物質的なメモをルミさんがいるところに置いてくるんです」

みんなは大澤さんを見つめて次の言葉を待った。

「そのためには、インクとペンが必要です」

エミルがこう大澤さんに聞いた。

「それはボールペンとかじゃなくて、インク壺に入ったインクと、先が割れたペンがいるっていうことですか？」

「そうです。ぼくの血を混ぜなくてはいけませんから」

「血って、血液？」とアンジェリーナが聞いた。

「はい。だからインク壺とペンがいるんです」

「たぶん、ママが持っていると思う」とエミルは言うのと立ち上がり、食堂を出て行った。

「血を混ぜるの？」とアンジェリーナがもう一度聞いた。

「そうです」と言っただけ、大澤さんは口を閉じた。きつと不安と緊張に押しつぶされそ

うなのだろうか」とアンジェリーナは同情した。ルミさんの命がかかっているのだ。

「じゃ、おれが文面を考えておこう。カメさん、なんか、紙はないかい？」と天道さんが言う、「はい」と返事をして食堂を出て行こうとするカメさんに「あ、カッターナイフも」と大澤さんが言った。カメさんは黙ってうなずくと廊下に出て行った。

数分続いた沈黙を破るように、まずノートとボールペンとカッターナイフを持ったカメさんが、そしてペンとインク壺を持ったエミルが戻ってきた。

天道さんがノートに文案を書きつけるのを全員は黙って見つめた。

やがて「これでどうだい？」と天道さんはエミルに向かってノートを差し出した。隣のアンジェリーナが上半身を乗り出してノートの文面を声に出さずに唇を動かして読み、大澤さんとカメさんがエミルの背後にまわって同じようにノートを目で読んだ。

「これで、ルミさんにもよく理解できると思います」とエミルが答えると、残りの3人も同意するようにならずいた。

大澤さんは、ふーっとため息をつく、「では、ぼくは自分の部屋で作業を始めます。まず、紙に血を混ぜたインクでこの文面を書き写します。それから、瞑想に入ります。13時にエミルちゃんの意識にコンタクトを取ります。そこからはリリーさんに引き継ぐ。そ

ういう段取りでいいですか？」とテーブル上のどこか一点を見つめたまま言った。

みんながエミルのほうに視線を向けると、「はい。がんばりましょう」とエミルが大澤さんに向かって言った。

大澤さんは顔を上げ、テーブルを挟んで目の前に座っているエミルをじっと見つめると、大きくうなずき、ペンとインク壺とカッターナイフをノートの上にのせると、それらが落ちないようにノートを軽く丸め、そしてそっと両手で持ち上げると、ゆっくりとした足どりで食堂を出て行った。

エミルは大きく息をつくと、「じゃあ、麻里さんとジルさんの番ね」と二人のほうを向いた。大テーブルの奥のほうに座っていた麻里とジルが「はい」とそろって返事をした。

執務デスクの上に両足をのせてふんぞりかえったまま、緒形大三郎はトレーラーで待機する部下の携帯に自ら電話をした。教団の裏の仕事をもっぱらにおこなう部署の人間だっ

「だから、緒形は魔法名で話しかけた。

「フラター・アウル」

緒形は一度せき払いをすると、一気にこう伝えた。

「女が西条の場所を透視しても殺してはならん。計画は変更する。もう一度言う。女が西条の場所の透視に成功しても殺してはならん。生かしておくのだ。復唱しろ」

緒形は受話器を持ったまま、何度か小さくうなずくと続けた。

「よし。そのあとの段取りだ。組の者が女の透視どおりの場所で西条を見つけたら、神園田からこちらに連絡が入る。そうしたら、おまえに連絡をするから、そちらの連中ともども、そこを速やかに立ち去れ。証拠になるようなものは絶対に残すな。よし、ここまで復唱だ」

緒形はまた受話器に耳をじっとあてたままうなずくと、また口を開いた。

「それから女のことだ。女は猿ぐつわをかまして、生きたままそこらへんの木に縛りつけておけ。復唱」

緒形はうなずくと、くつくつと笑いながら、こう続けた。

「あとで、わたしと週刊誌の記者とテレビの連中が、女を見つげにそこに行くんだよ。わ

かるか？ そうだ。一石二鳥っちゅうわけだ。天道というはげ頭の男がな、そうだ、あの女の仲間だ。あいつがこの話を持ち込んできた。阿呆なヤツだ。わたしの超能力にすがりたいとき。よほど我らが月の子ども達の呪術にビビったようだ。わたしほどの力の持ち主なら女のいどころを探すのも可能だろうと言うわけだ。取引条件は、週刊未来の記事の差し替えだ。わたしが超能力を持った偉大な宗教指導者だという記事に差し替わるわけだ。テレビでも放送されるぞ」

そう言って、緒形はまたくつくつと笑い始めた。

「阿呆どもめが。なあ、フラター・アウルよ。どうだ」

緒形はうれしそうになんどもうなずくと、「では、わかったな。くれぐれもヤクザの連中に女に手出しさせるなよ。女に余計なことを聞かれないようにも注意しろ。いいか、絶対に殺すなよ。よし。では、切る」

緒形は受話器を置くと、次いでインタホンのボタンを押した。男の秘書の「はい」という声がスピーカーから流れた。

「神園田はいるか？」

「呼んでまいりますか？」

「ああ」

緒形は立ち上がると窓のそばに行き、締め切っていたワイン色のカーテンを両手で左右に一気に引いた。広大な庭に生い茂る木々が夏の昼の光にキラキラ輝いていた。なんてオレは運がいいんだと緒形は面白くてたまらなかった。

「失礼します」という声に振り返ると、神園田がドアを後ろ手で閉めるところだった。

「おう。立ったまま聞け。短く指令する」

「はっ」

「女の透視どおりに西条を見つけたら、どんな場所であろうとも、そこで殺してはいかん。必ず自殺に見せかけろ。復唱」

「西条を見つけたらその場で殺さず、別の場所で自殺に見せかけて殺害する」

「よし。拙速は禁物だ。安全な場所まで引っ立てて、高いところから突き落とすか、首をくくらせるか、いずれにしても自殺に見せかけろ。遺書を書かせればなおよい。わかったか。神園田、一連の不祥事はおまえの責任でもある。おまえが西条の扱いをあやまったばかりに、あいつは転んだんだ。わかっているな」

「はっ、申し訳ございません」

「おまえのこれまでの貢献、なによりも、おまえの息子の貢献。それを思って、わたしはおまえに罰を与えずに来た。息子に感謝するんだな。ま、とはいえ、おまえの息子は月の子どもだ。ちゅーことは、教団の子どもでもある。おまえがいまの女房と結婚したのだから、月の魔法団のはからいだったからな。そのぶん、おまえの銀行口座には、一生遊んで暮らせるだけの金がすでに入っておろうが」

そう言って、緒形は神園田をなめまわすように見つめると、厳しい口調でこう続けた。「とにかく、西条を確保したらすぐにわたしに電話しろ。わたしは女を超能力で見つけたちゅー芝居をせにゃならん。だからな、少しでも早く女のところに到着しないといかんのよ。犬の散歩かなんかしたオバチャンにでも先に見つけられてみる。とんだお笑い草だ」

「はっ」

「だから、西条を確保して車に乗せたら、すぐに電話をしろ。いいな。あとは、わたしから連絡するまで、電話をするな。記者やテレビ屋の前でへんな電話は受け取れんからな。わかったか。復唱」

「西条を確保して車に乗せたら、すぐに教祖様に電話をする。その後は、こちらからの教祖様への連絡はひかえ、教祖様からの連絡を待つ」

「よし。忘れるなよ。一生一度の大芝居が台無しになる。まあ、俺も若い頃は俳優志望だったんだがなあ」と言って、緒形はニヤリとして続けた。

「確認だが、おまえは組のヤツらとは別の車に乗るんだろうな？」

「はい。もしも拉致が失敗して警察沙汰になったときには、わたしがその場におりますと、教団の名前が出るはめになりますので」

「うん、よし、そうしろ。街なかで堂々と西条をさらうわけだから、何が起こるかわからん。念には念を入れて、けっして教団の仕業だということがバレないようにするんだ。よしんば組の連中が警察に捕まったとしても、おまえが逃げおおせることができさえすれば、あとはなんとかなる。組のほうとはそういう話をつけてある。組はあくまでも、自分たちへの落とし前をつけさせるために西条をさらったという話にするということだ。だから、絶対におまえが警察につかまってはならん。姿を見られてもならん。わかったか」

「はい。十分に気をつけます」

「いま、教団は結団以来の最大の危機を迎えておる。わかっているな」

「はっ」

緒形は振り向いてカーテンをまた閉めると、神園田に背中を向けたまま、「よし、下がっ

ていいぞ」と言った。

神園田は深々と一礼をすると、ドアを開け、執務室から出て行った。

46

麻里とジルとカメさんが、やって来た週刊未来の記者の男性と一緒にケプラーハウスを出て行くと、大テールには天道さんとアンジェリーナとエミルだけが残った。

12時半にはエミルも自室にこもった。

カーテンを閉め切り、電気を消してベッドに仰向けに横たわった。それからエミルは少しづつ気持ち落ち着けていった。

いつものように、少しづつ雑念を払っていく。

ゆっくりとした呼吸を続ける。吐くのも吸うのも、20秒近くかける。そうすることでちょうど額の裏側に位置する松果体が刺激される。松果体は異次元とのパイプとなる器官なのだ。

ゆっくりりと、ゆっくりりと、呼吸を続ける。

頭がすっきりとしてきたころ、大地のエネルギーを足もとから吸い上げて頭頂から外に出し、それを放射状に回してまた足もとに戻すというのを始める。ちょうどリングゴの形にエネルギーが自分の周囲を包むようにイメージをするのだ。

次に天のエネルギーを頭頂から体内に入れ、足もとから出して頭頂部にまた回す。こんどは反対向きのリングゴの形だ。

そのイメージを何度も何度も繰り返すうちに、一段階上の次元の世界に、実際にエネルギーの球体ができあがる。エミルのエーテル体は、その球体に守られる。

エミルの意識は夢うつつに似た状態に入っていく。そこで覚醒と眠りの間で少しだけ覚醒に傾く微妙なバランスをとりながら、意図を言葉にしていく。

「リリー、リリー、お話があります。リリー、リリー、お話があります」

何分かこの言葉をゆっくりと心の中で繰り返した。

すると暗闇の中に青い洋服を着たリリーが現れた。

エミルがまだ幼稚園の頃の、60代になったばかりのリリーの姿だった。

白髪に近い藁のような色をした髪をうしろでまとめ、青いデニムのスカートに、ダンガ

リーのシャツを着ている。

高いわし鼻のつけねで青く優しい瞳をキラキラさせて、エミルを見ていた。

「頼みたいことがあるのね。ああ、言わないで、わかっているから」

リリーはエミルにそう言った。正確に言えば、そういう意味の思考が、まるで小包の箱のようにリリーの脳に届くのだ。その箱のフタを脳が開けると言葉に変換される。それが高速でおこなわれる。そう言ったほうがよいだろう。

「ありがとう、リリー」

リリーはやさしくほほ笑むと、突然、一本の青く輝く棒になった。そしてどこまでもどこまでも伸びていく。その青い棒は真っ暗闇の中に浮かび、微細に振動している。棒の端がこちらを向いた。それは果てしなく続く、一本の筒だった。

突然、大澤さんの姿が現れた。大澤さんは両手で一枚の紙を胸に抱くようにして持っていた。大澤さんは無表情のまま、筒の前に立った。すると大澤さんが空中に横たわるように浮かび上がり、そのまままるで吸いこまれるようにして筒の中に入ってしまった。

青い筒は振動し続け、そしてあっという間に縮んで人間の背の高さになったかと思うと、リリーの姿に戻っていた。

リリーはニコニコ笑っている。

「大澤くんは自力で戻ってこれる」

リリーからそんな思考がやって来た。

「ありがとう、リリー」

リリーは、どういたしましてというふうに着をすくめると、姿を消した。

リリーから放射されたとしか言いようのない、温かく、幸せな何かのエミルの背骨でふるえていた。

エミルは徐々に意識のバランスを覚醒のほうに戻していくと、やがてゆっくりと目を開けた。

涙が幾筋も頬を伝っているのを、いま、初めて知った。わたしは泣いていたのだ、とエミルは思った。

しばらくそのままボートとしてしていると、少ししびれたようになっていた頭がだんだん日常の意識に戻って行った。

エミルは起き上がると、深呼吸をなんだか繰り返して、そしてベッドから下りて部屋の外に出た。大澤さんの部屋に行ってみようかと思ったが、考え直して、食堂へと向かった。

食堂の観音扉を開けると、アンジェリーナと天道さんのあいだに、なんと大澤さんがいた。左手の小指にはバンドエイドが巻かれていた。

「あれ？ もう戻ったの？」とエミルが言うと、大澤さんはニコニコしながら、「時間の流れ方が違うんですよ、あっちとこっちでは」と言った。「ぼくは5分くらいかけてルミさんに説明したつもりなんだけど、たぶん、こちらの時間では5秒ぐらいなのかもしれないです」

「うまくいったという実感があるので、早く知らせたかったんだってよ」と天道さんが嬉しそうに言った。

「よかった」

「さあ、次は」とアンジェリーナが言った。「セー又川が確認する番ね。ちゃんと正しくルミさんはメッセージを受け取ったかどうか。13時30分ね、次の交信は」

「うん」とエミルがうなずいた。

そのとき、ケプラーハウスの駐車場から車のドアが閉まる音がボタンボタンと聞こえてきた。

「高村さんたちだな」と天道さんが言うと、立ち上がり、食堂を出て行った。

「さあ、わたしの出番もうじきね。ね、大澤君」とアンジェリーナが言うと、大澤君がまかせてくださいいとも言わんばかりに、右腕をまげて上腕の筋肉を自慢げに隆起させた。

セーヌ川と交信しようと二段ベッドの下に横たわって目をつむり、全身をリラックスさせ、意識を集中させていたそのとき、近づく人の気配を感じた。

半分トランス状態のまま、薄目を開けて横を見た。

すると、なんと、トレーラーの壁を通り抜けるようにして大澤さんが中に入ってきたのだ。

Tシャツにチノパンといういつもの格好で、大澤さんにはこやかな顔で、一生懸命にルミさんに何ごとかを語りかけるのだが、まるで、電波状態が悪い中での携帯電話のように途切れ途切れにしか聞こえない。

こんなにそばにいるのにと、ルミさんは少し悲しくなったそのとき、大澤さんが自分の

手にしているA4大の紙をしきりに振っているのに気づいた。

赤い文字が揺れている。読もうとしても、まるで文字がクネクネと動きまわり、何と書いているのかわからない。

そうか、大澤さんが紙を揺るから、文字も揺れるのだと思った。

大澤さんは、何語かわからない言葉で話し続けると、その紙をテーブルの上に置いた。すると、文字の動きが少しずつ静まっていった。読めそうだとルミさんが思ったその時、大澤さんはまた壁を通り抜けて去って行った。笑いながら、大喜びして。

ルミさんは目を開けた。そして目が開いたことに驚いた。目を開けていたつもりが、目は閉じられていたのだ。だから、いま、確かに目を開けたのだ、そうルミさんは思った。テーブルの上を見た。

何もなかった。確かに大澤さんはそこに大事なことが書かれていた紙を置いたはずだ。だが、いまは何もない。さっきと何も変わらない。テーブルの上には白く小さな目覚まし時計がポツンとあるだけだ。

ルミさんは、しかし、すぐに気づいた。

あれはアストラルの紙なのだ。

だから振動数の高い次元に移動すれば、その紙は存在しているはず。

ルミさんは二段ベッドから下りてテーブルの前まで行くと、ソファに腰をおろした。

それからテーブルに向き合ったままルミさんは再び目を閉じ、からだの力を抜き、瞑想の状態に入っていた。

そして十分に集中ができたとき、目を開けた。

テーブルの上に紙があった。大澤さんの置いていった紙があった。

文字は小刻みに振動していたが、はっきりと読み取れた。

《午後3時に西条さんの居場所を以下のように組織に伝えること。

・新宿メトロホテル

・安斉警部の部下だと声をかけること

以上。これは計略だから心配無用。

もうすぐ救出に向かう。がんばれ。》

その言葉をしっかりと脳に刻みつけ、それから再び目を閉じ、そして再びゆっくりと目

を開けた。

テーブルの上ですであの紙はない。

13時30分の交信の時に、セーヌ川に伝えなければ。大澤さんが運んできたメモがちゃんと読めたことを。

ルミさんは冷蔵庫からまたミネラルウォーターを1本取り出すと、ゴクゴクと飲みほした。ものすごくのどが渴いていた。

比較的涼しかったトレーラーの中も、午後になり、蒸し暑くなってきた。でも、窓は閉めたままдейようとしてルミさんは思った。周囲の音で集中を途切れさせたくなかったのだ。

48

午後2時5分。

大澤君を助手席に乗せ、アンジェリーナのミニクーパーがケプラーハウスを出発した。

井の頭通りに出てから山手通りに出、それから神泉の交差点から首都高速に入った。

連なるビルの向こうにひとときわ高い東京ミッドタウンが見えていた。

アンジェリーナがアクセルを踏むと、ブーンとミニクーパーは加速し、二人のからだはシートに小気味よく押しつけられた。

*

テーブルの上の目覚まし時計が午後3時ちょうどを指したのを見て、ルミさんはトレイラーの小窓の前に立ち、それから窓を押し開けた。隣に並んで置かれたもう一台の白いトレイラーに向かって、ルミさんはこう叫んだ。

「居場所がわかったわ!!」

返事が無かった。もう一度叫んだ。

「居場所がわかったって言ってるの!!」

ボタンというドアの音がして、複数の人間の足音がしたかと思うと、ガシャガシャとロックをはずして二人の男がトレイラーの中に入ってきた。ひとりは、あのサングラスにスーツの男で、ブリーフケースを持っている。

もう一人は、おそらく、初めて見る男で、坊主頭でガツシリしたからだの男だった。右耳のピアスがいかつい顔には不自然に思えた。その男が言った。

「どこにいる？」

ルミさんはソファに腰を下ろすと、ゆっくりと、一語一語区切るようにこう言った。

「新宿、メトロ、ホテル」

「新宿メトロホテルだな？」

ルミさんはうなずくと、続けた。

「安斉警部の、部下だと言うと、ついてくる」

「アンザイ警部の部下と言うと西条は信じてついてくるってことか？」

ルミさんはうなずいた。

二段ベッドの下に腰かけ、アタッシュケースを机がわりにしてノートにメモを取っていたスーツの男を坊主頭の男が振り返ると、スーツの男はこれで大丈夫だというようにうなずいた。

「ありがとさんよ。もうしばらくはここにいてもらうがな」と坊主頭の男は言い残して、二人はトレーラーの外に出て行った。

た。
ルミさんは、フーツと大きなため息をつくとき、目をつむり、ソファに背中をもたせかけた。

*

午後3時10分。

緒形大三郎の秘書から天道さんの携帯に電話が入った。

「教祖様はいま三昧から現実界へとご帰還されました。ご依頼の件、結果が出たとのことでございますので、至急、教団本部までご参集ください」

天道さんは礼を言って電話を切ると、「さあ、出発です」と高村の父、大畠編集長、そして週刊未来のカメラマンに向かって言った。

エミルが玄関まで見送りに行った。

駐車場から大畠編集長とカメラマンが乗ったボルボのステーションワゴンと、天道さんと高村の父が乗ったCX5が、順に姿を現し、エミルに手を振りながら、走り去った。

エミルは食堂に戻った。

ひとりになった。

セーヌ川は、緊急時のルミさんとの交信に備え、部屋にこもったままだ。

しんとした食堂の中に、夏の午後の白い光がまぶしく射しこむ。

エミルは庭に面したフランス窓のところまで行くと、白いレースのカーテンを左から引いていき、それから右から引いていき、まん中で二つを合わせた。

*

午後3時25分。

アンジェリーナのミニクーパーは、くねくねと曲がりくねった道を通り過ぎ、利根川の河川敷へと出た。

首都高から常磐自動車道を通り、およそ1時間20分で到着したことになる。

ハンノキなどの細い枝の突き出た背の高い樹木が生い茂っていたかと思うと、アシの群れが広がっていたり、ガマがあちこちに群生していたりと、広い河川敷一帯はさまざまな植物によって視界が閉ざされ、まさに森の中に入ったようだった。

ミニクーパーはT字路を右に曲がり、県道の高架のほうまで行くと、草むらと草むらの間のスペースに車を隠すようにして停車した。

T字路を左に行けば、セーヌ川が透視した、ルミさんが監禁されているトラILERがあるあのポイントがあるはずだった。

二人は車を降りると、草むらに身を隠し、道路の先の方を見つめた。

おもむろに大澤さんは双眼鏡をリュックから取り出すと、監視を始めた。

太陽はまだ真上近くにあり、熱線のような夏の光をあたり一面に降り注いでいた。セミの鳴き声が遠くから聞こえてくる。

49

「神園田と思われる男、発見。ホテルファサード西手前、レストランの前に停車した白のクラウン、助手席」

午後3時45分、新宿メトロホテル前で従業員に扮装した刑事からの連絡が覆面指揮車に

入った。

「至急、確認せよ」

安斉警部がそう命じると、次いで一斉通信でこう告げた。

「神園田と思われる男を発見。マル暴のクルマに注意せよ」

ホテルから100メートルほど離れた駐車場に停められたマイクロバスの中には、6台の覆面パトロールカーと様々な地点に散らばって監視を続ける私服刑事たちと交信するためのデジタル無線装置、また、数人の刑事がカバンや帽子などにしのばせる超小型カメラや車載カメラからの映像を表示するディスプレイシステムが積まれていた。

安斉警部はそのディスプレイの前に陣取り、その両側では部下が緊張した面持ちで機器を見つめている。

「確認、確認、神園田に間違いなし。引き続き、監視」と無線が入ったかと思うと、すぐにまた別の刑事から無線が入った。

「マル暴らしき男4人が乗ったクルマ発見。黒のトヨタ・アルファード。ホテルのファサード、東側コンピニの前に停車」

「こちらホテル玄関。マル暴確認。4人のうちひとり、極東権田組の者と推認。残り3

人は不明」

「マル暴、運転役を一人残し、3人降車。ホテル玄関へ向かっている」

安斉警部がマイクをつかんで言った。

「遠藤巡查。マル暴3名、ホテル内にもうすぐ入る。視認できたら、行動にうつれ。佐々木巡查、準備をしろ」

「了解」「了解」と2名同時の返信が入った。

「全車に次ぐ。マル暴のクルマは、黒のトヨタ・アルファード。マル追の用意せよ。ホテル内から戻ったらすぐに逃走するはずだ。決して見失うな。また、神園田担当車も同様。」

正木巡查は神園田の電話連絡等監視して逐次報告のこと」

「了解」

ディスプレイには、3人の短髪のいかつい男どもがホテルのファサードの下、ホテルの中に入っていく様子が映し出された。3人は、夏だというのに、3人とも黒いジャケットを着込んでいた。

*

ホテルの広々として華やかなロビーはチェックインする客などでにぎわいを見せていた。ロビーの奥では巨大なガラスごしに中庭の緑がキラキラ輝いている。

高い天井からはシャンデリア風の照明がいくつも垂れ下がり、黄金色の光を落ち着いた赤色のジュウタンの上に降り注いでいた。

ロビーの右手にかけては、黒の丸みを帯びたデザインのソファがいくつも並び、待ち合わせをしている人など、十数人が思い思いの姿勢で腰かけている。その右手のさらに奥には、コーヒールラウンジが広がっていて、食器やカトラリーが触れあう音が聞こえてくる。

ロビーの左側にはレセプションカウンターが長く伸び、足もとにスーツケースを置いた何人かの客が、カウンターにもたれるようにしてチェックインの手続きをしている。

回転ドアをくぐり、ホテル内に入ってきた3人の男は、明らかにこの場所には不似合いな黒ずくめの風体で、その表情もこわばっていた。3人は誰かを探すように、ホテルの入り口近くからロビーのほうに向かって鋭い目をこらした。

そのとき、レセプションカウンターから「西条様、西条様」と女性係員の呼ぶ声がした。短髪の3人はそろってその声のほうに顔を向けた。

するとロビー右手のコーヒールウンジからポロシャツにチノパンの、銀縁の眼鏡をかけた中年の男性がカウンターに向かって歩いて行った。

その男性は女性係員から電話の受話器を受け取ると、二言三言話ただけで、受話器を戻し、こんどはロビーの右手に向かうとソファに腰を下ろした。

いかつい3人の男は無言のままその銀縁の眼鏡の男に近寄ると、ひとりが耳元で何かをささやいた。銀縁の眼鏡の男は数度うなずくと立ち上がり、3人の男と一緒にホテルの外へと出て行った。

*

安斉警部の前のディスプレイに、3人の男が銀縁の眼鏡の男を取り囲むようにしてホテル内から出てくるのが映し出された。男たちは無言のまま、やがてカメラの視界から消えた。

「アルファードに4人乗車。アルファードに4人乗車」

「神園田、携帯電話で通話中。内容は不明。いま、通話終了」

安斉警部が右横の部下に言った。

「佐々木巡査の隠しマイクはちゃんと機能しているか？」

「はい。少し、音量を上げますか？」

「ああ」

安斉警部はヘッドホンを持ち上げ、右耳に当てた。

佐々木巡査のベルトに仕掛けられた無線機からの音声が入ってきた。

《西条だな？》

《……》

《西条なんだな？》

《あんたら、警察じゃないのか？》

《なわけねえだろ、アホンダラ》

《たけし、カミなんだかってヤツに電話しろ、西条をつかまえたって》

《は。……あ、西条、つかまえました。……ういっす。……カミなんどかが、打ち合わせ

通りお台場へ向かえと言っています》

《よし。本間、出せ》

《降ろしてください。降ろしてください！！ 降ろしてください！！》

《さわぐんじゃねえ。おとなしくしないと、こいつでぶっ殺すぞ》

《それ、本物の鉄砲ですか？》

《あたりめえだ》

安斉警部が一斉通信のボタンを押した。

「アルファードはお台場へ向かう。なお、マル被はチャカを持っている。繰り返す、マル被はチャカを所持。銃刀法違反で現行犯逮捕するので指示を待て」

すぐにまた無線が入った。

「神園田、また携帯電話で通話開始。内容は不明。顔が笑っている。顔が笑っています。携帯を持ったままおじぎをしている。おじぎをしている。いま、通話終了。運転手に話しかけている」

安斉警部がまた一斉通信のボタンを押した。

「全車に次ぐ。しかるべきところで、強制停車、現逮。指示を待て」

すぐに緊迫した様子で無線が入った。

「アルファード、発車。アルファード、発車。301号車、これよりマル追。これよりマ

ル追

「302号車、これよりマル追」

「303号車、これよりマル追」

「同じく304、マル追」

「神園田のクラウン、発車。401号車、これよりマル追開始」

「402号車、神園田のクラウンをマル追」

安斉警部が一斉通信のボタンを押して叫ぶように言った。

「逃がすなよ！！」

指揮車の運転席に向かって安斉警部は「出せ、出発だ！！」と声を上げた。

安斉警部は携帯電話を取り上げると番号をタップし、それから右耳に電話を当てた。

「エミルさんですか。安斉です。おそらく、神園田はいま、教団に西条さんをつかまえた
と報告したはずですよ。……はい。では」

そう言って、安斉警部は電話を切った。

覆面指揮車は甲州街道を一路東へ向かって走り出した。

アンジェリーナが腕時計を見るときもう午後4時15分だった。河川敷に到着してもうすぐ1時間になる。動きはまだ何もなかった。

ジーンズにTシャツのアンジェリーナは、日に焼けないようにハンカチで頭と顔をおおったまま、地べたにあぐらをかいてすわっていた。

すると草陰から双眼鏡で様子をうかがっていた大澤さんが、「出てきた」と小声で言った。アンジェリーナが立ち上がり、大澤さんの背後から目をすがめるようにして道の先の方を見た。黒い小さな点が次第に大きくなり、その黒の点のうしろに白い四角が見えた。それはだんだん大きくなり、白いトレーラーを引く車の姿になっていった。

よく見れば、黒いクルマは先頭だけで、2台目のクルマは赤い色をしていた。それぞれ1台ずつトレーラーを引いてこちらに向かってゆっくり走ってくる。

やがて、あのT字路のところによって来ると、さらにスピードを落とすし、慎重にこちらから見て左側に列を作るようにして曲がると、2台のクルマの姿は見えなくなった。

「さ、行こう」とアンジェリーナがミニクーパーに乗ろうとすると、「まだあと1台」と大澤さんが言った。「ベンツが残っているはず。もう少し待ちましょう」

それから5分ほどしたところ、大澤さんが予測したとおり、土煙をあげながら黒いかたまりがこちらに向かってきた。それはしだいにセダン型のクルマの姿となり、例のT字路のところで右折し、そして姿を消した。

「もう大丈夫でしょう」と大澤さんは双眼鏡をリュックの中にしまった。

「行きましょう」とアンジェリーナが運転席に座ると、大澤さんも助手席に乗りこんだ。

エンジンをかけ、ゆっくりとクルマを草むらから道に出すと、トレーラーが出てきたほうへとまっすぐに走らせた。

両側にアシの草が生い茂る中を進んでいくと、大澤さんが、「あの高い木がたくさん生えている雑木林みたいなのところがあるでしょ。あのあたりからトレーラーが出てきました」と前方を指さした。

ミニクーパーは、大澤さんが指さしたところでいったん停止した。その一角だけが森のようになっており、その森の中に続く狭い砂利道が見えた。

「アンジーさん、ぼくが行って確認してくるから、ここで待っていてください。何かあった

らクラクションを鳴らして、逃げてください。ぼくはぼくで隠れますから、いいですか？」

「わかったわ」

大澤さんはクルマを下りると、リュックを背負い、森の中へ続く小道の奥へと周囲を警戒しながら入って行った。

50メートルほど進むと、急に視界が開け、広場のようなスペースがあった。大澤さんは木陰に隠れるようにして、その広場の様子をうかがった。クルマの姿はなかった。そして、さらに目をこらして探ってみた。

いた。ルミさんがいた。

広場の奥のほうの太い木にもたれるようにして座っていた。

わながないかどうか、大澤さんは用心深くルミさんの周囲を観察した。だれもいないし、なにもない。ルミさんだけがいる。

それでも大澤さんは警戒を解くことなく、その広場にゆっくりと入っていった。

姿を現した大澤さんにルミさんが気づいた。

その目や眉が喜びの表情を浮かべたのが遠目からもわかった。

口にタオルのようなものが巻きつけられている。猿ぐつわをかまされているのだ。

大澤さんはルミさんのもとに駆け寄った。

1本だけ高く伸びたニレの木の幹に、ルミさんは後ろ手にしばられていた。

大澤さんはまず口のまわりにきつく結ばれていたタオルをほどいた。

「ふーっ」と大きな息をすると、ルミさんは「幽体じゃないわよね？」と笑った。

「はい、生身の肉体です」と大澤さんも顔に笑みを浮かべた。

それからロープをほどくと、ルミさんは「よいしょ」と言いながら立ち上がり、首を回したり、屈伸をしたりして、全身を伸ばした。

「ありがとう」

「向こうでアンジーさんが待っているから」

そう言うと、大澤さんは足もとに何かを見つけて、「これ、なんですか？」ときいた。

「あ、わたしの食べかけのパン。あいつら、捨てて行っちゃった」とルミさんが答えた。

「さ、行きましょ」と大澤さんがルミさんのひじをとって、引っぱるようにして歩き出した。

森を出ると、目の前にアンジーの赤いミニクーパーが停まっていた。運転席の窓を開けてアンジーが「ルミさん」と叫んだ。

「助かったわ」とルミさんも片手を上げて答えた。

後ろのドアを開けてルミさんを乗せると、大澤さんはクルマのうしろからまわりこんで助手席に乗りこんだ。

「さ、帰りましょ」と嬉しそうにアンジェリーナは言ってエンジンをかけると、その場でUターンをし、来た道に戻っていった。

大澤さんが携帯で Emilie に報告をした。

「Emilieちゃん。ルミさんを無事に助け出しました。これから戻ります」

バックミラー越しに、安堵に目をつむり、座席に深々と身を沈めたルミさんの姿を見て、アンジェリーナは同じような安らかな気持ちにひたった。

51

黒のアルファードと白のクラウンは、東京レインボウブリッジを渡り、お台場を過ぎ、海底トンネルを抜けて埋め立て処分場へと出た。

6台の覆面パトローカーと安斉警部を乗せた覆面指揮車も、気づかれないように埋め立て処分場へと向かった。

安斉警部が一斉通信のボタンを押してこう言った。

「連中は埋め立て処分場の南端に行くつもりだ。そこでPMに遺書を書かせ、海に突き落とす。そういう会話を傍受した。アルファード、クラウン、2台が停車した段階で、すぐに全車で取り囲め。まずはシヨクシツ。応じない場合は、即刻現逮。くりかえす、マル被乗車の2台、停車した時点で全車で取り囲み、シヨクシツ。応じない場合は、即刻現逮」「了解」という返信が次から次へと入ってきた。

やがて、いちばん距離が近いところを追尾していた覆面パトローカーから緊迫した声で通信が入った。

「301号車より。アルファード、クラウン、2台並んで停車。場所は埋め立て地南端。繰り返す。アルファード、クラウン、2台とも停車。埋め立て地南端」

「よし」と安斉警部が応じた。「全車、急行して取り囲め。チャカに注意しろ。繰り返す、マル被の発砲に注意」

安斉警部の目の前のディスプレイに、301号車の車載カメラからの映像が映し出され

た。

建物も何もない埋め立て地の中央をまっすぐ伸びる道路の奥に停車している黒と白のクルマが見えた。ディスプレイの中でその2台のクルマがグングン大きくなっていく。白のクルマから二人の男が出てくるのが見えると、その男たちは近づく覆面パトロールカーに気づいたのか、突然どこかへと走り出していくのが映し出された。

安斉警部が通信ボタンを押してこう叫んだ。

「神園田とマル被1名、逃走。神園田とマル被1名、逃走。401号、402号、追跡せよ。401号、402号、追跡せよ。301、302、303、304はマル暴4名を確保せよ。発砲に注意、発砲に注意」

黒のアルファードがディスプレイいっぱいに映し出されると、車載カメラは動きをとめた。覆面パトロールカーが停車したのだ。

*

黒のアルファードを取り囲むようにして、4台の覆面パトロールカーがタイヤをきしま

せて急停車した。覆面パトロールカーからおおぜいの私服警察官が飛び出してくると、銃をかまえてアルファードを取り囲んだ。まもなく、指揮車が到着して、安斉警部が降りた。た。

アルファードの車内では、銀縁の眼鏡の男性を取り囲むようにして座っている男たちが不意を突かれて驚いた表情を浮かべ、クルマの外を見まわしていた。

安斉警部が駆け寄ると、後ろのドアの窓をたたいてこう言った。

「お聞きしたいことがある。クルマから降りてもらえませんか」

男たちは呆然とした表情を浮かべて、安斉警部を見つめた。

「お聞きしたいことがあります。クルマから降りてください」と安斉警部は繰り返した。

すると銀縁の眼鏡の男性の隣に座っていた男が、「じゃかしいわ!!」と叫ぶと銃を取り出し、その眼鏡の男性の頭に銃口を向けると大声で言った。「クルマをどかせ。こいつの頭がぶっ飛んでもいいのか。クルマをどかせ」。その声は閉ざされた窓のせいでもぐもぐもって聞こえた。

その瞬間、銀縁の眼鏡の男性は左手で素早く男の手から銃を払いのけると、同時に右手に持った何かを男のわき腹に押しつけた。男ははじかれたように座席の上に倒れ込んだ。

嘸然とするまわりの男たちを尻目に、銀縁の眼鏡の男性はクルマのドアのロックを内側からはずした。直後、駆け寄った私服刑事たちがドアを開け、倒れ込んでいる男を車内から引きずり出すと、銀縁の眼鏡の男性も転がり出るように車外に脱した。

「出てきなさい」と安斉警部が叫ぶと、車内に残った3人は抵抗をあきらめ、それでもふてぶてしい表情だけは消すことなく、ゆっくりとクルマから降りてきた。

「銃刀法違反で現行犯逮捕する。16時47分」

安斉警部がそう宣言すると、警察官たちは4人の男たちに次々と手錠をかけ、それぞれ別々の覆面パトローカーに乗せた。

「佐々木巡査、ご苦労だった」と安斉警部は、その銀縁の眼鏡の男性に声をかけた。

「はっ」と男性は短く返事をする、手に持っていた小型のスタンガンを、チノパンの裾をあげ、足首に巻かれていたホルダーに戻した。

「眼鏡、似合うじゃねえか」と安斉警部がニコリとすると、西条君のお父さんに扮していた佐々木巡査は「恐縮です」と同じようにニコリとした。

そのとき、指揮車のドアから顔を出した警察官が、「神園田、ほか1名、確保。神園田、ほか1名、確保。マル同」と叫んだ。

すぐに2台の覆面パトロールカーがやって来て指揮車と並ぶようにして停まった。安斉警部が振り向くと、その1台の後部座席に神園田の姿があった。

前をいく黒塗りのベンツが車線の左に寄った。前方に「柏IC」の標識が見えた。

天道さんは腕時計にチラリと目をやった。午後5時を少し過ぎていた。

教団本部を出発したのは、およそ1時間前の午後4時ごろだった。

教団本部の駐車場で待っていた天道さんたちに髪をきっちり七三に分けた男の秘書がやって来てこう告げたのだった。

「これから出発します。教祖様の車は、あちらに停まっているベンツです」と秘書は本部の玄関の車寄せのほうを指さした。天道さんたちが視線を向けると、ちょうど緒形大三郎がその黒のベンツに乗りこむところだった。

秘書が続けた。

「教祖様のベントツについて教えてください。ちなみに、神泉町より首都高三号線に入り、都心方向へ向かい、常磐自動車道に入る予定だそうです。見失わないように」

「わかりました」と天道さんが言うと、それぞれが車に乗りこんだ。関東テレビのクルーを乗せたハイエースもすでに道路わきで出発の時間を待っていた。

全員の準備ができるのを待っていたかのように、緒形大三郎を乗せたベントツがゆっくりと車寄せから教団本部の門を抜け、車道に出て行った。

天道さんのCX5、週刊未来組のボルボのステーションワゴン、そして関東テレビのハイエースの順に連なり、一行はベントツを先頭に南平台のお屋敷町を進んだ。

それから1時間後。いま一行は常磐自動車道を柏インターチェンジで降りるところだった。

県道に入ると、車列は南下し、つくばエクスプレスの走る高架をくぐり、市街地を進んだ。やがて左折してこんどは一転して北上し、うぐいす色の水がゆったりと流れる利根川にかかる長い橋をわたった。川の兩岸に広々として緑豊かな河川敷が広がっていた。天道さんが視線を右に向けるとゴルフコースが見えた。

利根川を渡ってすぐにクルマは県道をそれ、住宅街の中に入っていった。クネクネと続

く道を走ると、やがてアシやガマが生い茂る河川敷に出た。

T字路が見えてくると、緒形の乗ったベンツはためらうことなく左折した。しばらく走ると右手にこんもりとした森のようなものが見えてきた。黒のベンツはその森の前で停まった。

天道さんたちと高村の父が乗ったCX5、大畠編集長とカメラマンを乗せたボルボ、そしてテレビクルーの乗ったハイエースが順に停まり、ボタンボタンとドアが閉まる音がして、全員がクルマから降りると、ベンツのまわりに集まった。

ベンツの助手席から髪を七三に分けたまた別の秘書の男が降りてくると、集まっている男たちにこう言った。

「教祖様は、小山氏がこの森の中におっしゃっています。ベンツを降りるところから、できればカメラを回して欲しいとご所望です」

週刊未来のカメラマンもテレビカメラマンも無言のままカメラの準備を始めた。テレビクルーの音声担当がブームという長い棒につけたマイクの準備を終えると、「OKです」と言った。

秘書が後部座席に乗る緒形に指で○印を作って見せると、撮影スタッフたちに「では、

お願いします」と言い、自分はクルマの反対側に走って姿を隠した。

午後5時とはいえ、夏至を過ぎたばかりの太陽はまだ高く、ギラギラとした光であたりいっぱいを満たしていた。

白いジャケットにグレーのズボンといういでたちの緒形大三郎はドアを開けてクルマの外に出ると、背筋を伸ばして立ち、両手を胸の前で組み、目をつむって何ごとかをつぶやいた。しばらくそのまま立っていたが、ゆっくりと目を開けると、テレビカメラを意識してこう言った。

「やっぱりそうです。小山さんはこの森の奥にいます。彼女の生命の息吹が感じられる。生きておる。彼女は元気です。さあ、行きましょう」

緒形は先頭に立って、砂利道を森の奥へと向かって言った。それをテレビの撮影スタッフが追いつき、週刊未来のカメラマン、そして大畠編集長、高村の父、そして天道さんが続き、しんがりには緒形の秘書がいた。

50メートルほど先が広場のように開けているのがわかった。

緒形はその空間に向かって自信たっぷり、しかし、なにかしらもったいぶって進んでいく。砂利道が途切れ、その広場に出る直前で緒形は立ち止まり、それから振り返るとテ

レビカメラに向かってこう言った。

「この先に小山さんはいる。わたしの心眼にはっきりとその姿が見えた。さあ、行きましよう」

緒形は広場のほうにからだをひるがえすと、こんどは足早に向かっていく。

緒形は広場に入った。だが、緒形はその場に立ちつくした。それから、ぐるりとからだを一回転させて、その場をじっくりと見まわした。

テレビカメラもまたぐるりと広場をなめまわすようにして撮影した。

そこには自分たち以外、誰もいなかった。

緒形の表情はみるみる硬く、険しくなった。

広場の隅のほうに何かを見つけた緒形はそちらに駆け寄ると、ロープとタオルを拾い上げ、こう言った。

「ここにあるのはきつと小山さんをしばってたロープと、えー、このタオルで猿ぐつわをかまされていたに違いない。小山さんがついさっきまで、ここにいた証拠です」

さらに緒形は周囲を見まわすと、地面の上に落ちている食べかけのパンを見つけると、こう言った。

「ここに食べかけのパンがある。小山さんは、ここに縛られながらも、このパンを食べて救出を待っていたのではないでしょうか」

すると、テレビカメラの横にいるディレクターがこう質問した。

「あの、さっき、タオルで猿ぐつわをかまされていたとおっしゃいましたが、その状態でどうやってパンが食べられるんでしょうか」

緒形は返答に窮したが、すぐに「タオルは猿ぐつわではないかもしれませんが。いずれにしても、わたくしの透視どおりにここに小山さんがいたのは確実に思われます」と言った。

「じゃ、だれがロープをほどいたんですかね」とディレクターがたまたみかけると、緒形は黙り込んでしまった。

すると一羽のカラスがバサバサと飛び降りてくると、食べかけのパンをくちばしでくわえて飛び去っていった。

「撤収しよう」とディレクターが言うと、テレビカメラマンは肩にかついでいたカメラをおろし、テレビクルーは去って行ってしまった。

緒形は狐につままれたような顔をして広場のまん中に立ちつくした。その姿にレンズを

向けて週刊未来のカメラマンが何度もシャッターを切った。

「約束と違えますね、緒形さん」

天道さんはそう言い捨てて、高村の父たちとともに広場に背を向けた。

「フラター・ヨーゼフ、フラター・ヨーゼフ！！ どういうことだっ！！」という緒形の怒声が背後でした。

天道さんたちは歩きながらおかしそうに顔を見合わせ、高村の父は親指を立てて見せた。CX5の運転席に座り、シートベルトを締めると、天道さんはiPhoneを取り出し、番号をタップした。

「ああ、エミルちゃんかい。こちらは予定通り、芝居は終わった。……そうか、ルミさんもそちらに向かっているところか。よかった、よかった。じゃ、我々もこれから帰るよ」
3台の車は、夏の白い光の下に黒のベンツだけを残して、その場を走り去った。

エミルはひとり暖炉を背にして椅子に腰かけ、テーブルの上にはおづえをついた。

テーブルの向こう側、庭に面したフランス窓にかかった白いレースのカーテンがほんのり黄金色の色合いを帯びて輝いている。さすがの夏の光の強さもそろそろ衰えはじめ、夕陽のスペクトルに変化しつつあった。

天道さんからの報告があった後、目の下にくまを作ったセーヌ川は「休みます」と言って2階の自室へ引き上げていった。無理もないなとエミルは同情した。きのうから今日にかけて、ほんとうに目まぐるしい24時間だった。セーヌ川はルミさんとの交信にずっとかかりきりだった。しかも、自分が発信できなければルミさんの命にかかわるというプレッシャーを受けながら。

そのルミさんもうじき帰ってくるだろう。

調理室では家政婦の佐藤さんがせっせと夕食の準備中だ。

きょうがどんなに大変な日だったかなど、佐藤さんはちっとも関心がない。恥ずかしがり屋の佐藤さんは、なるべく外部の人と会わないように、ケプラーハウスを出て買物にいくタイミング、調理室に入るタイミング、出るタイミングなどを抜群の精度と感性で計算して行動する。しかも佐藤さんは勝手口と裏口の達人だ。だから佐藤さんがエミルたち

とまるで違う世界に住んでいるような錯覚に陥ることがときどきある。

でも、それでも、なぜか、きょうはいつもよりおいしそうな匂いが調理室から漂ってくる。佐藤さんも、少しは何かがふだんと違うと気づいたのだろうか。

玄関がにぎやかになった。

あの声は麻里とジルとカメさんだ。

食堂の扉が開き、3人がにこやかな笑顔をふりまきながら入ってきた。

「ご苦労さまでした」

そうエミルが言うと、麻里とジルがピョコンと頭を下げた。

カメさんが、「さあ、座って」と二人のために扉からすぐの椅子を引いた。

「西条さん、わたしの顔を見て、とても喜んでくれました」とエミルに向かって麻里が言った。「わたしのおかげでみなさんが教団の人じゃないと100%信じられるって」

するとジルが「週刊未来の記者さんに、ぼくらまでごちそうになっちゃって。あんな高級レストランの個室なんて、生まれて初めて入りました」と言うと、カメさんが「いいんだよ、気にしなくて。どうせ会社の経費だしさ、これから大スクープでぼろ儲けするんだから、あの出版社」と手をひらひらと振った。

「それで」とカメさんがエミルに視線を向けて続けた。「午後4時ごろに刑事さんが合流して、いまは原宿署で事情聴取を受けているはず。ぼくらも一緒に原宿署まで行ったんだけどね。もしかしたら、もう、西条君のお母さんと詩織さんも原宿署に到着したところかもしれないなあ」

「今夜はどうするのかしら？」とエミルが聞くとカメさんがこう答えた。

「もちろん、自宅に帰れる。家族3人水入らずで過ごせるみたい。よかったね」

「警備は？」

「これから数日は警官があのアパートのまわりを警護するらしい。お父さんは、違う町に引っ越したいって言った」

西条君はこのことを認識できただろうかとエミルは気になった。死者には見える人と見えない人、聞こえる声と聞こえない声がある。

そのとき、あの聞き慣れた2人分のスリッパの音がした。

食堂のドアが開いて、高村兄弟の兄の顔がヌッと突き出た。「連絡しないで来ちゃって、五人の男」

「兄ちゃん、それ、ちょっとしつこい」と兄の背後で弟の勇貴の声がした。

「あれ、父ちゃん、まだ帰ってきてねえの？」と兄は言い、兄弟は麻里とジルと向かい合うようにして、調理室側のテーブルに座った。

「安田もいねえの？」と兄が言うと、「お母さんの家」とエミルが言った。

「あいつ、すげえ母親思いになったんだなあ」と兄がポツリと言った。

駐車場のほうからクルマのエンジン音がした。ミニクーパーのエンジンだとエミルにはわかった。

ボタンとボタンとドアの閉まる音がした。

ややあって、廊下を3人のスリッパがたてる足音が近づいてきた。

食堂のドアが開いて顔を出したアンジェリーナが「じゃじゃーん！！」とふざけて、ルミさんを先に食堂の中に通すと、続いてリュックを背負った大澤さんが晴れやかな表情で入ってきた。

「ただいまー！！ みなさん、ありがとう！！」とルミさんが大きな声で言った。

その声を聞きつけたのか、廊下のほうから「ルミさーん！！」という野太いセー又川の声が出てドタドタと派手な足音が大きくなり、あの巨体が食堂に飛び込んできた。セー又川は目の前のルミさんにおもわず抱きついた。細くて小さいルミさんが折れてしまうん

じゃないかと思うほど、セー又川は力強く抱きしめた。

「よかった、よかった、よかった」

そう繰り返すセー又川の目が濡れていた。

「えっ、何があったの、何が？」と高村の兄はキョロキョロと答を求めて見まわした。

「いいよ、兄ちゃんは知らなくて。寝坊して、父ちゃんの話聞かなかったからね」

「なにそれ、なにそれ？」と兄はまだキョロキョロした。

セー又川の涙を見て、エミルも思わず涙がこぼれた。アンジェリーナの目にもうつすらと涙が浮かんでいる。

セー又川の強烈な抱擁から解放されたルミさんは、フーッと大きな息をひとつつくと、「エミル、いろいろとありがとうね」と言いながらエミルに近づくと、座っているエミルの頭を胸にかかえるように抱きしめた。エミルの涙はますます止まらない。

心底ホッとしたような表情を浮かべて大澤さんがカメラさんのとなりに座ると、「それで？」と聞いた。

「ぼくの把握しているところでは」とカメラさんが話し始めた。「西条君のお父さんはいま原宿署で事情聴取中。もうじき家族対面を果たすところで、今夜から親子3人で暮らせる。

もちろん、警察の警備つき。で、エミルちゃんからさっきもらった電話によれば、安斉警部はヤクザどもを銃刀法違反と脅迫罪で逮捕、神園田は任意同行後、誘拐未遂で逮捕。これから教団に強制捜査が入るらしい」

「西条君のお父さんが握っていた秘密は、わかったのかい？」

「神園田たちが自分たちの会社で横領を繰り返していたんだ。教団のためにね。神園田の勤める会社は大手の飲料会社なんだ。手口はいくつもあつたらしくて、教団関係の会社に架空発注を繰り返して会社にお金を支払わせたり、『月の水』は神園田の勤める会社に委託製造していたらしいけど、実際よりも異常に安い値段で納品していたり、とにかく、神園田は自分の教団の部下も使って、会社を何年も食い物にしていたらしい」

「そうかあ」と大澤さんはうなずいた。

「まだあるんだ、これが！ 西条君のお父さんがなぜここまで執拗に狙われたのか。その理由がね、これだよ。西条君のお父さんはね、神園田のノートを持ち出していったんだ。そのノートは、教団の他の信徒たちがおこなっていたいろんな犯罪の証拠になるような、一種の裏の記録だったんだ。神園田は月の子どもたちの担当だった。つまり、彼の任務は月の子どもたちを養成するだけでなく、子どもたちの呪術の力を使って、教団に敵対する

人間や協力しない人間たちを脅し、屈服させるということだったんだ。だから、彼のノートには、いつ、だれに、なんのために、呪術を用いたか、その結果どうなったかが克明に記されていたってわけさ。しかも、殺人の記載もあった」

「殺人！！」とアンジェリーナが声を上げた。

「それを西条君のお父さんが失踪するときに持ち出したというわけか」と大澤さんが言った。

「うん」とカメさんはうなずくとこう続けた。「西条君のお父さんはこういった教団のすべてに批判的だった。罪の意識ももっていた。でも、会社の上司でもある神園田には刃向かえなかったんだ。ところが、教団の問題とは関係の無いサービス残業のことで会社に異議を唱えたら、追い出し部屋行きになった。これは神園田が直接命じたものじゃなかった。でも、神園田は西条君のお父さんを助けなかった。神園田は自分かわいさに西条君のお父さんの悲惨な状況に見て見ぬふりをした。半年間もね。それなのに、教団の裏仕事では西条君のお父さんをこき使った。あらゆる面で絶望感をいだいた西条君のお父さんは、まず、週刊未来に電話して脱税について匿名で告発した。教団がそれに気づくと、犯人捜しが始まった。神園田は自分に強い不満を持っている西条君のお父さんが怪しいのではないかと

思い始めた。それで教団に捕まる前に、西条君のお父さんは神園田の例の秘密ノートを持って失踪した」

「その秘密ノートはどこにあったの？」と大澤さんが聞いた。

「それがね、ビックリしないでね。なんと、西条君が持っていたんだ」

「えっ？　ちょっと待って。西条君。つまり、勇貴の同級生の西条君？」と大澤さんが驚いて目を丸くした。

「そう、西条伊織君だ。彼はお父さんが会社で不当に扱われていることに憤慨していた。社宅に住んでいたからね、会社内でのヒエラルキーや立場が近所づきあいには微妙に影を落とす。しかも、社宅内での話題が自然と会社内の話になる。だから、伊織君はお父さんの置かれた立場にとっても敏感に反応し、お父さんに同情し、そしてその上司である神園田に激しい怒りの感情をいだいたらしいんだよね。それで、ここからはお父さんの推測だけで、どうも伊織君は神園田の息子である同級生を脅したらしいんだ」

「神園田智也くんです」と勇貴が小さな声で補足した。

「そう、神園田智也くんをね、伊織君は脅した。どう脅したのかはわからないけど、伊織くんは神園田智也くんから手に入れたと言って、秘密ノートをお父さんに手わたしたとい

うんだ。それを見て、西条君のお父さんはますます罪の意識を深め、そして教団への憎しみを高め、失踪したというわけだ。秘密ノートを持っているという書き置きを神園田の机の上に残してね。神園田は西条君のお父さんが同じ社宅の自分の家になんらかの手段を使って侵入し、秘密ノートを盗み出したと思ひ込んだ。西条君のお父さんにすれば、その秘密ノートを持っていることが自分の命の担保となると思ったが、その逆で、命を狙われる羽目になった。そういうわけなんだよ」

ルミさんが、「わたしがトレーラーでメロンパンを食べているあいだに、いろんなことがあったのね」と苦笑いをした。

するとカメさんがルミさんに向かって言った。

「きょうの午後ですね、西条君のお父さんへの週刊未来と関東テレビの独占インタビューがあったんです。ぼくと麻里さんとジルくんが同席したんで、いろんな秘密、知っちゃったってわけなんですよ。この独占インタビューとひきかえてことで、ルミさんを救出するための芝居に週刊未来が協力してくれたんですよね」

「わー、ますますわかんない」とルミさんが何度も首を振った。

そのとき食堂のドアが開き、天道さんが姿を現した。

大テーブルに座っているルミさんを見つけて「おお、ルミさん、無事でよかった」と天道さんは静かに言った。

「心配かけて、ごめんさい」とルミさんがあやまるように頭を下げると、「なんの、なんの。オレこそ、申し訳ねえ。あんなヤクザどもにやすやすとルミさんをさらわれちゃまって。すまん、許してくれ」と言う食堂の扉の前に立ったまま45度からだをおりまげた。 Emilはまた涙があふれるのを止められず、しきりに人さし指で目のあたりをごしごしとこすった。それを見て天道さんが言った。

「Emilちゃん、おつかれ。あんたは天才的なシナリオライターだよ。Emilちゃんのおかげで、みんなが助かった」

Emilはうつむいたきり顔をあげることができなかった。涙がポタポタとジーンズの太ももの上に落ちてたくさんの水玉模様を作っていた。

空気の読めない高村兄弟の兄が天道さんに聞いた。「父ちゃんは？」

「父ちゃんは編集部だ」と天道さんが言った。「徹夜だと。なんでも、朝までに原稿を印刷所に入れないと、きょうの西条君のお父さんのインタビュー記事だのなんだのが最新号に間に合わないんだと」

するとアンジェリーナが「キミたちもここで夕飯食べて行きなさい」と高村兄弟に向かって言うと、立ち上がり、調理室へと入っていった。

「うわー、おいしそう。みなさん、配膳、手伝ってえ」というアンジェリーナの声が調理室からした。「冷たいスープに、冷たいカレーに、あったかいお野菜よお。佐藤さん、ありがとう!!」

「冷たいカレー？」と高村兄弟の兄が不思議そうに言うと、カメさんが、「佐藤さんの冷たいカレーがこれまた天下第一品なんだよ」と嬉しそうに言いながら立ち上がり、調理室へと向かって行った。

麻里とジルも「手伝います」と調理室へ消えた。

エミルだけがじつとうつぶいて泣いていた。

その姿を見て、高村兄弟は二人そろって、なぜだかジンとした。案の定、兄がもらい泣きを始めた。

学校から帰ると3階建ての瀟洒な社宅の前の道路に何台ものパトカーが止まっていた。智也がエントランスホールに入ると、警察官が寄ってきて、名前を聞かれた。智也が「神園田智也です」と答えると、警察官が無線のようなもので何かを言った。すぐに数人の警察官や大人たちがやって来て、智也を取り囲んだ。

坊主頭でワイシャツを着たおじさんが智也にこう言った。

「いまね、キミンちはお客さんがいっぱい入れないから、ちょっとの間、パトカーの中で待っていてくれる？」

智也が返事をする間もなく、警察官に手を引かれてエントランスホールを出ると、目の前に止まっていたパトカーの後ろの席に乘せられた。

パトカーの運転席には一人の警察官が乗っていたが、彼は智也をチラリと見ただけで、あとはじっと前を向き、スピーカーから流れるさまざまな通信に耳をそばだてていた。

そのままどのくらい時間がたっただろうか。お腹が空いたと智也は思った。

そのとき、エントランスホールから数人の男たちに取り囲まれるようにして、母親が出てきた。「お母さん」と呼ぼうとしたが、声にならなかった。母親はパトカーの中の智也

に気づくことなく、別のパトカーに乗せられてそのまま静かに走り去った。

すると母親と入れ替わるように祖母の姿がエントランスホールに現れると、警察官に促されるようにして智也が乗るパトカーに向かってきた。警察官がパトカーのドアを開け、智也に降りるように身振りで示した。

智也がランドセルを背負いなおしてパトカーから降りると、祖母は緊張した表情で智也の腕を取ってエントランスホールの中へと戻って行った。

「お父さんとお母さんは今夜はいないけど、おばあちゃんがいるから」と祖母は歩きながら智也に向かつてつぶやくように言った。

智也の家は3階だったから、エレベーターを待った。

エレベーターが1階に着いてドアが開くと、中には段ボール箱が何箱も積まれ、その横にワイシャツ姿の男が立っていた。智也の隣にいた警察官が足でドアが閉まらないように押さえながら、その段ボール箱をエレベーターから降ろすのを手伝った。

エレベーターの中が空っぽになると、入れ替わりに智也と祖母と警察官が乗り、3階へと向かった。

自宅に戻り、靴を脱いで中に入ると、まだたくさんの見知らぬ男たちがいて、家中を調

べていた。

祖母は智也をキッチンに連れて行き、テーブルに座らせた。

「おなかすいたでしょ？」と祖母は言い、「何か作るね」と冷蔵庫を開けた。するとそれを見た警察官が「冷蔵庫には手を触れないで」と大声を出した。びっくりして祖母が冷蔵庫のドアを閉めると、警察官は「申し訳ございません。キッチンはこちらから搜索するので、食事でしたら店屋物を取っていただけませんか」と言った。

祖母が「でも、わたし、ここに住んでいませんので、出前をしてくれるお店など、さっぱりわからなくて」と警察官に言うと、「あ、こんなのがありましたよ」とどこから持ってきたのか1冊のクリアファイルをテーブルの上に置いた。それは出前用のチラシやメニューを智也の母がファイルしたものだ。祖母は携帯電話からピザを注文した。

それから数時間が過ぎ、午後10時ごろ、ようやく自宅から男たちが姿を消した。騒々しかった家の中が急にシンとした。

リビングルームの窓から外を見れば、パトカーが数台、下の道にまだ止まっていた。テレビカメラをかついだ男たちの姿も何人か見えた。

智也はカーテンをしっかりと閉めると、キッチンの冷蔵庫からミネラルウォーターの『月の水』を一本取りだし、ソファに座って「緒形大三郎教団代表、いま逮捕」を連呼するテレビのニュースを呆然と見ている祖母にこう言った。

「ぼく、寝る」

「はい」と祖母は力なく返事をした。

智也は自分の部屋に入った。

ここも搜索されたのだが、部屋はむしろきれいに片付いていた。

机に向かって座り、ミネラルウォーターを飲んだ。むしよりのどが渴いて仕方なかった。

何があったのか、ぼんやりだけど予測はついた。

父親の卑劣が暴かれたのだ。それを手伝った母親もまた。そう確信した。

大嫌いな父親だったけれど、なぜか肺のあたりがヒリヒリした。

智也はベッドにごろりと横になった。

父親は刑務所に行くだろうと、智也はぼんやり思った。

母親はどうなるのだろう。月の子どもたちのことでは恐ろしい母だったが、それ以外の

ときはとっても優しかった。母も刑務所に入れられるのだろうか。

もしもそうだったら、自分はおばちゃんと二人で暮らすのかな。そうしたら転校するのかな。そんなことをばくぜんと、そして半分投げやりに考えた。

そのうちに、頭がポーツとしてきた。

左半身がしびれたようになり、気がつくとき智也はあの宇宙船の中にいた。

どこまでも続くチューブの中の、いつもの待機場所に立っていた。そばに宇宙服のようなものを着た二人の救助隊員がいた。わし鼻で白髪の隊長の姿はまだない。

足もとの降下口はすでに青く輝いていた。

ふと智也は頭上を見上げた。思えば、前や後や下ばかり見ていて、頭上を見たことなどなかった。そこで智也は思いもよらない発見をした。天井には小さいが、たくさん窓が並んでいたのだ。そしてその窓の向こうに見えたのは、まるで自転車の車輪のスポークのようにたくさん筒がこの宇宙船からどこに向かって伸びている様子だった。そしてそのスポークが集合している中心には、巨大な球があった。その球は水晶球のように透明で、しかも明るく輝き、まるで星のようだった。

智也はいまはじめて理解した。1本のチューブだとばかり思っていたこの宇宙船は、実

は、想像もできないほど巨大な自転車の車輪のような形をしていたのだ。智也はその壮大さ、荘厳さに胸がいっぱいになった。

するといつの間にか、目の前に隊長が立っていた。

「さ、出動しよう」と隊長は言うのと、いつものように4人は円になって手をつないだ。

足もとの降下ポイントがさらに激しく輝き、微細に振動し始めたと思ったら、真っ白な光に包まれた。その一瞬後、光が風のように去って行くと、智也は見慣れた場所に立っていた。

そこは代々木西原小学校の6年2組の教室だった。世界全体がボーッと光っているような、そんな不思議な明るさの中に学校は存在していた。

校庭に面した窓の前にこちらに背中を向けて生徒のだれかが立っていた。智也にはそれが誰か、すぐにわかった。西条君だった。

西条君は振り向くと、智也にこう言った。

「ぼくは、きみや、きみのお父さんのように臆病じゃない。ひきょうじゃない。ぼくには勇気も度胸もある。キミら家族のように、ひきょうなまねをして生きているのは違うんだ。父さんも同じだ。父さんはいつか、悪をこらしめるために帰ってくる。キミらをやっ

つけるためにね」

そう言うと、西条君は窓を開け、窓枠に足をかけると、壁に手をつけて窓に上った。窓枠に両足を乗せて立つと、西条君は振り向いてこう言った。

「だいたいさ、きみはさ、こんな度胸試しだつてできないだろ。きみは臆病者なんだよ。卑怯者なんだよ。きみのお父さんと一緒でさ」

そう言うなり、西条君は窓枠から校庭に向かってジャンプした。すぐにガンという音がした。西条君はプレハブの資材小屋の屋根の上に降り立ち、そこから教室の中の智也に誇らしげに目をやった。智也からは窓越しに西条君の顔だけが見えた。

「きみときみのお父さんみたいな臆病者じゃないんだ、ぼくとぼくのお父さんは！！」

そう叫ぶと、西条君は智也から見て右側に移動し、そこから助走をつけて左側の東玄関のひさしに向かってジャンプした。だが、智也は踏み切りが早いと直感的に思った。届かないのじゃないかと思った。智也は窓に向かって駆け寄った。ちょうど西条君が東玄関のコンクリートのひさしの端ぎりぎりに着地したのが見えた。だが、西条君のからだは自然に後ろ側にそっていた。すぐに西条君のからだはグラグラと前後に揺れた。表情のない目が智也の顔の上を横切り、西条君はうしろに倒れた。頭が一度プレハブ小屋の屋根にあ

たり、はね返されるようにして西条君は前のめりに落下した。

智也は窓枠に手をかけ、下の方をのぞき込んだ。

西条君がうつぶせに倒れていた。頭のあたりから、赤黒い液体が静かに流れ出し、コンクリートの上にたまっていった。

すると西条君は再び立ち上がった。そして消えた。

気がつくとき、西条君は智也の隣に立っていた。

「ぼくは、きみや、きみのお父さんのように臆病じゃない」

西条君はまた同じことを言った。智也の隣で、校庭を見ながら。

智也は隣の西条君に向き合っていると、言った。

「知ってるよ。……ぼくも、ぼくのお父さんも臆病でひきょうだってこと、知ってるよ。

だから、ぼくのお父さんは刑務所に入るんだよ」

西条君が不思議な表情で智也の顔を見た。智也が続けた。

「ぼくは勇気を出して、ノートを渡した。あのノートを盗むのはとってもたいへんだっただ。ぼくはきみの悔しさがわかったから。怒っているのがわかったから。ノートを盗んだんだ。そのくらいしかできなかったけど、ぼくはきみが怒っているのは正しいと思った

んだ」

西条君が言った。「ぼくはずっと学校にいる。どうして？ 家に帰っても、ここにいても、だれも話しかけてくれない。どうして？」

「きみはもう死んでるんだ」

西条君が言った。「そうだと思ってた……。けど、ぼくはお父さんに会いたい」

隊長の声が聞こえた。「これから移動するので、準備をしろ」

何の準備をするんだろうと思う間もなく、気がつくのと西条君と智也は会議室のような部屋に立っていた。

そこには西条君のお父さんとお母さんとお姉さんが座って何かの相談をしていた。

「お父さん」と西条君が声を上げた。だが、西条君のお父さんには何も聞こえない。

「お父さん、帰ってきたんだね。よかったね」と西条君はこんどはひとりごとのように言った。

「西条君」と智也が言った。「ぼく、西条君を宇宙船に連れて行くために来たんだよ。きみは忘れてしまったかも知れないけど、本当の故郷はここじゃないんだ。だから、本当の故郷に帰るために、宇宙船に乗りに行こうよ。ぼくも途中までいっしょに行くから。ね？」

「ほんとう？　宇宙船かあ。いいなあ。ぼく、少しずつ思い出してきたよ。ぼくが生まれる前のこと。ぼくがお母さんのお腹に入る前のこと」

「ほら、上を見てごらんよ」と智也は頭上を指さした。

三つのまぶしく輝く光の繭が浮かんでいた。

「ああ、ぼくも昔は、あんなふうにあるくて、光を出していたんだよ」と西条君が言った。

すると、会議室のような部屋の天井が真っ暗闇に変わったかと思うと、1本の光がスーッと降りてきた。それは輝くガラスと金属でできたSF映画に出てくるような美しいエスカレーターだった。三つの光る繭が西条君と智也を促すようにそのエスカレーターのまわりに集まった。

「西条君、行こう？」

「うん」

二人はエスカレーターに乗った。ゆっくりと二人は上っていく。

下を見ると、そんなことも知らず、西条君のお父さんとお母さんとお姉さんが話をして
いるのが見えた。

「おとうさーん、おかあさーん、おねえちゃーん、さよならー、さよならー!!」

西条君は下のほうに向かって大声で言った。

エスカレーターはやがて光に包まれ、気がつくどふたたび宇宙船の中にいた。

待機していた白い制服姿の看護班が微笑みを浮かべながら、西条君を両側から抱きかかえるようにして宇宙船の通路をどこかへと連れて行く。西条君は一度振り返ると、智也に向かってニコリと笑った。

「ご苦労、きょうの救出はこれで終了だ。地上に帰ってよろしい。では、また」
そう言って、隊長は智也に向かって敬礼をした。智也も敬礼を返した。

エピソード

銀座7丁目の信号を築地方向に曲がり、最初の角を右に曲がると、富士画廊という小さな看板が見えた。まだ午後6時だが、高いビルに囲まれた狭い通りにはすでに紺色の薄闇

がただよっていたから、富士画廊のガラス張りのウィンドウをから漏れ出てくる光はとりわけ華やかに見えた。

画廊の前に立つと、「能流登佳子個展」という文字と作品が印刷されたポスターが告知用の額縁に入れられて入り口手前に掲げられていた。その横の大きな一枚ガラスのウィンドウには、たたみと同じぐらいの大きさの巨大な作品が飾られていた。その向こう側にはすでに多くの人が集まって、ワイングラスやビールグラスを手に話に興じているのが見えた。

エミルと美紗がガラス戸を開けて画廊の中に足を踏み入れると、さっきまで無言劇のようだった人々が突然話し出したように、さまざまな声が聞こえてきた。入り口すぐのところには、贈られたたくさんの花輪や花束が飾られていた。

「お名前とご住所をご記帳ください」という声のほうに顔を向けると、なんと、黒のドレス姿のルミさんがニヤニヤして二人を見ていた。

「受付係なのよ」とルミさんは、芳名帳が載った小さなテーブルを前に言うと、「美紗さん、久しぶり」と美紗に向かってほほ笑んだ。

小柄な美紗は恥ずかしそうにおじぎをすると、エミルを見上げた。「絵本作家のルミさ

んだよ」とエミルが言うと、「あっ」と言っ、美紗は「すみません、いま、思い出ししました」とまたおじぎをした。

「ケプラーハウスの連中はもうみんな来ているわよ」とルミさんは言っ、「あら」とエミルたちの背後を見て声を上げた。

「先だっはほんとうにお世話になりました。何度お礼を申し上げても足りないくらい感謝しております」と突然頭を下げた中年の女性の横には、麻里とジルとごま塩頭の男性が苦笑いをしながら立っ、いた。中年の女性は鈴木のお母さんだっ。

エミルが振り返ると、鈴木のお母さんは「まっ、能流登さん」と驚いたように言っ、てまたしても深々とおじぎをした。

麻里はかかえていた花束を「あの、これ」とルミさんに渡した。

「ありがとうございます」とルミさんは言っ、横にいた画廊の男性に手渡した。

「さ、みなさん、中のほうへどうぞ」とルミさんにうながされて、みんなは人混みのほうへとゆっくり歩を進めた。

真剣な顔をしてエミルのママの作品を見つめていた天道さんを見つけた麻里たちが近づいていっ。鈴木君のお母さんはまたしても深々とおじぎをして、天道さんと何ごとかを

しきりに話しはじめた。

学校の教室をひとまわり大きくしたほどの画廊の中には、エミルの知らないママの美大時代の仲間や、画商や評論家などの美術界の人たちなどが大勢いた。もちろん、知らない人のほうがだんぜん多かった。母親だけの世界を垣間見る思いがして、エミルはなんともいえない嬉しさと同時に、ちょっぴり寂しさも感じた。

カメさんと大澤さんはどこかで飲み物係、おつまみ係をしているはずだった。

アンジェリーナとセーヌ川はどこにいるんだろうと、つま先立ちして画廊を見まわしてみると、セーヌ川は作品を1点1点真剣に鑑賞していたし、アンジェリーナは大畠編集長と楽しそうに話をしていた。

ママはどこにいるんだろうと探した。すると奥のほうでネクタイ姿の男性と楽しそうに話をしている。誰だろう？ そう思って、美紗を引っばってママのほうに向かった。

相手の男性は高村の父だった。Tシャツとジーンズに無精ひげという姿しか見ていなかったから、グレーの薄手のジャケットにパンツ、ネクタイ姿でワインのグラスをかかげる高村の父は別人に見えた。ママは近づくエミルと美紗にまったく気づくようすもなく、ときどき笑いながら高村の父の腕をたたいたりしている。ものすごく嬉しそうだ。

そのとき、瞬間的に妄想したことをできるだけ遠くまで振り払おうとでも言うように、エミルは頭をブルブルと振った。

「どうしたの？」と美紗が聞いた。

「いま、とっても気持ちわるいこと、想像しちゃった」

「なに？」

「内緒」

つまり、ママと高村の父が再婚して、高村兄弟と兄弟になるという妄想だった。それだけは勘弁して欲しい。

「なんか、おいしいもの、ないかな」とエミルは言い、また美紗をひっぱって奥の仮設のバーカウンターに向かった。白い布でおおわれたカウンターの向こうでは、カメさんと大澤さんがグラスにワインやビールを注いで並べたり、使用済みのグラスを回収したり、オードブルを皿の上に並べたり、忙しそうにたち働いていた。

「あ、エミルちゃん。そちらは美紗ちゃんかな」とカメさんが気づいて声をかけてきた。

「なんかおいしいもの、ある？」と聞くと、大澤さんが、「テオプロマのチョコレートがあるよ。お客さんの差し入れ」と言って、チョコが並んだ箱をこっそりと差し出した。

「美紗あ、このチョコ、ものすごくおいしいんだよ。うちの近くにあるお店でね」と言っ
て一粒つまんでエミルはポイと口の中に入れると、カメさんが「一口でいっちゃうなんて、
ぜいたくだねえ。一粒500円ぐらいするんだよ」と笑った。美紗もエミルにならって一
粒つまんでポイと口の中に入れた。

「わ、ほんと。おいしい」と美紗は小さく手を叩いた。

そのとき、手をつないだ麻里とジルが人混みをかき分けてこちらに向かって進んできた。
「ジュースとか、ありませんか？」と聞くと、「はい」とカメさんが二人にオレンジジュ
ースを手渡し、こう聞いた。「キミたち、どうすんの？ 仙台に戻るの？」

二人は顔を見合わせると、ジルがこう言った。

「実家に戻ることになりました。実はエミルさんのお母さんが……」とジルはエミルの顔を
チラリとうかがった。

「エミルちゃんのママがどうかしたの？」とカメさんがジルとエミルの顔を見くらべるよ
うに聞いた。

「おとといね」とエミルが言うと、大澤さんが「ルミさんが戻ってきた次の日だね」と言っ
た。

「うん。ジルさんがね、作品を持ってうちに来たのよ。ママに見てもらいたって。オレは学校に行っていていなかったんだけど、天道さんがママに連絡して、アトリエにジルさんを連れて行ったの。で、ママはジルさんの作品を見てびっくりしちゃって、ジルさんのお父さんに談判するってきかなくて、その日の夜に、ジルさんちに行っちゃったわけ。こんな天才に自分の道を進ませないなんて、ピカソに寿司屋をやれというのと同じだって」

「ピカソに寿司屋？」とカメさんがつぶやいた。

「その比喩はオレにもよくわからないけど、とにかく、同席した天道さんによれば、ママが画家で美大の卒業生だということから、お父さん、真剣に話を聞いてくれたんだって。それで、お父さん、折れて、美大進学にOKを出した」

ジルがうれしそうにこう付け加えた。「お母さんも喜んで、それで、家に戻ってまた高校に通うことに決めました」

そう言ってジルが麻里を見ると、麻里もうれしそうにうなずいた。

「エミルさんたち皆さん、うちたちの大恩人です」と麻里が言った。「お父さんとお母さんも仲良くなったし。占星術がだいぶきいたみたいです。お父さんもお母さんも、自分のことが他人のようによくわかったって、なんか、よくわからないこと言っていました。お

母さん、きのうから仕事を探し始めたんですよ。お父さんも、応援するからって。そのかわりって出した条件がおかしいんです」

「え、なに？」とカメさんがカウンターから身を乗り出した。

「出世しないこと」

「出世しないことお？」

「はい。オレは出世には興味ないって。一生懸命仕事はするけど、やりたいことをやって死にたいんだって。おまえも自由にしろ。おれも自由にする。おたがい自由にやろうって」

「それは占星術的な観点からも正解ですよ」と大澤さんが言った。

「明日、一輝の面会に行ってきます。家族3人で」と麻里は言って、唇を一文字に結んだ。「一輝君によろしく伝えてください」とエミルが言うと、「はい」と言って、麻里とジルは握った手を片時も離さぬまま、また人混みの中に戻っていった。

エミルがふと横を見ると、美紗が少し元気がない。

「どうしたの？」と聞くと、美紗がこう言った。「さっきのジルっていう人、なんか、守杜に似ているなって思ってた」

「お兄さんに？」

「うん。なんか、急に思い出しちゃって」

エミルは美紗の背中に右手を回し、無言でギュッと引き寄せた。

「ね、なんか楽しいこと、考えよう」とエミルが言った。

「たとえば？」と美紗が言うのと、「たとえば、えーと、えーと」とエミルが天井をあおいだ。すると美紗が「エミルさん、彼氏いないの？」と聞いた。

「え、え、いるわけ、ないよ」と答えた。赤くなる必要なんて何も無いのに、頬がどんどん赤くなった。

「赤くなってるよ」と美紗がニヤニヤした。

「いや、ほんと、そんなの、ないんだ、オレ。いままで、一度も、あー、なんだろう、考えたこともない、っていうか」

「あやしい」

「あやしくないって。てゆうか、オレに最も欠けているのは、なんか、そういう女らしさとか、なんつーの、恋へのあこがれ？ そーゆうの、オレ、ないみたい」

どうしてこんなにしどろもどろになるんだろと自分でも不思議だった。

もしかして、写真でしか見たことのないパパのせいなのかなと、エミルはぼんやりと思っ

た。

*

「ちつきしよー、今頃、うめえもん食ってるのかなあ」と高村兄弟の兄が扇風機の前を占領しながら言った。

「でも、ああいうパーティーってのは、ごはんは出ないんだよ。オードブルぐらいで」と弟が机の上のパソコンをカシャカシャしながら言った。

「なんだよ、オートデブって」

「オードブルだよ。ちょっととした食べ物のことだよ。クラッカーの上にチーズがのっかってたりさ」

「そんなもんしか出ねえの？」

「そういうもんだよ」

「大人しか来ちゃ行けないって言うけどさ、絶対、エミルとか行ってるし」

「それはしょうがないでしょ。自分のお母さんのお祝いだもん」

「うー、腹減ったあ!!」

すると勇貴が「兄ちゃん」と言いながら左足のつま先で見太郎の背中を突つた。

「なんだよ」

「メールが来た……」と勇貴はパソコンのディスプレイから目をはなさずに言った。

「誰からよ」

「……自縛死者探索救助隊」

「えっ」と見太郎は驚いて立ち上がり、弟の肩越しにパソコンを見た。

《高村勇貴君へ

自縛死者探索救助隊です。わたしは事情があつて、引越しすることになりました。

きみは西条君がどうして死んだか調べていると、メールで言っていましたよね。

わたしは西条君が死んだとき、そばにいました。

あれは事故です。

自分と自分のお父さんは勇敢で、けっしてひきょう者じゃないということを示そうとして落ちてしまいました。

西条君は勇敢でした。

クラスの人たちは西条君がどういう人かほとんど知らなかったと思います。

わたしは西条君のことを知っています。

西条君は目立ちませんでしたが勇敢です。ひきょう者ではないです。

お父さんのことを愛していて、その愛のために死んでしまいました。

わたしは引越してしまいましたが、高村君にお願いがあります。

西条君はとっても勇敢な男で、ひきょう者じゃなくて、お父さんをとっても愛していたりっばな人だったと、クラスの人たちや先生たちに知らせてほしいです。

ほんとうに絶対に知らせてください。

お願いします。

このメールアドレスはこれで無くなります。》

読み終わると兄も弟も深いため息をついた。

この自縛死者探索救助隊が神園田智也と知っているから、なおのこと悲しく思った。

そういえば、エミルが西条君のイーテル体を感じないって言っていたっけと二人一緒に

思い出した。

「西条君、天国、行けたのかな」と弟が言った。

「エミルが存在を感じないって言うんだから、お父さんが戻ってきたんで、安心して行っ
たんじゃねえのかな」と兄が答えた。

思わず二人して開けっ放しの窓の外に目をやった。

すでに日は落ちて、大山町から西原にかけての町は紺色の海の底に豆電球が散らばって
いるようだった。エミルが言う天国って、どこにあるんだろうなどと、また二人同時に考え
た。

《終わり》

(太田 穰)